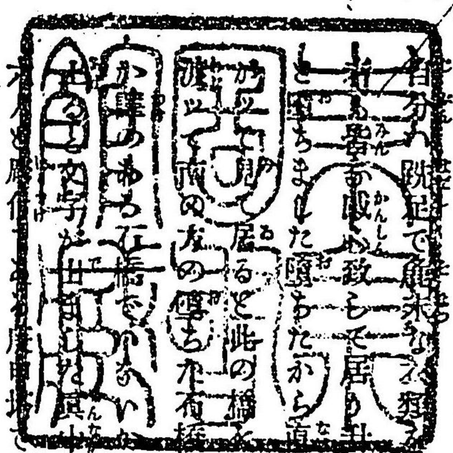
特12
733
ハ23666/22

第十五回

草三郎ハ金坂ヤ饅頭を搗いで賣事となり毎日朝晴いうちから出て賣て歩行き晝時分にハ歸ッて來て御飯を喰べ又た出掛けて少しも怠らず跣足で歩行き升が日が暮れると歸ッて來て

夫れから夜業ハ草鞋を二足ヅヽ造るがこれハ自分が穿のでハあい重兵衛爺イ婆アの分ハ跣足で能ないと思ひ着て商ひを爲る其行の正しいとハ實ハ生れ變ッた樣と秋間村の人ハ皆感心致して居り翌年ハなると何う云ふとか彼用水ハ掛ッて居る石橋と堕ちました堕ちたから直すと又堕ちました或日草三郎が臺の所ハ休んで居て石橋を往來する人が居ると此の橋を渡るものハ往くも還るも知るも知らぬも皆な北の方の橋ばかりが足を掛けないのでダが馬ハ四足で何うしても片足掛るものもあいから草三郎ハ妙あことも有るものだ何と其の次に落たとき自分が直す手傳をして石の裏を荒縄で磨きかけ出ハ石橋でかないと思ひ其の橋ハ足を踏掛るものもあいから草三郎ハ妙あことも有るものだ何



秋間村の馬が乘る

九十五百

が山の如く積でありますが只今でハ彼地ハお蠶所で願掛をしてハ蠶が殖えたからと石を上げますので三十六ケ村總鎮守の熊野權現の石坂不動の下へ引ました是から饅頭屋草三郎の名

庚申の日だと申升が不思議あともあるもの名主へ届け領主へ伺ひよあるとそれハ道端へ建て祭ッた方が宜からうと云ふので秋間村の入口の小高い所へ石を建て二間四面の槻造の立派なお宮が出來ました御宮の中ハ小石

が高くゐッて　甲「妙な饅頭屋だあれい親孝行で學問もあり天文も觀るそうだ　乙「全体行ひ正しく誠よ篤實で年い行かゐいが男振と云ひ品と云ひ元い武士よ違ひあい旗本の若樣だらう　丙「イヤ去る所の藩中で零落てアヽやッて居るのだらう抔と思ひ〳〵の評をするから饅頭を買ふ人も贔負よして草三さん置いてッて下さいと云のでは寺が十ケ寺よ女郎屋が十五軒在るが毎日歩行てい饅頭い宜ろしうお供い如何と云ッて行いて少しも骨惜みを致しませんで一寸其處よ灰吹があれば掃除をし障子の破れたのを見れば切張りでも爲て氣が利いて居るから女郎衆ゐどは感惚れをして　女郎「チヨイト本當よ若樣見たいな容子の好いと頭饅を二十ばかりよ今坂を五ッばかり置いてッて下さい菓子などい喰へ度いないがお前を贔負だから買ッてやるのだ抔といッて御客でも來と　女郎「チヨイトお前さん饅頭を買てやッて下さい　客「何チ　女郎「饅頭抔を買たッて……　客「饅頭ヤサ　女郎「うんなとをいはずよ買てやッて……お前ばん嫌ゐら食るから買て……然して祝儀を遣て　客「祝儀…饅頭やよ祝儀い訝しいナ　女郎「うんなとをいはずよお遣んなさいよ　客「うんなら錢の二百も遣らう　女郎「二百ばかり如何が悪いヨ二分もお遣りな　客「二分馬鹿〳〵しいおどいふやうゐわけで思ひがけあく儲かる俵百性衆も皆な饅頭屋さん草三郎さんと云て頭を下るやうよなる板倉樣の城中などでも立派な人達がどうも饅頭屋い素臣人でいな

いと云て氣を置樣よありましたダカラ行ひい正しく致し度もので是から翌年よなると追〳〵贔負も殖まして誠よ世間でも可愛がります

丁度文化二年八月十日の夕方でございます安中の宿端れ上野尻と云ふ處で是から先い原市左へ出ると只今い開けましたが磯部と云ふ處で右の方い高崎當村と云ふ處ろ其の野尻村の大きな松並木の根方に草臥て包を投り出して腰をかけて居る婦人い年の頃ろ十八九歳よけよ手拭を頭よ卷付け燻んだ浴衣の上よ羽織を引かけ鼠脚半よ白足袋で小包を置いて疲勞して居ると其頃い旅駕籠が悪かッたもので　駕籠屋「ヱー姉さん何處泊りでげす歸り駕籠ですからお安く遣りやせう何處泊りでげすへ　女「是から信州へ參るんですが餘程御座いますか　駕「信州へ……餘程でゲスが今晩い何地へ御泊りで安中泊りでげすか松井田でげすか原市よも能い宿が御座へやす　女「今晩信州まで參りますので　駕「是から信州へ行かれやァしませン碓氷峠を越さなけァ信州へい往かれませんヘェ迎も往けません晩う御座へますから松井田泊りでげせう　女「貴郎方よ御聞き申たら知れませうが年の頃ろ二十二三の色の白い鼻筋の通ッた口元の締ッた眼付の可愛らしい眉の濃い中肉中脊の好男で御座いますが此邊を通りい致しませんか貴郎方い通ッた人の姿や容貌を能く覺えて入らッしやると云ふとを聞きましたが　駕「道中の人なら何んなでも私共い大概知ッてますが此頃ろ通

ッたのですか　女「左様では坐い升……此頃ろ通つたか事よよると去年の秋かそれとも此春通ほりましたか其處い分りませんが事よりましたら此夏あたり通りましたかも知れません　駕「去年からですかそれぢやァ知ませんチおんぼ氣を付るたッて十日目とかなんとか云ふのあら知れるが去年の一昨年のと云ちやァ分りませんチ……おんでげすお武家さんでげすか商人さんですか何う云ふ身の上で　女「ハイ事よよるとお武家の姿で通りましたかも知れませんが大概まァ町人と申譯でも御座いませんが……けれどもまァ當り前の姿で　駕「ヘェ何だか些とも分りません……おんでげすかどうも去年通ッたのでい分りませんがは名前でも知れて居れば宿屋の宿帳を繰れば分るが　女「名前い草三郎と申人で　駕「ヘェー草三郎……聞た樣なお名前其方をお前さんが尋ねて信州までお行あさるのですか　女「左樣では坐い升是非逢はなければあらないのですが勝手を存じません初めての旅で足へ腫物が出來て歩行ませんから此處よ腰をかけて居りますので　駕「ヘェさうですか……惜いことをしましたチモウ一日早ェと宜いので……ェー龍太板鼻の渡で逢た方の名い慥か草三郎さんと云た樣な色の白へ鼻筋の通ッた眼のパッチリとした好男の旦那ヨ　龍「うんあ方よァ逢ヤァしめへ　若「ム、……餘計あとを云ふナ　龍「そんあ者ァ通りァしねへ　若「ェ……ソラ一昨日ヨ　龍「何處で　若「ソラ板鼻の渡で逢た口元の締ッた眉の濃い眼の黒へ好男ヨ　龍「一昨日逢たのァ鼻の轉ぐり反ッた色の黒へ肥滿くした人だ「ム、……分らねへとを云ふナ……ソラ此姉さんい草三郎さんと云ふ方を便ッて信州まで行かなければあらねへと云ふ其方の跡を追かけて行けば今日い大概和田峠の手前望月八幡方りで追付ぜ先い急ぐ旅ぢやァねへから急げバ追付と期う云ふのだ問拔だナァ　龍「ウム……逢へねへ……旨く考へやァがッた違へねへ旨く考へやァがッたナ……うれい逢たので出會しました渡口でチ色の白へ好男で鼻のパッチリした眼のパッた人で　若「何を云ふのだ　龍「ェー……は目ょ掛ッたことがあるので　若「姉さん一生懸命よ急いで通し駕籠で二日も往きやァ逢ひますヨ　女「ハイ有難う御坐います何卒通し駕籠で行て下さいお幾許で宜ろしうは坐い升か　若「ナニそれァ宜がすどうせ遊んで居るのですから其代り宿へ泊ッたらは飯でもは馳走して下せへ通し駕籠で骨を折て二朱でも宜うは坐へやす　女「有難うは坐い升どうかお急ぎなすッて　若「宜ろしうがす……龍太其方へ廻りナは腰の痛まねへやうよ布團をグッと……宜いかへ……姉さん此先よ横川の關所がは坐へやすが手形い有ませんか……おいそれぢやァ八釜しいから桐油をかけてチ宜うガスかへ向ふでチ大柄よ乘て居る者い何だと云ふと私が男でげすと云ふからお前はん口を利ちやァいけませんヨチ横川の關所を　龍「オイ……今夜い何處へ　若「松井田ヨ　龍「松井田へ行よ横川を通りァしめへ

・若「間抜め下らねへとを云ふナと原市の若藏板鼻の龍太と云ふ惡漢ゴ一抔喫れました旅馴ぬ娘ハ駕籠ゴ搖られて行くと垂れを少し上ッて横ゴ切れ杉並木の間へ駕籠を擔入れました左右ハ桑畠で向ふゴ山が見えるモウチラ〳〵灯の點きます時刻で　駕籠屋「姉さん駕籠を下しましたヨ　女「ハイ有難う存じます此處ハ何と申ます處で　若「此所か此所ハ桑畠の眞中で座へやす　女「オヤ桑畠の眞中……なんでこんな所へ那方がたハ……こんな寂寥い所へ駕籠を下して……什樣が座いませんヲお前さんがたハ何んだか怪しいと思ッたが……松井田とか云ふ處へ今晩行てやると仰しやッて……　若「オイ姉さん其の松井田へお連れ申が只々一度で宜うがすから云ふことを聽てお呉んなせへ私どもハ駕籠屋で姉さんの樣な美くしい娘と見るのハ初めてだお前さんだッて初めてぢやアねへ美男を尋ねて信州まで行うと云ふのハ生娘ぢやアねへ……ナぉんだと何を言やァがるんだへ巳等の眼ゴ掛ッたら百年目だ自由に慰さんだ上で宿場へ箝めて好い正月をするンだ苦圖〳〵しやァがるねへといはれて娘ハ驚愕仰天　女「アレー盜賊〳〵と一生懸命ゴ言ふがサアさうあると幾ら聲を揚げても詮方がない猿轡を箝めて二人で杉林の暗い方へ擔込うと桑畠の曲道を下ッて來ると細道から出て來た人ハデップリ肥滿た見上るやうな坊さんで是れハ正願寺の玄道和尚と言ふ金持で安中の女郎屋へ小金を貸し劍術ハ今井田流の免許取りで力ハ九人力ある

と言ふ妙な和尚樣でドン〳〵登ッて來ると眞暗やみで突當ったから駕籠屋ハ娘を投り出して……臀もちをつき一人ハ逃げる和尚樣ハコイッ怪しいと拳を固めて駕籠屋を二ッ撲たが痛いの痛くないのッて九人力で二ッ撲れたのだから二九十八人ゴ撲れた樣なもので駕籠屋ハトン〳〵逃げ去りましたから和尚樣ハ直ぐゴ娘の猿轡を取て　玄道「危險ヘ事だッた……近所の人か旅の人かヘ　女「ハイ有難ら存じます一人旅で信州まで參りまする道で駕籠ゴ乘れと云はれまして　玄「サウカ確氷手前ハ駕籠屋の惡いのが居て旅人が度〳〵困る……サア〳〵心配せぬでもえェ私ハ向ふゴ灯の見える正願寺と云ふ寺だ女一人で中〳〵信州地まで行くハ困難な事ッチャからまア〳〵心配せぬがえェ人を救けるハ出家の役ぢや案内して參らう一緒にお出でと小高い所を登ッて行くと可成の寺でハ坐いまして廣い所ゴポンヤリ灯が點て居る　玄「サアお上り……行燈の際へ出で……髪も毀れたらうが寺ゴハ女髮結が來ても用ハないから來ぬが宿場ゴハ女郎屋があるので髮結が居るから呼んで結べせる心配せぬがえェと慰めながら娘が行燈の側で毀れた髮を撫付け鬢のほつれ毛を搔上げて居るのを見ると驚きました田舍ゴハ稀れな美人十九二十ハ色盛りと鬢の通り色氣を含んだ處ハ何ともかとも云へぬ姿和尚樣ハ素より破戒僧だから餘念もなく娘の顏を見て居りました

玄「お前是れお前ヲ惡い駕籠屋ゴ苛められたが無理ハないお前ゴハ好い際致ヲヤ其儀

お美しい姿で年もいかんよ一人で信州地まで行くゝ危険事ヂヤ行くなら寺の出入の百性で堅い者があるから私が頼んで附けて送らして遣らうから心配せずよ今宵ゝ淋からうが一泊して寺で食ものゝあいが蕎麥か麥飯があるから　女「ハイ有難うは坐います方丈樣の傍通りが御座いませんと妾ゝ實よ殺されます處で　玄「うれゝ殺しゝせぬが辱しめた其上で女郎屋へ身を沈めて身の代金を持て行くので毎度あるとでコレハ女郎屋で買ふのが悪いと言ふて聞かせるが矢張り買ッて居るヂヤな……ムー好エ致標ヂヤな……お桑お桑居ぬか何所へ行きをッたノアノ旅で難儀した方を連れて來たが蕎麥搔でも拵へて食させ度いが……お桑ゝ居んかお桑……愚僧の寺よお桑と云ふ婦人が一人居る年ゝ三十八ヂヤが田舍寺で不自由ヂヤから注ぎ洗濯爲たり針仕事をしたりする俗よ大黑と云ふてナア妾あり又針仕事を爲る婦人ヂヤがお前よ云ふが子誠よ嫉妬やきでうれゝモウ何の樣な婦子が來ても種々あとを云ふて困らせるがお前も年もゆかぬからお桑も愚圖々々云ふこもあるまいがお桑が歸ッたら馳走して酒飲んで寐るヂヤ酒飲ませると能う寐る婦人ヂヤがお前向ふの三疊の所よ寐て居てお桑が寐付と私が夜中よ悄とお前の所へ行て賴み度とがあるが其時ゝお前否ヂヤと云ふとありますまいナ　娘「ハイ……何で御座いますかは用がは座いますなら此處で仰しやッて　玄「うれゝ此處でゝ云へぬ事ヂヤ　女「左樣では座い升か……アヽ妾ゝモウ傍暇を

致します　玄「お前お暇だッて是から出ると原中で狼が出るからムシヤ〳〵喰ゝれて仕舞ふ其樣なとを云ふ事ゝあるまい私ゝお前の命の親ヂヤないか恩をかける譯ジヤないが年とッてお前の樣お美くしい娘子を斯う云ふのシヤあへがタヽ年とると若い者と同衾おッて寐ると暖かい山家で寒いから寐るばかりで　娘「何卒傍免おすッて　玄「泣かいでも宜エウンと云て寐ねエ寐さへすれば行きおさい　娘「ハイでゝ並んで寐るばかりよどうか　玄「並んで寐るゞかりで宜エと話て居る所へ赤ら面の大黑が歸ッて參りまして　桑「ハイ今歸ッたヨ　玄「何所へ行た　桑「おしげさんの所へ行ッて參りました

第十六回

少し糸の値が下落てへので誠よ精した甲斐もねへから炬燵打てたゞ……オヤ〳〵奇麗な娘さんが……オヤ然でがんすか……オヤ〳〵さうで何處で……さうですか危險事で……人が悪くッて何うして近處の者でも夜ゝ歩かんねへでがんす能くゝれでもまアお前樣出會して……さうでがんすか能く旦那助けて……さうでがんすか……心配おしよ寛くらお在でおさんせへ能くまアそれでも何も盗まれおへで宜かッたヲ髮ゝヲまた私が出來もすめへが結ぶ位爲ますから心配おしよ……さうでがんすか　玄「まア〳〵宜アから蕎麥搔でも拵へろ

と是から詰らんものでも馳走を致し三疊の部屋へ寐かし無理ゑ酒を侑めましたから大黒も酔ひまして和尚と並んで寐たのでは坐いますが大黒が寐付たら行うと思ふから横着な坊主空鼾を掻いてグウ〳〵とやッて居ると大黒い酒の機嫌でスヤ〳〵寐る樣子だから掛ッて居る小掻巻をソーッと双ねて横身ゑおッて起やうとすると　桑「何處へ行ヤス」　玄「まだ寐ねへか困るナア寐ねへか　桑「眠たくゐると旦那ァ動き廻るから眠られねへだ何處へ行きやす　玄「エ……便所へ行だ　桑「早くヒョグッて來なんしよ　玄「直き行て來ると仕方がおいから便所へ行て歸ッて來て又寐るとドウ〳〵ッと松ケ枝ゑ當る風音微ゑ聞ゆる野寺の鐘ボタリ〳〵と落る清水の音寂ゑ寂〳〵と致します玄道和尚ゝ大黒の寐息を窺ふと今度ゝスッカリ寐付た容子シメタと悄〻ようとすると　桑「ウーン……何處へ行きやす　玄「まだ寐ねへのかナ……便所へ行だ　桑「能く便所へ行きやすおアといはれて仕方がおいから和尚ゝ暫くの間だ辛抱して居り升と今度てうゝ眞ゑグッスリ寐付きまゑたから悄と拔け出し　玄「危い處を助けた娘否とも云へず……年頃の娘ぢヤ好ニ女子ぢヤ……お桑め能う寐付やアがッた早く寐かさうと思ふと寐ねへで平常ゝ起ろと云ふても眠がッて起んが意地の惡いものぢやと悄と拔足して行くと裏口の戸を叩いて　男「ば免おせへ〳〵眞平ば免おせへ一寸明けてお呉んねへお休みなすつたか　玄「アレ誰か來やアがッた間の惡いときゝ

間の惡いものだ折角お桑が寐付たと思ッたら又來ヤアがッた……誰ぢヤ〳〵　男「宿の饅頭屋ですが一寸明けてお願ですから　玄「饅頭屋さんか濟んけれどもどうか明日來て呉れ眠たうてならンてナ今漸々寢付た處ぢヤ何卒明日ゑして呉れ饅頭屋　草「ヘエ誠ゑ夜中ゑ來て濟みませんが一寸明けてお願ひですからまだ深更ゝ沒座へやせんぜ　玄「漸々寐付た處ぢヤ　草「寐付たつて口を利て居るぢヤアば座へやせんぜ　玄「床の中へ這入て居るのだ　草「なんだ其所ゑ立て居るぢヤアば座へませんか　玄「ア、覗いて居やアがる……お桑〳〵宿の惡頭屋が來た明けて遣れお桑〳〵お桑寐ろと云へば寐ねへで起ろと云へば起きんお桑　桑「うでがんすか　玄「寐惚るお宿の饅頭屋が來たから明けて遣らんかと云ふと饅頭屋ゑ間惚をして居ると見えて飛起き　桑「今明けますヨ……オヤ〳〵能くマア饅頭屋さんお這入……アヽ眠かッた……サア　草「夜中ゑ來て濟ませんが旦那樣ゑお目ゑ掛り度ので　桑「マア此方へお出なせへ　草「旦那折角お寐みゐすッた處へ上ッて誠ゑ濟みませんが少し友達交際で一つ鍋の飯を食た者が此地ゑ居るので角田の親分の處ゑ厄介ゑなッて居るのが面倒だから少しばかりの餞別と持して獲足せ樣と云ふ譯でも澤山もやれませんが二十兩も遣れば宜いので被探索者丈けゑ早く立せ樣と思ッて夜中ゑ來たんですが二十兩チどうか旦那……日掛ゝ慥かモウ五つ掛ければ濟むと思ひましたが五つ分引て貰ても面倒

ですから……受人い角田の親分ですし私のとだから御損いかけいしません　玄「お前い堅いからナニ……日掛い四つ掛だヨお前い堅うて大概な女郎屋へ貸すより宜エから貸すが今夜い少し都合の悪いことがあるから歸ッて明日來て呉れ　草「さう仰しやらずよ何うかお願ひですから　桑「アレヨ貸て遣らんしょ饅頭屋さんい堅くッて日頃ろ譽て居るヂャア御座へませんか損をかける人じゃァあし夜中よ來るい能々だらうヨ饅頭屋の草三郎さんと云たら誰れも知らンものいねへ草三さん位へ堅へ人アねへだからチと草三さん〳〵と云ふ聲を三疊の部屋よ居た娘の耳よ這入ッたからッーッと襖を明けて見ると三年跡よ別かれた草三郎で御座い升から夢かと思ッて駈け出て　女「草三郎さん　草「アヽ悔りした……どうした　女「どうしたッてお前さん此處よ居たのかへお前よ逢ひ度いバッかりで信州まで行うと思ッて道で災難よ遭て此寺の和尚樣よ助けられて……　草「誠に濟おかッた手紙も迂濶遣られぬから身が定まッたら便りを仕やうと思ッて居たが……ナニカ阿母さんい壯健か　女「阿母さんが死んで親父さんが慾情よはまりお妾よおれと云はれたので妾いられが厭だからお前を尋ねて來たのだが……こんな嬉しいことおい一生懸命よ信心をした不動樣の御利益でございませう　草「誠よ思ひがけねへ事だ　玄「コレ饅頭屋　草「ヘェ　玄「此女子いなんチャ　草「コレい私が江戸へ置て來た妻で　玄「なんヂャ……然うかうれヂャ

ア早く連れて歸るが宜エ桑畠で悪い奴よ遇て辱められる所を助けて連れて來た　草「何ともどうも有難うは坐へます……今夜い深更よ是れから女を連れて歸ると重兵衛さんい頑固へ男だから品行が悪い樣よ思いれても厭だから今夜一ど晩泊めて下さる譯よい參りますまいか　玄「うれい宜えとも　草「誠よ御厄介ですが私も一緒よ泊めてといはれて和尚い目的い外れたが仕方がないから草三郎と彼の娘のお歌と並ンで寐かしましたが三年振りで逢ッたのでは坐い升から母のとやら何や彼や話い盡きませぬコッ〳〵囁く話が耳よ這入て坊主い寐られません寐やうと思ふと大黑女が鼾をかく鼠いカダ〳〵云ふから尙寐られませんでムッ〳〵して居ると表の戸をトン〳〵〳〵　男「一寸明けてお呉ンおさへ何卒ば願へヤます　玄「種〳〵な者が來るあァ……ナンヂャ　男「エー宿から參りましたが明日葬式でがんして朝早くですが一寸お明けなすつて　玄「然うか……お桑〳〵明日お客樣ヂャと早う來るとお桑〳〵　桑「アイヨ今明ますヨとお客樣と云ふので慾があるから大黑女が飛起きて僧り戸をガラリと明けると面部を包だ者二人言日編の股引脚半足袋よ草鞋穿で銅金の長刀を差し帶の上へ上〴〵をしてギヲつくのを拔て大黑女の眼の前へ突き付けたから大黑い腰が拔けてベタ〳〵と土間へ坐りました　賊「神妙よしろ和尚い何處よ居る　桑「ハイ……と慄へて後へ指しするばかり　賊甲「兄哥此處の寺よ女が居るおァ訝しい譯だ寺よ女が居

るのか　賊乙「大黒女だ　賊甲「いめへまし い坊主だ高利を貸して妾を置きアがッて……婦人が駈出すといかねへ束縛て置かう縄ァ出せ〳〵とグル〳〵縛ッて米俵の上へ乗せましたナンボ大黒だからといッて米俵の上へ乗せないでも宜ささうなもので二人の賊ハ土足で上り和尚の寐て居る所へ来て　賊甲「坊主起ろ〳〵　賊乙「ヤイ神妙よしろキャアとかパアとか云へば餘儀なく細頸を打落さるければおらねへ何も望ハねへ金が欲くッて来たのだサア被捜身體だ金ヱ出せと云ふと和尚ハ蹴起て四布蒲團の上へドッカと坐り　玄「来たナ這入たナ　賊「ナニ這入たとハおんだ這入たから此所ヨ居るのだ　玄「来るぢやらうと思ッて居たが汝等此正願寺と云ふとを知らずヨ来たか玄道和尚と云ふ者の居ると知らずヨ来たナ金取りヨ来たら遣らうが一体汝等ハ金が欲いか命が欲いか何方が欲い　賊「いめヱましい坊主だ……サア素首が資本だ金が欲いンだヱ　玄「然うかそれヂャア金遣らうから待て居れと蒲團の下から三尺二三寸の鐵の延金を取り出し　玄「サア持てるか肩へ乗せると重いが持てるか　賊「ナニ此の和尚生意氣な撃殺仕舞へと云ふ二人ハ吾妻の清次に大戸の喜三郎といふ八洲ヨ取圍かれ斬拂ッて逃げた賣出の長脇差「此和尚めと横から斬て掛るをカチリと受止めドンと打込むと大戸の喜三郎ハ臀餅を搗く　清「オヤ坊主めと切込む所を受け流がしてポンと頭を打ッたので清次ハ面部を破ぶられ後へ下る喜三郎が起上ッて

横から斬て掛るを引拂ッてヤッとやると刄物を落した　玄「サア何うヂャ一時ヨハ殺さぬ少とづゝ爲し崩しヨ撲殺すぞサア弱い奴だ何うしたと苛められて居るのを先刻から三層の部屋で見て居た草三郎ハ心配して喜三や清次が来たかァゝ已れが惡かッた正願寺へ行ッて金を借りて来てやるから逃げろと云たのを聞て二人が来たか罪ハ累ッて来るが打遣て置けゞ正願寺の和尚ヨハ二人とも撲殺れる鮎の川の親分の所ヨ居る時分世話ヨあッた二人何うかして助け度と心配したが此の中へ飛込ヨも側ヨお歌が居りますから怪我をさせまい若しことがおこッたら此所から逃げろとおうたヨさしづをして草三郎ハいのちがけで今喜三郎清次と玄道和尚と爭鬪のところへ飛び込むヨ刄物ハ持て居ず棍棒も無いので困りましたが出る機會ヨ倒しましたのハ杉戸でコレ幸ひと其の角を持ちまして左右の間だへ入れ　草「何卒私ヨ免じて暫く待てお呉んなせへ喜三郎清次大哥どうぞ待て呉れと云ふ思ひがけない事で何うして此處ヨ居るかと二人ハ後へ下る玄道和尚も驚き　玄「饅頭屋知て居る者かと問はれて實は是れ〳〵のもので鮎の川の又五郎親分の家で一つ鍋の飯を食て居るうち又五郎親分が死でから角田の親分を尋ねて来て闘らず私も三年振りで邂逅ました此者を殺しまして私が親分ヨ義理が立ちませんから鮎の川の親分ヨ義理立をして金を借にお前さんの處へァゝやッて無心ヨ来て高利を借りて立たせる積りのところ箇樣な譯でどうぞ此事ハ内

問沙汰よして遠くへ走らして遣りたいと云ふ草三郎の親切よ流石の和尚も感じてそんなら二十兩貴様よ貸さうと云ふので是から金を借りて直よ餞別よ遣て立せましたのゝ夜明けごろで草三郎ゝ夜の明けないうちよとお歌の手を引て秋間道へ歸ッて來たが爺さん婆さんゝまだ寐て居り升　草「お歌已が厄介よあッて居る家ゝ白藏大哥の實の親だ常陸の牢よ這入て兄弟分の義理を結んで假令盜賊でも惡黨でも世話よなッた廉があるから大哥が俺仕置よあッた事ゝ知らずよ居るから義兄よなり代ッて子の無へ二人の爺さん婆さんの死水を取て遣らうと思ッて辛抱して居るのだが大哥のとゝ言ちやァいけねへヨ白藏大哥の事ゝ口が朽ッても言ちやァいけねへ已れの口よ從て居るヨ……お婆アさん今歸りましたヨ……能く寐て居るナお婆アさん今歸りましたヨと自分が稼いて爺さん婆アさんを養ッて居るからも食客の樣な心持でトントンと靜かよ叩くと爺さんゝ先に眼を覺して　重「草三が歸ッた婆アさん明けて遣ッて……能く寐る婆アさんだナア本當よまア耄碌して仕舞たぜ草三が歸ッたヨ　婆「アイヨ知て居るヨ　重「知て居るから起きねへナ　婆「大丈夫だヨ秋間の先から出たのゝ燃て來る氣遣エねへヨ　重「火事ぢやァねへゃうちの草三が歸ッたのだヨ　婆「さうか火事だと思ッて……今明けるヨ草三人屑遲く歸ッたナ　重「夜が明けかゝッて居る　婆「アゝさうか早く歸ッたナ　重「ナニを云ふのだ早く明けねへナ　婆「アイヨ今

……オヤ〳〵明るくあッて來たヨ……サアお這入　草「誠よ半間な時分歸ッて濟みませんナ　うた「ハイ俺免なさいと常よ堅い草三郎が若い婦人を連れて來たから婆アさんゝ訝に思ッて　婆「あんた草三が連れて來たヨ　重「何誰をお連れか　婆「イヽエ眼張て來たのだヨ　重「犬をか　婆「イヽエ女の子を奇麗な十八九よある娘を　重「さうか能く連れて來た草三氣が利かねへ此方へお入れナ　草「此方へ這入ねへ……跡とゞナ……誠よ半間な時分歸ッて來て濟みませんナ　爺「半間だッて遠慮もあよもいらねへ夜る夜中歸ッたッてお前の家だ婆アさんと平常さういッて居るよ此所ゝ草三の家だ已とお前ゝ隱居だッて草三が來て助かッて居るのだからどんな事でも遠慮する事ゝねへ本當に能くまア……お前さん此方へお這入なさい草三の家だヨ私どもゝ食客みたいのものどうか此方へ　うた「お前よお目よ掛ります……何分末行永くお心安う願ひます……好いぢ容姿だ平常さう云て居るので草三も獨身で堅くして居るが樂みの無へ人だからどうか何んなのでも一人世話アしたいと心配する人もありますが近所の娘や何か大概な者ぢや氣よ入るまいが小兒でも出來ると永くも居るだらうが面白くねへッてフイと行かれると困るッて心配して居たが能く來てお呉れた……何所よ板鼻よかへ　草「ナアよお婆アさんさまりゝ惡いがチ實ゝ平常話をする江戸の根岸へ置て來たお歌と云ふ夫婦約束

を爲た娘で御坐います

第十七回

婆「まアさうかへ是れいまたどうもお初よお目よ掛りましたモウチ草三が時々お前さんのお噂をするからチ何故連れて來ないと云ふとナアニ事故があッてと云ふからうれも左樣かと云て居たのだがまアどうも……不調法者で御座へましてどうか爺さんも私も草三の世話よあッて眞身の親か伯父伯母の樣に大事よして呉れ誠よどう云ふ縁だか他人で居て斯うあるのハ何かの因縁だらうッて爺さんと毎度話して居るので……まア左樣で御座へますか何處で……オヤ〳〵原市の出際の松の……彼處に夜を明かしてかさうでござへ升か早く連れて來なされバ宜いよ……それを知らずよまア信州まで出越して仕舞へバ此方も知らねへ同士で……さうかへ因縁の深いので草三ハお前さんの事バかり思ッて居て此方へ來ても博奕もせずお女郎買一度したともあい斯うやつて木綿ものを着て箱を擔ついで跣足でお菓子を賣て歩行て……何處等へ往ッてもキャレコ云はれ只の饅頭屋さんでねへッて神樣のやうよ皆さう云てチ……まづ好い鹽梅でた座へました　重「本當よどうぞチ末永く……一人女房と極ッたものがあければ私ども爺イ婆アで世話も出來ず……其樣よ御叮嚀よ御挨拶をされてハ困る……ナア婆アさん　婆「本當よ嬉しいたッて子供が二人出來た樣お心持して誠よ有難い　草「窓よ何も知らぬ者ですが貧乏世帶をしたから團子を搗たり灌ぎ洗濯位ハ出來るから……能く婆さんよ教はッて働らかあけれバならねへ……焚付るのハ己れが教へや。う　婆「うんなとハ己がよ出來るから能エよあんでも草三の手助りよあらふと思ふなら糸を繰ることを覺えなさへ此處ハ糸處で御座へますから糸を繰る事が上手よあれバ六才の市が立ってお前さんのホヤチよなるから……何んよしてもまア芽出度〳〵と爺さん婆さんも大悦びで是から焚付るやら何やかや致しましたさて斯うなると草三郎が毎日稼いで歸ッて來ると良人思ひのお歌ハ誠よ能く世話を致し升うれよ年ハいかぬが親孝行で團子茶屋おどをしたから餅も搗ける飯を焚く事ハ却ッて婆さんより上手で又た灌ぎ洗濯までして爺さん婆さんよハ眞の親の樣よ事へ孝行を竭し升ので兩老も大悦びでマア〳〵安心したと云ふ事よありましたするとそれから五日ほど經て十五夜で御坐いまして草三郎ハ饅頭の箱を擔いで平日の通り商ひよ出ると山田屋文次郎と云ふ宿屋が在りまして昔しハ脇本陣であッたと云ふ事で只今でも連綿と殘ッて居り至ッて繁昌お宿屋で御坐い升うれへ御出よおッたのハ尾崎直右衛門と仰しやる板倉樣の御家中で五百石取て年五十四才で頭髪ハ胡麻鹽だが壯建で眷割羽織を着た立派お方で上段の間へ坐ると高麗で茶を汲んで出す菓子器が出るお供ハ離れて待て居り升主人文次郎ハ其所へ出て會釋を致し　文「コレハ能うてう御尊來で此程ハ

大分淫無沙汰よ相成りましたがは案内様の通り秋口ハは獄講が追〻下山致しまして夫れよ一新講或ハ春木講山田講おどと澤山淫坐いましてゴタ〳〵日暮方からハどうも席も淫坐いませんで斯の如く何や彼や取込で居りまして存じながらもは無沙汰致しましたが今日ハ伺はふと存じて居る處へ能うこそは入來では寛りと……エヽ嬢さまハは勝れ遊ばされぬとを伺ひましたが如何樣ですか　尾崎「ヘイ此間ハ其方尋ねて呉れてまた家内迄來て結構な土産物まで心配して誠よ氣の毒ナまア皆變るともない娘もまア〳〵是れがこれと云ふ所もおいが浮羅〳〵病で些と勞性質で困るヨうれよ付て此度折入て其方よ頼み度とが有此事ハ實よ直右衛門恥入る事だから口外して呉てい困るが其方ハ物堅いから口外ハしおいだらうナ

文「エー決して口外ハ致しませぬがどう云ふ事では坐いますか　尾「娘の病氣の事よ付てナ頼み度ので　文「ヘエ決しては心配ハは坐いませんアレハ中〻一寸願ひましても出來ませぬが只今一心行者と申す淫獄講の先達ではみますれば法力を以て忽ちよ全快致します狐付では坐いますなら速かよは任せよおれば一心行者を頼みまして嬢樣の祈禱を頼み御屋敷迄同道致します　尾「祈禱を頼むのでハおい左樣ゐ譯でハおい　文「ヘエでハ淫藥を　尾「イヤさうでもおい貴樣が世話をして居る饅頭を賣て歩行く草三郎と申す男があるのう

文「彼の者がどの樣お不調法を致しましたか誠にどうも精神ハ正統潔白お者で御座いますが且替り世辞ハ頓と御座いませんで大きよ旦那樣がたよ對し不調法お事も有ませうが何云不調法を致しましたか存ませんがおり代り御詫を致ます商ます饅頭今坂羊羹おどの餡の中よ芥でも這入て居てさう云ふものが御家中よあッてハおらんと御立腹で私に代ッて彼へ叱言を云へと仰やるなら饅頭問屋丸田屋清五郎を呼んで　尾崎「饅頭屋の叱言でハおいヲさう先潜りをしてハ困るナ……其の饅頭屋と云ふものハ前〻何か水野家の藩だとか云ふとも承ハッたが劍術も相應よ出來又た學問も可ありあると云ふとで跳足で饅頭を賣て居るハ誠よ惜いものと云ふ評があるので殿樣の淫耳よも觸れ何者ぢやとは問ひがあつたとき重田おどから言上げたともあり此間下野尻の喧嘩の折り城中の下役の者二人が旅人三人を敵手よして決闘て居る處を饅頭屋が通かゝッて城中の者よ理解を言ひ聽け旅人を助けたと云ふがどうも其云ふ所が如何よも尤で城中の者も大きよ感服して成程と云ふ是れを私の家内や娘が通りかゝッてすみやと云ふ茶見世があるあれよ腰を掛て見て居て感心したと云ふそれハズット春の事であッたが何ういふ心掛の者か如何よも妙だテ……其處で今日私しが參ッたのハ誠よ恥入ッた事であるが娘さわがどうも淫羅〻〻病で醫師も丹精するが効も思ふ樣よ驗かず何か胸よ思ふ事があると云ふので段〻問ひました所が母よ打明けていふよハどう

も彼の饅頭屋さん位お志の者ゝない武士も及ばぬ立派な人だと思ひながらも向ふい端た商ひをするもの兎ても何う斯うといふ譯よいいかあいから思ふまいとゝ存んじながらどうもソノ胸よ絶えず草三郎の事のみ思ふのが累ッて病氣よなり初めた事で御座ろうれも母よ問ひ詰られて二月も掛ッて漸く云たので病根も分ッたが……文次郎笑ッて呉れるナ何もソノ草三郎の男振が好いの姿がよいのと云ふ譯でいない姿ゝ彼の通り跣足で饅頭を賣て居る男だからうんおとゝないが如何よもソノ立派な精神うれよまた疾から御上よもお聞及びで當家のお抱えよおさるといふお噂もあるから左樣なッたらどうか嫁よ行き度といふ心があるので年もいかぬよ耻入ッた樣子だがどうか文次郎惜いがナ私が娘が幾ら思ッても饅頭屋よ遣る事ゝ出來ぬから饅頭屋を媒介して小祿でも板倉伊豫守家來何の某となれば娘を遣り度いさうなれど悴も後見だから當人の心次第出世も出來るがどうか話ゝ出來んかナ　文「へー……どうも誠よどうもエーどうも有難い事で冥加至極のとで坐いまして……草三郎と申ものゝ實ゝ心得のある者で坐いますが彼の通り跣足で商ひを致し殊に草鞋を造りますが自分ゝ穿かず爺ィ婆アよ穿かせるが身寄親類でおいものを裝ひますソノ志と云ふものゝ名主役を勤めるものも感心して居ります くらゐ又た行ひ正しく天文も分るさうで……誠よ當人が氣よ適ひ私も世話を致す甲斐が坐い升尾崎樣の後見から此上もおい事で手前

當人よよく申聞けます私も商ひおど致して居るゝ惜いと存じて居ります何うか何なりと御領主樣の御役よ立てたいと心得ますと話して居るゝ表で「饅頭屋で坐います今日ゝようがすか今坂ゝようがすかと云ふ聲がするので　文「オイ誰か饅頭屋を呼びナ　男「ヘイ草三さん〳〵……一寸旦那が申たい事があると仰しやるから足を洗ッて……菓子ゝ見世へ置て……サァお上り　文「これへ草三郎を呼寄せませう　尾崎「呼ぶゝ宜いが予ゝ此處よゝ居惡い次の間よ居から其方から下話をしてさうして面會しやう　文「有難う御坐います篤と申聞けますコレ只今……煙草盆とお茶をといふので運ぶ草三郎ゝ何も存じませんから其處へ參り升と　文「どうぞこれへ其處ぢや話が出來ませんから何うぞ　草「何か御用で文「ハイ其處ぢやァ話が出來ませんからまづコレへ……山田屋文次郎實よ恐れ入ました誠よどうも……其處ぢやァ話が出來る譯のものでゝ坐いませんから何ぞコレへ　草「旦那串戲ッちやァいけません今日ゝ十五夜で閙がしいから　文「誠よ久しく拜顏を致しませぬが何時も御恐悦で　草「串戲云て……旦那喇弄ちやァいけねへ　文「からかやァしませんまづどうも此上もおいどうもお僥倖のとでどうも行ひゝ正しくせんければならんもので自然よどうも天の御惠を得ました事で實よ恐悦中上升ヨ　草「旦那一体なんで……

文「襖の内よ御出でおさる御方ゝ御重役の尾崎樣と仰しやる五百石もお取りおさる御羽

振の宜いお方で其お孃樣いお十九でおきわ樣と仰しやるがお前ゑ戀煩ひで　草「申蟲云ッちやァいけねへ旦那イヤだよ　文「イヽヤ眞實だッテ饅頭屋に惚れて居るから遣り度が正可跣足で賤商をする者ゑハ遣れぬと云て彼アして置くのハ誠ゑ惜いものだから饅頭屋が箱を棄て大小を帶し小祿たりとも板倉樣の家來ゑふれば速かゑ娘を遣てハ自分が後見ゑあつてお前ゑ出世をさせ樣と仰しやるので……捨て置けば孃樣のお命ゑ係はるから文次郎願むと仰しやるので……有難いだらうと小聲でいふので　草「あんだか聞えねへ最と大きお聲で

文「お前を板倉樣の家來ゑして孃樣を嫁り度と云ふお願みだ　草「旦那眞實ですかへ

文「眞實だッて……隣りのお座敷へ來て入らつしやる　草「眞實なら旦那左樣云てお呉んゐせへ重役の立派お方が其樣ゐ馬鹿お事をお云ひあさるからどうも私どもが困りますッてねへ下役の人が此頃ハハ領主樣を笠ゑ着てそれハどうも威張たッてカラモウ動もするとピンタ打斬ッて此間も野尻で三人斬られ損ゐい跛足ゑなつた奴も有がゐんてハ弱へ者苛めするかこんな情けねへ事ハねへハハ年貢上納ゑ付て百姓の苦みてへのハ些ともハハ存知ハハ座へませんがどうか二ケ年分前納ゑしろてエのハ無理でごせへ升から多勢の百姓が集つて相談して歎願したが聽入られねへので今ハ轉覆かへる樣お騷ぎの處へ少し百姓が惡口を利くと直ぐ引コ抜て斬る樣お譯で實ゑ酷い無暗ゑ人間を人參か牛房の樣ゑ斬られてハ堪らねへ……

……何も大事ゐ人間を殿樣が殺せと云ふ譯ぢやァあり升めへが端たねへ者ハ板倉樣ハ情けねへ人だハハ領主樣ハ酷いと云て何にもハハ存知のねへ殿樣のハハ名前ゑ隣り升是といふも皆お家來の惡い奴が爲のだが下役ゑ極ッたものだ上役ゑそんゐ事をなさる方ハねへッて古寺ゑ寄合した時いッたが今ゑ百姓一揆でも起ッて竹鎗でも持て城中へ五六百人も踏込だら大事が出來る私が心配したッて無益だがハハ城下ゑ住で毎日城下を歩行て商へして居るとハハ領主樣ハ大事だから心配するが如何ゑも酷い……尾崎樣と云ふそんお馬鹿な重役がゐるから下役まで馬鹿ゑゐるのだ　文「コレ〳〵馬鹿お前ハ少し逆上せて居るナ……隣室ゑ入ッしやるゑお前酩酊して居るナどうも醉ふと前後を辨へず亂暴お事をいふから困る　草「ナニ私ハ醉ひハしません……うれが腹が立と云ふなら尾崎樣が是へ出て私の首を斬るがいヽ重役がりんお馬鹿お事を云から大事が出來る饅頭屋を見染たと娘が云たッて……私を武士ゑ取立ッて若し私の身体ゑ身狀の惡い事があッたらどうおさる其時ハ尾崎樣ハ腹を切ッて言分をしゐけれアおらねへ大事お事だ重役の孃樣が端たねへ商へをする者を見染て戀煩ひおんてエりんゐ娘ハ本統の武士おらポカ〳〵斬て仕舞なけりやァならねへ　文「コレ〳〵お前ハ少し逆上たッ　草「串戲ぢやァねへ娘の首を切るが宜い殿樣のハハ名前を汚して不埒だ……ハハ城下でハ下役の者が無暗ゑ人を斬るから スッパ拔をしてハゐらねへと觸れでも出さる

けりやァあらねへのだ實ん重役が盲目だて誠よ濟ません……左樣ならと云ひ捨てゝ出て行きました山田屋文次郎ん眞青よなッて居ると襖を明けて尾崎直右衛門樣が出て參りました其頃の事だから二人とも斬られても仕方がないのだが尾崎樣ん穩かよ　尾崎「文次郎氣の毒であッた　文「誠よどうも草三郎ん常ん猫の樣でも坐いますが酩酊と彼の通りで嘸ぞ立腹でも坐いませうが酒狂の上の事とどうか宥しを願ひ升　尾崎「中〻胆の強い奴だ彼れん金づくや扶持づくでん動く人間である尾崎直右衛門實よ恥入ッた文次郎饅頭屋よ顔向が出來ぬから早速歸宅して饅頭屋の云ふ通り重〻不孝の娘首を斬て饅頭屋よ分疏致すそれより外に仕方ねえ宅へ歸ッて娘きわを手打よすれぞまづうれまでの事で……宜しい歸るとしやう　文「どうしてうれいと云ふも耳よかけず嗚呼恥入たと誠の武士で坐い升から歎息して城中へ歸りふなりました

第十八回

草三郎が世話よおつて居ります家ん秋間村と申す處で坐いますが秋間の内慈正寺村と云ふ處よ二箇の用水が坐います二千五百石の田地へ灌漑ます用水で水ん一杯張て居りまして其水を取て車を仕掛けて米を搗て居たので現今よ水車の重兵衛と申ますが名が替つて藤兵衛よなつても安兵衛よなつても水車の重兵衛と云ッて唯今も其家が殘つて居ります其少し手前の横町を左りへ這入り坂を登ると熊野權現がある三十六ケ村の總鎮守で本祭りのときは隨分賑やかでも座い升が蔭祭りでも商人が少しん出まして參詣人が御座います丁度九月朔日で蔭祭りで坐います重兵衛の婆さんんお歌よ向ッて　おまよ「お前此方へ來て働いてばかり居て少しも近所へん出ないが今日ん熊野權現さまの蔭祭りで可也人も出るから見に行たら宜からうと婆アが勸誘よお歌ん草三郎の爲めを思ッて働いて居て榮曜遊山おど致す量見ん少しも座いませんが餘り勸誘ますするから否と云たら惡からうと思ひまして其の身うの儘で婆アさんと一緒よ藁草履を穿いて外見も飾りもなく熊野權現樣へ參詣致して草三郎の惡事災難の無い樣よと願人を思ふ一心で坐います商人も二三軒出て居りますが未だ參詣ぃそんあよんん坐いませんけれども村の若い者ハ其頃ん江戸者珍らしいから彼處よ居るん江戸者だ好い女だ江戸者だ〻と多勢集ッてゾロ〻隨從て來るからお歌ん薄氣味が惡く早く歸らうと石坂を下りよ掛ると後から押されたので辷ッて五六段の石段の處へ臀餅を搗く突端よ前足を出すと今上りかゝつた武士の小袖の紋所を泥足で摩たからべッたり紋所へ泥が着きました濃ん納戸の紋付行儀雹の上下で蠟色鞘の茶柄の大小で尾崎直之進と云ふ年三十一で立派な坐ん方が若黨草履取を連れて熊野權現へん代參で坐いますが今石段を上らうとすると拜領の九曜巴の紋所で板倉樣のん城下でん大切

お紋では坐いますそれへ土足が掛つたのだからぴら〳〵と家來が來てお歌を捕へて脇へ引て行きまするおまよは驚きまして着物の泥を振ひながら付て行くと柔和は武家で家來よ手荒ひ事をするナと仰しやる多勢人が立て居るから家來が彼地へ退けといッたので皆お逃げて仕舞ました　尾崎「コレ〳〵何處の者だは城下よ住居する若かは領分の者か但しい他から是れへ參ッた者か　おまよ「ハイ誠よ不調法致しまして相濟ません私どもいッイ此の秋間道へ掛りまする處よ居る奥石重兵衛と申者の女房では坐いましてこれいホンの預り娘で當頃參ッて居るものでは坐いますがは參詣よまゐりますと若者がワイ〳〵後から附いて參ッて石段を下るときに押されまして辷り落る機會よは召物へ泥を着けて何とも申さう樣もは坐いません何卒御勘辨あすッて誠の不調法では坐います押れてのはづみの事では坐い升ろう　おまよ「ハイ何卒は勘辨を願がひとうは坐います　尾崎「其の方の娘か……何處からまゐッて居るか　おまよ「ハイ此いあのは城下を商ひをして歩行ます饅頭屋草三郎と申者の女房で歌と申者では坐います　尾崎「フムン……彼跣足で饅頭を賣て歩行く草三と申者の家内で歌と申か　うた「ハイ　尾崎「左樣か……兩人とも山田屋まで參れと是から家來よ引かれて山田屋文次郎の奥座敷の離れた處へ行くと　尾崎「鹿相でもあらうが殿樣か

ら拜領したは紋所へ斯の如く泥足で蹴られてい上へ對して捨て置かれぬから婦人の不調法なれども夫があるとあれば其草三郎と申者よ尾崎直之進の宅まで罷り出ろ不禮至極る婦人此場で手打よすべきあれども良人が有るから其ソノ草三郎よ歌と申者の頸を斬て參るか但しい草三郎が參ッて頸を渡すか何の道早々其返事よ及べ此事い他よ漏れざる樣致せ他よ漏れると宥さぬぞ……文次郎其方よ確かと兩人預け置ぞと言渡して出て行きました其時分のは領主様の權式で市役の尾崎樣が他言いたならぬ確と預け置と云ふので山田屋文次郎も眞青よなッて如何して宜からうと心配致しまして名主樣へ詫言を頼みよ行きますと名主樣い折惡く留水車の重兵衛い此事を聞いて心配して名主樣へ詫言を頼みよ行くと是も信州まで行たと云ふので爺さんい主でございますから角田駒四郎親分を頼みよ行くと是も信州まで行たと云ふので爺さんい氣が氣でおくグル〳〵廻ッて居る處へ箱を擔いで歸ッて來たい草三郎で　草「爺さん今歸ッたヨ　重「オヽ……草三かまア何とも申譯がねへ飛んだ事よなッて……ドどうもうちの婆ア老耄して居やアがる　草「止ねへ又た始ッたか夫婦喧嘩も若へ者なら宜いが爺さん婆さんの夫婦喧嘩ハゾッとしねへからヨお互に柔和しなけれアならねへ　重「柔和ッたッて愚よけへッて仕舞た老耄して仕舞たのでなぜと云ふよ自分が見てエもンだから熊野の權現のお祭へ見たがりもしねへお歌を誘ッて一緒よ行たのだすると若い者がワイ〳〵云ふので

押されてお歌が辷ッて落ると尾崎直之進と云ふ方が上ッて來る途端ゑ召物の紋へ泥が着たッて殿様の拜領もので殿様へ對して濟ぬから斬て仕舞のだが夫が有から夫ゑお歌の頸を斬て……草三郎ゑ詫ゑ出ろ山田屋へ預け置くと云ふので婆アとお歌ゝ山田屋ゑ預けられて居るが世間へ此事が知れてゝあらぬ若し他言すれば斬て仕舞と云ふのだから迂濶り饒舌る事も出來ないが何したら宜からう　草「左様か……饅頭屋の草三の女房ッてエ事を直之進てエ奴ゝ知て居るのか　重「それがお前默止て居れゞ宜いゑ婆アが饒舌ッたのでいらざることを云ふそれが老耄して居るから此様な事になるのだ　草「尾崎直之進と云ふのゝ直右衛門様の當主で羽振の善上役だナ……　重「さうヨ　草「お爺さん已がまアどうか分疏ゑ旨い意を立てやう……お前後生だから山田屋へ往ッてお歌を借りて來て臭んねエお歌ゑ言て聞かせる事があるからッて一寸借りて來て　重「確と預け置くと云たのだから貸しゝしねヘヨ　草「貸すヨ大事ゑ事だお歌ゑ逢ッて次第を聞あけりやアならねヘ……已れだから貸すヨ若し胡亂と思へゞお前さんお歌の代りゑ人質ゑなッて居てお歌丈け一寸遣して　重「だがね爺イ婆アを彼所へ預けッ放しゑして面倒くせへからとお歌坊を連れて何處かへ行ッて仕舞はれると仕様がねへ　草「串戲云ッちやアいけねへお爺さんお婆アさんを預けて何處へも往く氣遣へねへ歸へすヨ　重「ぢやア往て來ようと是から山田屋へ往て話をすると草

三郎の事だから仔細ゝあるまいよく相談をして詫事の旨意の立つやう話し合ふが宜いと躊躇して遣しましたお歌ゝオロ〳〵泣きながら土間口から這入て來ました　草「お上り　歌「誠ゑ濟ぬ事を致しましたコレヘ罰が當ッたのでお前さんゝ跣足で商ひをして暮れるまで醜齷するのゑ女房の身として物觀遊山ゑ出た罰でお婆アさんが往ッて覗ろと勸め升から來年本祭りゑ見やうと云ふとそんな事を云ゝずゑといれ見度もあいが據あく草履を穿て往くと若い者がワイ〳〵いッて押したので石段から辷り落て立派な御方の御召物へ泥を着けたのでお前さんが呼出される様ゑあッてゝ妾ゝ實ゑ濟あい云と思ひどうしてもお前さんの名ゝ出すまいと思ッて居るとお婆さんが迂濶り……此様な事故ゑあッて何うも申譯ゝ御座いません　草「心配するナ實はね[illegible]お前ゑ話した尾崎直右衛門様の御嬢様てエのゝ尾崎直之進と云ふ人の妹娘だが已の様な者でも養子ゑするとか家來ゑするとか云て山田屋からの話だ已れゝ禮の蔭で聞て居のを承知して糞ごなしゑ惡く言たが譬ゑいふ犬の糞で祟とゝ此處の事だ斯云ふ時ゑ難儀を着せるのだが女房の頸を斬て來いと云ふのゝ女房の緣を斷て何所までも板倉様の家來ゑして自分の妹娘を嫁ゑ遣して言條を立てゐけれァならねへと云ふ譯だいやゑ廉を付て小刀細工しやアがる向ふで頸を斬て來いと云ふなア幸へだから手前誠ゑ憫然だけれど已れが根岸から追手が係ッて逃げる時手前が一緒ゑ連れてと云たのを手

前を連れりやァ足が付て共ゑ繩に係ッて三尺高へ所の素首臺へ梟首れるのだから殘ッてど云たら共ゑ縛られても宜いから連れてと泣て頼んだ事い忘れやァしめへナ ……

草「已いお前が可愛いから置て來たが……已が並の人間あら板倉樣の家來ゑあッて大小差してお前ゑ樂をさせるが此方の身に暗へ事があッて……若し土浦から牢破りの事が露見すりやァ尾崎樣も殊ゑ寄りやァ首ゑもなるイ、か板倉樣の名を汚す事だから生涯饅頭を賣て罪亡しをしやうと思ッて一生懸命ゑあッて爺さん婆さんを見送ッてと斯うやッて居るが哥〳〵と人ゑ立られ頭を下げられる[illegible]貫ゑ心が苦しい此處等が丁度死時だらうから立派あ人の手ゑ掛ッて已も死てエ……お百姓の此度の苦みの事を知てるが一通りぢやァねへ此處で首を斬て來いと云ふを幸ひお前の頸を引提て行て百姓衆の難儀を救はふ手前が已ゑ頸さへ呉れば出來るのだ手前ばかり殺しやァしねへお歌誠ゑ氣の毒だけれども多勢の人助けゑなり已も男が立つが手前已ゑ頸を呉ねいか

歌「ハイ……妾の頸でお前さんの分疎が立たりお百姓衆のお難儀が救れる事なら些も妾い厭やァしません妾の頸を斬て持てお出あさいだけれども向樣のお孃樣いお氣が有てお前さんゑ惚れて眞人ゑしたいとか嫁ゑ行度とか云ふ事から斯う云ふ事が始まッたのですからお前さんが妾の頸を斬て持て行ても向ふ樣いまたお權威であんのうんな譯ぢやァあいと段々人が這入て言ひくるめられ仕方あしゑ尾崎樣のお孃樣をお内儀ゑすまいものでもありますまい妾いお前さんの爲めゑ死のだから厭やァしませんが元と尾崎樣のお孃樣ゆゑで妾も殺されるのだから草三さん尾崎樣のお孃樣を女房ゑ持て下さると妾い死でも成佛やァしませんぜ

草「ウン……いゝよ決して心配しあさんな尾崎の娘を已が女房ゑする位へならお前ゑ頸を呉れとい云はねへ……運が善いから疊の上で斯うやッて居られるのだ間が惡けれァ手前も已も二人とも素首を晒すのだ已が慾で惡い事を爲たのでいねへ主人の爲めゑ遣ッたのだが綾ゑあッて肩書の付た身の上何卒お歌何ゑも言はずゑ頸を斬らして呉れ

歌「ハイ……左樣云ふ事あら妾い嬉しい直ゑ斬てお呉んかさい

草「ウン……よく承知して呉れた古疊でも汚すといけねへ椽側の方へ來や……敵紙があらァこれを敷うと敷紙を[illegible]用意の國俊の脇差の鞘を拂ッて何思ッたか臺所へ行て茶碗ゑ水を一杯汲んで來まして

草「サァお歌これを飲で呉れ生涯別れの盃だお前一人殺しやァしねへヨお前の首を持て行て多勢の百姓の爲めゑ掛合ひ手强い事を云ふから向ふも斬るとか撲るとか云ふゑ遣へねへから突然ゑ斬てかゝれば死物狂ひゑなッて尾崎直之進の素首を押へ鼻面を疊へ摩り付て鼻血を出してやる已も死ぬ躰だ跡から行くから先へ行て待て居て呉れ

歌「アイさァ斬てお呉れと少しも憶する氣色もなく兩手を合して眞白あ襟を差延して口のうちで念佛を唱へます草三郎い脇差をお歌の前へ突付て南無阿彌陀佛〳〵

と稱名を唱へェイと聲をかけると共ょ哀れやお歌の首い前へパッタリ落たから草三郎い鮮血だらけの島田首を兩手で押へて數紙の上へ置きまして　草「嗚呼お歌堪忍して呉んねへ能く手前アイと云て二つ返辭で命を已ょ呉れた三年跡ょ別れる時も少しの間だ待て呉れと云て已が出て來たがそれからい音信もしねへのょ不貞な奴と怨みもしねへで山の中まで尋ねて來て夫婦緣があッて出會とい云ひながらまだ一月と染〻添はねへうちょ此樣な事ょなッて頸を呉れと云ふのを忌ともいはずょハイと云て能く呉れた手前一人殺しいしねへ已も跡から追付けいくぞ其代り二人で命を棄てれば多勢のお百姓の爲ょあるのだから……と風呂敷を出し袖紙で下包をして鮮血の滴ぬ樣ょして刀の血を拭て鞘ょ納める突端ょ表をトン　重「哥人明て呉れ山田屋でも心配して居るから　草「今明ける〻ョ懸金が鎖てあるから……今明けるよと庭へ下りて懸金を外して明けました

第十九回

重「山田屋の旦那も大心配で……角田の親分の手から詫て貰はふと云ふので今信州の飯山へ迎への人を立た　草「其樣な事をしねへでも宜いのょェ……私い今から尾崎樣の屋敷へ行くがお前さんの爲めょ難儀ょあらねへ樣ょするから安心しねへ……永〻厄介ょ成ッて……隨分寒さを厭て……　重「お前が行ていいけねへ……全体りれが惡いのだ　草

「大丈夫だョ言條を立てれば宜ぃのだ……此を持て行けァ宜い　重「そんなものを持て行たッて受け付けねへといけねへから　草「遣ひ物ぢやァねへお歌の頸を斬て來いと云ふから斬たが胴売い跡でお寺樣へ葬ッてねへ香花でも手向けて遣て……　重「ェ――酷へ事するな……ナイ酷い事をするぢやァねへか草三なんぼ無慈悲ょ頸を斬て來いと云ッたッてナイソレと首を斬る奴があるものか何十度とおく詫事をして聽かれあけりやァ詫方がねへが無暗ょ斬て悶然に……お歌婆サが惡いばッかりょお前を斬らせる樣ょなッたのだお前バかりい殺しやァしねへ已れも死から……草三　草「大丈夫だョ心配しなさんナと爺さんの止めるも聽ずポタ〻〻鮮血の垂れる風呂敷包を提げて鑑札があるから是から通用門を通ッて直ぐょ尾崎直之進の小屋へ參り　草「頼む〻〻「ドーレと出て來た取次い栗山佐平と云ふ三年跡草三郎ょ手を撲たれた奴で此方い忘れて居る栗山佐平も迂濶りして居まして　栗「何所から來た　草「ェ、城下を鑑札を戴いて饅頭を賣て歩行草三郎と申者で直之進樣が來いと仰しやるから取敢ず出ましたがお目通りを願ひたう存じ升　栗「ウム饅頭屋か何の事か知らぬが一通り申て見ろ迎も大概の事でいは聽入いあるまいが何う云ふ事か　草「直〻お目通りの上で　栗「だがェ願ひの筋を言ひろ　草「願ひの筋いお目ょかゝッて云ふ　栗「直〻のお面會いない戯言をいふナ饅頭屋風情で何と心得る重役の所へ來て怪からん事ぢ

やないかお目通りハない願の筋ハ取次で致す何の事だ　草「なんだッて直接ヨ來いと仰しやッたから來たのでお前さんよやァ分らねへことだ　栗「言はんで分らぬと云ふ事がかお前さんでハ分らぬとハ何のことだ重役の方がお出があッてもお取次を致す栗山佐平然るヨお前さんでハ分らぬとハ何んだ分らんで奉公が出來るか怪からん不禮至極お物の辨へのない奴だ　草「うんお事を云ッたッて旦那が直接ヨ面會度から來いと云ふから來たので足下ハお取次の役なら旦那の處へ行ッて貴方が來いと仰しやッたから來たが何う致しませうと云て面會とハ出來ぬと云へばいゝが拙者が來いと云たといへバどうなさる足下ハお給金を貰ッて取次をするのが役ですからねへ　栗「ム……様〻の事を云ふ少し扣へて居れと腹立まぎれヨ奥へ來て　栗「ヘーハ取次がございます　尾崎「なんぢや　栗「城下を饅頭を賣て歩行ます草三郎と云ふ者が何か怪からん不當お事を申して直〻ヨお目通りが頂ひ度と申から怪からん迚もお逢ハないから取次で遣ハすからヤせと云ふと貴様の様なものヨハ云はぬ直〻ヨ面會度と怪からんどうも亂心の様お奴で　尾「ァ、さうか饅頭屋が來たか夫ハ〳〵……阿母様草三郎が參ッたさうで幸ひの事で……手前からお出迎ヨ出るのだが少〻病人で取込で居るから速ヨ是へハ通り下さる様ヨと叮嚀ヨ取扱ヘヨ麁末があッてハ相ならぬ重役の通り取扱へ　栗「ヘ、……ハ重役の通り……饅頭屋で　尾「存じて居ると叱

られたのでおんだか取扱ひ悪く饅頭屋ヨ詫るのも癪ヨ障るから玄關へ來て立て云ふのか坐つて云ふのか分りません様ヨ　栗「誠にどうも其種〻お取込があッて手前方より罷り出るのだがどうか是へ御通りを願ひます　玄「然らば罷り通ると度を据ゑて國俊の一刀を片手ヨ引提げ袋の包を持て草三郎奥へ通りました

草三郎ハ栗山佐平の案内で様側の杉戸を明けて廊下傳ひヨ折曲ッて參りまして六疊の居間の障子を明けると襖を敷いて坐ッて居りますのが尾崎直之進と申當主で年三十一ヨなります色の淺黑い鼻筋の通ッた眉の濃い立派な武士、草三郎ハ案内ヨ連れられて恐る〳〵様側の所ヨ參り手を突て居ります　栗「ェ、是れへ參りましたのが饅頭屋の草三郎と申者で尾崎「さァ何卒此方へ這入て下さい……それちやァ話が出來ませんどうぞ此方へ搆ハずお這入りおすッて……コレコレ佐平若しお客來があッたら今日ハ餘儀ない内客が御座ッてどうも些と面會とが出來ぬからと云て宜い様ヨ斷ッて……其様側の杉戸を二重ヨ建て置けヨ此方へ參らぬ様致して下婢どもヨも病間の方へ來ぬ様ヨ確と吩咐て置け　栗「ヘェと其處を立ちましたが佐平ハ變に思ひまして どう云ふ譯で饅頭屋をお居間へ通して重役の様な取扱ひ……何か密話があるヨ相違ない……彼奴ハ……慥か三年跡に秋問道で馬方を己が斬らうとしたとき鹿朶を持て飛出して來て私が手を撲れて胛が腫た事があッたが其奴が慥か

饅頭屋まあッたと溯く聞いて居たが其奴でいあいか知らん……彼の事を表向まに主人まに告げられてい已が身の上まに關係するが……是い容子があるから立聞をしてやらうと悄と庭傳ひまに忍んで檜とカナメの植込の中へ隱れて立聞をして居るとい直之進心得ませんで　尾崎「さァ是へお通りあすッて……うれちやァお話が出來ませんから何卒コレへ……初めてお目まに掛ッたが拙者い尾崎直之進と申者此後とも幾久敷ゐ別懇まに願ひ度い　草「これいどうも恐れ入りました伊挨拶を頂きまして伊城下を饅頭を賣て歩行ます草三郎と申餡相者で伊坐へやすが伊見知り置かれまして伊贔負まに願ひますエ、今日い又女房が飛んだ不調法を致しまして伊召物の伊紋所へ泥を着けましたとか足で蹴たとか云ふことを承はりましたが女房の頸を斬て草三郎まに早々詫に出るやう山田屋へ仰しやり置で惚り致しまして取敢ず出ました　尾崎「イエ其樣まに恭しく仰しやッてい誠まに恐れ入る實い十が何とも申譯い伊坐いません

五夜の日でわッたか親父が山田屋へ參り文次郎へッの頼みましたときまに貴公がソノ親父へ穢越しまに異見ともなく下役の者が伊城下で亂暴を致す事を聞かして呉れたので親父も耻入て立歸ッたが其の志の正しい所まに親父も感服して如何まも品行正しく立派なお方だが何云ふとで彼ァ云ふ商ひを爲て居らるゝか承れば前々水野家の伊藩だとか故あるお方だらうが伊零落あすッて彼の樣なお商ひをあさるが誠まに惜いお方どうか當家へ伊抱へまあッて縱令小祿でもお取りあされて大小を差すお身まあられたら娘を何か嫁まあけ度と云ふので親父も拙者も男の兄弟い一人もなく女ばかりで相談相手もないが貴公樣の樣あ立派あお方が妹の良人にあッて下されば誠まに行く直之進の力まもあるかと思ひ親父と相談をしたが勿々伊聞濟あく殊にい悉く戒めてお歸りあされ親共も耻入ッて娘ゆゑまに箇樣まに耻しめられたとを考へれば草三郎殿の云いるゝ通りどうも殿樣のお名前まも係るとで不孝の娘草三郎殿まに對して捨置かれぬから手打に致すと云て彼ァ云ふ氣象だから病間へ來て騒いだが其處い女親だから母が這入て只管止める拙者も止めましたので親父も其儘まに延び〳〵まに成て居るのだが至極貴公の伊氣象でい尤もである殊まに伊家内のあるとも薄々聞て居るがどうかうれもお話合で伊家内へい別まに田地でも買て困らぬ樣お身の上の立樣仕方もあるから其所い都合で如何樣まもあらうがどうかお目まに掛ッて伊相談を仕度と思ふがお招ぎ申ても尾崎の小屋へい來て下さるまいし何か折があッたらお招ぎすて伊相談し度と思ッて居ると幸ひ伊家内が今日の麁相薩相だから仔細いあいあれども殿樣より拜領の伊紋所へ泥を着けられていい上へ對して捨置かれぬと云へば捨置く譯にいかあいからコレ幸ひ女房の頸を斬て來い草三郎まに能り出る樣まに強く云たら屋敷へ來て下さるだらうとお出があつたら染々逢て伊相談し度と心得て實い強く云ひましたが其だ非道お事を云ふと伊立腹かい知れんけれども

お目よかゝッてお詫をし度まゝよ先刻の樣よりたが何卒惡からず……貴公が饅頭の箱を棄て大小を遠ずお思召みなつて下されゞ誠よ此上もない上よ於ても幸ひのことで我〻共も滿足致すことだが何うかお聞濟があれば千萬有難い願ひ度　草「へエー……ぢやァなんですか先刻女房の頸を斬て來いと仰しやつたのゝ嘘ですか　尾崎「實ゝさう云はんでゝお出がなからうと思て靡を付けてお招ぎ申たので　草「へエー……「私ゝお武家てエものゝ二言ゝねへと聞て居升から嘘僞りゝ毛筋程も言ぬ一つ間違ば腹を切るのがお武家樣てエ者の常と私どもい存じて居ましたのよ貴方の樣な立派な重役樣が町人を捕めへて嘘言を吐て欺して人を呼寄る樣な後暗へ事を成さるからうれを見習ふ下で下役の武士ゝ城下へ出ると矢鱈よ斬るの撲るのと騒ぎ此間も鄕原で二人追驅けられ一人ゝ斬られたがまァ命に障ることもなく座へませんコレへ此程願直よなつて居る二ケ年分の年貢上納の事で一昨年飢饉の所へ四月に領分へ雹が降り八月十二日の大風で米も何も取れねへで百姓が困つて居ると二ケ年分御年貢前納と云ふので困ますから只管彼アやッて村の總代の者が十四五人願ッてに領主樣へ出ましたがお聞濟もなく坐へやせんで實よ百姓い難儀をして遂よゝ上を恨む譯でもに座へやせんが情けねへ板倉樣ゝ非道だとかいふのが下役の耳に這入ると斬て仕舞とスッパ抜て人を斬るので嗚呼情けねへ事だが止めて下さりそ

うあものだ理由の解ッた重役もあらうよ止て下さらぬか非道な事だ端ねへ商へしても城下よ住んで鑑札を頂いて居るからに領主樣ゝ大事でに座へやすまァ安中三万石の領分ばかりでおく高崎樣前橋樣へ此事が聞えましてゝ殿樣のお名前よも障るが板倉樣のに苗字を汚さうが入らざる事と思召も御座いませうが私ゝ心配仕て居りやす所がどうもに重役の貴方が嘘を吐て斬らおくッて宜いが斬て來いと云ゝたら來るだらうと云て欺して町人を呼寄せおさると云ふおァ飛んでもねへ後暗へ事で貴方ゝに武士樣でげす私ゝ正直でげすから其通りに領主のに重役の云ふ事だから背かず比喩よも云ふ通り泣く子と地頭でげすから貴方のお言葉よ背かず參ッたが……是を何卒お受取を願へやす　尾崎「何ですかそんおに心配をなすッてゝ困る箇樣な事をなすッてゝ困りますよ何う云ふ下さりものですか　草「まァ〜開けてに覽あすッて　尾「拜見致しませうお前さんの樣よ仰しやッてゝ拙者も實よ恐れ入るダがお出でにおれば有難いのでと風呂敷包を開けて見ると血の漏らぬやう桐油で包んでありますが桐油を取て見ると血よ染ッた十九よなるお歌の別嬪の島田首で御座いますから直之進も驚きまして首と草三郎の顏を見おがら袴の間へ手を差入れて答へもなく默然として居りました　草「エー仰せよ背きやせんで私が妻の頸を斬て參りやした何卒お受取あすッてダが板倉樣の紋所ゝ大切なに頭主の紋だから泥を着けたから斬て仕舞と云ふが此三万

石のは領分中でハ大切でげしやうが江戸へ行と太鼓の紋あそハ澤山ある天皇樣の祭りよれ町の軒灯燈ハ皆お太鼓の紋で又三府下り上りの時ハ雨降りよ桐油掛御長持よ九曜巴が付て居るが泥を着けたからッて斬て仕舞と仰しやッてハ人足ハ一人も出ませんから正可の時よ御差支へにおるお屋根の九曜の所へ烏が糞をすりやァ鉄砲で撃て仕舞と云へバ其害ハ鳥獸よまで及ぼし升鳥獸まで苦しむ樣な御政治をおすッてハ困るねへ私も板倉樣の家來よおッて大小を帶して上下を着けて威張て歩行る樣よおるのだが否でげすね儒袴を着て饅頭を賣て歩行ても口と心とハ相違ませんお前さんハ黒の羽織を着て立派な役柄でも私の眼から見ると口と心とハ違ッて居る下賤の者を嘘を吐て呼寄るおんてエ汚れたよハ爲ねへ饅頭を賣て居ても悪い心が出たときハ此心ハ直さう此心ハ磨きてエと心がけ苦くをして居るが立派なお武家のくせようんな腐敗た事を仰しやッてハ實よ下の者ハ難儀を致します私が悪口を吐きましたらお腹も立ちませうから私の頸をすッぱり斬てお呉んあさへ其變り頸を投出してお願へ申がどうか二ヶ年御年貢高納の所をお百姓から半ヶ年分よ願ひ立て居るがうれ丈け御聽入れ下されバ夫婦の者も快く死ます此方の御嬢樣よハ御眼よハ掛りませんからどんお御嬢樣か知りませんが御重役の御嬢樣が饅頭屋を見染て戀煩ひと此上もねへ駄で私の女房を娶めるのぢやァねへが年ハ十九ですが頸を斬て行かおけれァおらねへ殿樣よ濟まねへ

と云ふとアイお前の難儀よなるおら斬られませうと二ッ返辭で此樣な姿よなりました何卒憫然と思召すおら私と女房の頸を投げ出しますから何卒多勢の百姓の難儀を御救ひ下さエ若し直之進樣其御聽濟がおければ詮方が御座へやせんから私ハ此頸を引提て板倉樣の所へ直訴し升がさうなると此方のは身分よも障るかと思ひますが……何うか夫婦のものを不憫と思ッては聽濟下さい……えエ旦那えエ旦那へと草三郎ハ人の爲めよ命を棄る心得ですから憶せず問詰めました

第二十回

尾崎直之進ハ段々問詰められ一言の答へもなく只だ默然として居りますと次の間を明けて出て來ましたのハおしまと申す直之進の阿母樣で　しまハは兒下さい初めては目よ掛りますが妾しハ直之進の母では坐いますモウ貴方の仰しやる通り重々は尤も樣ではは坐い升……實ハ思ひがけおい事で妾も娘も悔り致しまして先刻から次の間に泣て居りました娘ハ嗚呼面目おい妾が心得違ひをしたばかりで咎もない内儀さんを無慚〳〵と非業よ殺さしたハ何とも云へおい恐しい罪ではは坐いますまた思ふ人よ恥しめられて此儘生てハ居られません妾ゆゑから尾崎の苗字の潰れる樣お事を致しました不孝の者お先へ參りますと匕首を採て自害しやうと致しますからまァ〳〵お前が死だッて草三郎樣のお内儀さんの頸ハ繼おいお

前ハ思ふ人ヨ恥しめられて外へ縁付量見ハ有まい今死ぬ命を存命て頭髪を切て生涯尼ヨあつて草三郎様のお内儀さんの佛事を吊ふ方が却ッて仕方がないから妾がお詫を仕様といッて参りましたのでコレハ只今切りました娘が髪の毛コレハほんの妾が寸志ばかりのハ手向でハ座いますが何卒ハ家内様のハ石塔料の足しヨシて下さるやう……此髪の毛ハハ位牌へハ手向下すつて娘の心得違ひのお詫を願ひ升……きわやお詫ととしあヨ　きわ「ハイと六枚屏風を明けますと此世を思ひ切髪の尼ヨあり度い妾が願ひと根からぷッつり切て眼も泣腫し顔も上られませんで面目あく細く眼を明いてお歌の頸を見て口のうちヨ念佛を唱へて居りましたが堪りかねてワッと聲を出して泣き倒れました　しま「どうぞ此お頸をお持歸りなすッて此事ハ何卒娘と妾が直之進の申違ひ又た心得違ひの處をばお詫とを致し升どうか貴方を俠客と見かけてお願ひ申ますが内聞のハ沙汰ヨなすッて下されバ有難う存じます　草「ア、誠ヨどうもハ氣の毒でお嬢様を坊主ヨしやうと思つて來た譯でもあんでもねへのでダメ多勢の百姓が難儀を致しますのを心配して居りますが斯う云ふ譯ヨありましたから夫婦命をあげ出しての此願ひを俠聞濟み下さりせへすりァ何千人とあく助かりますとで……折角のお志だから此の髪の毛ハ私が女房の位牌へ手向けますが金ハ三文でも持て行てハ男が立ちませんから金ハ要ません……頸ハ持て來

いと仰しやつたから持て來たのでこれハ置いて參り升家ヨ胴亮が殘つて居るから正徳寺様へ葬りますが髪の毛丈けハお貰へ申ます……ハ新造様エ貴方ハ立派なお方だが婦人のとで此度の騒ぎの事ハハ存じハ御座へやすめへが一通りのことちやァハ座へませんから其事ハ確と聞濟んだと云ふ證據のあへうちハ歸りませんどうか證據を頂きてエものでしま「直右衛門が歸宅致しますれば屹度ヤ聞け夫と直之進とで命ヨかけても殿様へお願ひ方もハ座いますハ年貢前納の事ハハ願ひ通り確と取計らひますやう直右衛門ヨもヤ聞けますから何卒ハ内聞ヨ願ひます決して嘘偽りハヤません　草「左様でハ座へやすかちやァ直之進様宜うがすか……默ッて居ちやァ分りません……私ハ歸りませう言ふあと云へば口が腐ッても此事ハ世間へ知れねへやうヨ口外ハ致しませんがハ年貢前納の處をハ聞濟がねへと直ぐ私ハ胴亮をハ家老様へ擔込みますから左様思ッて下せへ宜うがすかへ　しま「へエ　草「ヂヤァハ嬢様髪をお切りあすッたから尼寺へでもお這入あさるあら友達ハ多いから鐵燈籠の建立位へします……ヘエ左様あらと憎まれ口を利いて木で鼻くゝッた様ヨして幅廣の椽側へ行きヨかゝると何思ッたか直之進ハナゲシヨ掛ッた鎗を採て鞘を拂ひッカ〳〵と椽側ヨ出て鎗を付けたので草三郎ハ素より命ハあげ出してあるから覺悟を極めて草「私を今突うと云ふからヨハお前さん此願へハ聞濟む氣遣へハねへが一突でも突きァ

手元へ繰込でお前さんを引摺り倒して表向よするが宜いかサア突て見ろと草三郎が胸を叩て身構ました其膽力い中〳〵頭饅おどを賣る人でいありません命ちを棄て人を助け樣と云ふ其の志し實よ強いもので直之進い鎗を向けて暫時草三郎の容子を窺ッて居りましたがヤッと聲をかけて片足踏跨がッて繰出した鎗い庭の植込よ隱れて居た栗山佐平の鳩尾を突きましたからアッと悲鳴を揚て苦む處ろを引拔て止めを挿たときい草三郎い驚きました　尾崎「イヤ嘸お驚きで沒座らうが此よ隱れて居たい拙者家來佐平と申者三ケ年前よ秋間道で貴公樣へ對して不禮を致したと云ふ事い薄〳〵手前も存じて居る殊よい此所に隱れて立聞して居りましたから彼がまた他へ出まして此事をお饒舌でも致し世間よ流布致しましてい尾崎の家が滅亡し升實よ是い大事のとで……左樣かお志とも知らず拙者心得違ひをして歎いて此へお呼申たい直之進實よ過りで沒望の處い殿樣のお爲めゆゑ何の樣よも直右衛門と拙者とも二人して幾重よも家老へ願立を致し百姓一同難儀の事い取鎮めるやう取計ひます刀よかけて屹度致します只今母の申す通り俠客の草三郎どの決して他言されていあらぬが何卒此事い世間へ漏れざる樣山田屋へも確と申聞けますが沒閑濟あッて沒歸宅あれば誠よ千萬有難い事で仰せの如く頸の處い拙者方で引取りまして內聞よお葬を致します……どうぞ殊の心計りの髮の毛い沒持ち歸り下されぐ有難い事で　草〳〵ェ宜う御座へます御年貢の

事さへ聞濟んで下されば何も申す處い沒座へません賤たねへ身で御重役樣へ惡口を申た草三郎ば聞濟みがあれぐ命い決して惜みません私も女房と殺したから生て居る心い御座へませんどうぞ直よ此處で沒手討にあすッて　尾崎「イェ〳〵どう致しまして貴公樣を斬りますときい貴方のお望のば年貢前納の事の取計ひの致し樣がない貴方い少しも知らぬ振りで願ひます何の樣よも取計ひます誠よば志神とも心得ます仇よい承ません實よお上の爲め重役一同ト役の者共まで是よ於て幸ひを得まするとよ相あります必らず刀よかけても此事い屹度お叶へ申すからと云ふので草三郎い安心致して髮の毛を貰つて生頸を檀目で見かがら其儘出て行きました尾崎樣でい頸の致方がないからば祈願所の東光院と云ふ寺へ行て通照と云ふ六十七よゐる和尙樣へ直之進から內〳〵話し入れると仔細ない愚僧が默つて埋て置きませうと其處い其頃のまた領主の權のあつたもので御座いまして只今東光院の本堂の後左の坂を上ると五ッ目の小さい墓で眞道妙善信女と云ふ戒名胴骸の方い正德寺樣へ葬りよありました之い貞樹法玄信女と云ふ戒名で同じく文化三年九月朔日の日付けで首と胴を別別よ埋めましたそれでまづ內聞で事濟みになりまして御年貢二ケ年分前納仰せ付けられた事も御沙汰止よありましたからお百姓一同悅びました事で草三郎い一言半句も世間へ出まして言ひませぬから賊よ御城下御領分共よ隱よありましたが御孃樣い頭髮を切りまして

十八で尼よあり通照和尚の弟子よなり名を照念と改めまして罪亡しの爲め觀音堂を建たと云ふ下野尼村よ只今參りますと右の方へ這入ます所よいまだよ可あり大きあお堂が殘ッて居ります先達て圓朝彼地等へ參ッて聞ましたら此右手よ臺所が付て此處よ座敷が在て座敷から續て本堂であッたと云ふとで其時の觀音様ハ只今磯部村の普門寺と云ふ門徒寺の墓の眞中よ建て居ります其左右よ六地藏が建て居ります之ハ安中草三郎供養の爲め後よ妹が建てましたと云ふ事で御座い升ゐ領主の重役尾崎の嬢様が因縁有て頭を剃てぼつて尼よなつて觀音堂を拵へると云ふので其頃で坐いますから出入の町人又ハ下役から多分の納め物が御座いまして結構あ本堂を建て女中を一人付けまして誠よ何不足ハ御座いませんとで只だ草三郎の女房が頭を斬られましたとのみ照念尼よハ念が斷れませんから觀音よ向て日よ五十卷づゝ觀音經を讀誦致しますので村の者も感心して年若でありあがら坊主よなりお經を誦る程のお方彼れハ活佛様だと爺さん婆さんが參詣致しました

尾崎家の今度の一件ハ内々ハ家老へ知れて居りますから尾崎直之進父子ハ國表よ居てハ宜敷るいから早く江戸詰を仰せ付けられた方が宜からうと云ふので家老の取計ひよ依て直右衛門父子ハ江戸屋敷詰よありました其年ハ果て翌年が文化四年卯年で坐います田舍でハ毎月十七日十八日ハ二十三夜待を致し村方の婆ァ様が來まして念佛を上げまして後で踊りを致しますが淺草の觀音様でも只今以て四萬六千日の晩ハ念佛があッて後で婆ァさんが多勢で踊りを致します八月の十五日ハ江戸深川の八幡の祭禮でハ坐いますが雨天で十八日十九日二十日と延びまして十九日の夕方ハ大した人が出まして爲めよ永代橋が開いて大した人死がございました此事が追々上州安中邊りまで知れて參る様あとで奥石重兵衛の婆ァおきよハ觀音様へ參ッて歸ッて來まして　おまよ「爺さん歸ッて來たヨ　重「オヤ早く歸ッたがナニか今日ハお念佛はねへのか　まよ「どうもチ婆ァさん衆も四五人集たがね仙人よハ話がならねへが照念様の親父様と阿母様が飛んだ事だッたねへ　重「どうして　まよ「どうしたッてねへ江戸の深川の八幡様のお祭りで永代橋が墮ちたッて　重「うんあ評判をするが本當かしら　まよ「本當だとサ　重「三万人死だといふ……　まよ「幾人死だか知らねへけれども直右衛門様よ奥様が深川よ知已人があッて聘ばれて參る途で永代橋が落て死なれたとサ隱居の身の上だから極く内閑の沙汰で死骸を搜し漸く知れて早飛脚で來たのだヨもう照念様ハ其手紙をお讀なすッて直之進様から來た手紙だがお泣あさるたッて一通りの泣き様でハあいワイ〳〵泣て泣きつめで胸が塞て來て癪が起ッてチ看病して居たおせきと云ふ年をとッた女中が室田よ姪が在て産をしたッて室田へ行たので照念様お一人で……今少し治ッたと云ふから歸ッて來たが私ハ之から飯たべて看病よ往ッてあげ様と思

ふよ　重「サウカそれにお氣の毒ナ往ッて看病してあげおどうも立派な方でもどう云ふ因縁だか氣の毒なとだナ　まよ「本當ま氣の毒あお爺さん不自由だらうが殊ま寄ると徹夜でも居るかもしれねへ　重「ア、宜いとも已も行てエのだが家が留守まゐるから明日ハ悔ま出ますッて……　まよ「外間が惡いから世間ま知れねへ樣まッて　重「ヨイ〳〵お前看病して　草「今歸ッたヨ　重「オ小哥か……哥が歸ッたからお前おいで　まよ「草三兄哥歸ッたか……お前尾崎樣の事を聞たか　草「聞て來た　まよ「可憐ま照念樣ハ癇が起ッて居る……兄哥お前一緒ま行て……　草「お前が行けバ宜い已が行たッて癇ぢやア仕方がねへ　草「どう云ふものでそんあとを云ふのだ世間へ知れちやア仕樣がねへ　まよ「言やアれ否だ　まよ「否だッてお前が心配さしたのだヨ美麗いお孃樣をあんあまして……腹を立てお歌さんの首を斬たりお孃樣をお比丘ましたり種々なとをしてお前ハ怖かねへ人だ　草「云ふものでそんあとを云ふのだ世間へ知れちやア仕樣がねへ　まよ「言やアしないが只だ話をするのだヨお前ま云んあ話をするのでハあいがお前と思ッて煩ッて彼アこ云ふ譯で尼ま云おなりあすッたのだからお前が行てどうでハ坐いませうハ病氣ハと云ふとお悅びあさるま妙あもので……ヨお爺さん臨梅の惡い時ま中の能い人が見舞ま來ると起あがつて話をするものだ　重「ハれハ左樣だお前が煩ッた時已自が廿七の時だつけ行たらお前起あがつたつけ　まよ「ハんなとハどうでもいゝやね　草「ちやア極りハ惡いが一緒ま行

う　まよ「暗へから灯提を點げて　草「燻ッて眞黑あ提灯だ……まアそれでも點ねへよりアましだと是から婆アと草三郎ハ浮羅提灯を點けて下野尻村の觀音堂へ參り井戸端の際から這入て臺所へ行つて本堂へ參りますが一方ま薪炭が積である板倉樣から納めた米俵が五俵ばかり積ましげてある上り口の板の間から上りますと薄縁りが敷て大きあ爐が切てあるハれから次い六疊で其奥も六疊まあつて居て其處ハ尼樣の居間でハ座います床をとつて枕元ま屏風が立廻はしてあり是より先ハ本堂まなつて居る其處まハ納め物が種々あつて燭臺が並んで居る　まよ「此方へ這入あ……其處ま提灯を吊下げて置いて……宜いからお上り……照念樣〳〵秋間の婆アでハ座いますヨ少しハお落付まなりましたか

第廿一回

照念「有難うハ坐い升先刻ハ種々お世話樣まなりまして大きに落付きました生憎おせきが室田へ參りまして居りませんから飛んだハ厄介樣で　おまよ「何う致しまして御役まハ立ちませんでもハ看病致します……ハ心配な事で爺イも參るのですが二人明けても困り升から明朝お悔ま出ます誠ま飛た事で嘸もうお力落しでハ察し升　照「お婆さん妾ハこんあ年若で頭髪を剃て法衣を着るのも矢張兩親が斯う云ふ非業な死樣をして妾が親の回向を致す樣あ因縁でありましたから早く此樣あ身まなりました　まよ「本統でハ坐いますヨお

厭しひ事でゐ坐いますヲ……彼の草三郎が歸りまして貴方がゐ病氣だとヤたらうれしやァまァお見舞よ上ッてお足でも擦り度と云て參りました……兄哥此方へ上りあ　草「ヘェ、ェ！照念樣御病氣ださうで婆アさんよも道々聞ましたがどうもゐ兩親樣ゝ飛んだ事で嘸ゐ愁傷でゐ坐へませう　照「ハイ有難うゐ坐い升、と草三郎の顏を見ると胸が迫ッて下を向てホロ〳〵と膝よ涙が落ちました　草「苦慮〳〵あすッてゝいけません何事も因緣ですから何も思ゝねへで諦めて身体を壯健よしあければなりませんヨ　まよ「眞實でゐ座いますヨ草三郎も此處よ參ッて居ります……ゐ兄弟衆だッて遠く離れておいでなさるから思ふ樣よゝいかず草三が參ればゐ不自由な事ゝないから何んでもゐ遠慮なく仰しやいまし草三郎がお世話致しますから……今夜ゝ徹夜看病致すとヤして居りました　草「嘘を吐きねへ……止なヨ　さよ「貴方のゐ足を擦り度ッて、　草「止しねへ嘘ばかり吐くぜ　まよ「些とお擦りヤませう　照「有難うゐ坐い升お婆さん其所よ季田樣から貰ッた熊の膽が有り升から少しばかり熱い白湯を入れて拇指で溶解て下さいナ　まよ「ハイ畏りました、と茶碗の中で熊の膽を溶解て　まよ「サァこれを召上れ、と出すを照念尼ゝ飲で自分で鳩尾を押して居るおまよゝ擦りながら　まよ「少しお横よおなりあさい　照「有難う……あの草三郎さんゐ兎下さい　まよ「些と擦ッて上げなヨ……アノ照念樣、草三郎ゝ遠慮でねへ、擦り度

い樣な顏付をして居ながら　草「止しねへ詰らねへことを言ッて、と叱言を云ふ、婆アさんゝ頻りよ擦ッて居るうち照念尼ゝスヤ〳〵寐付きましたが軈て半時ばかり經過て不圖眼を覺して見ると枕元よ草三郎が一人で坐ッて居り升　照「草三郎さん　草「お眼が覺めましたか今婆さんゝ鍼醫の上手あのがゐ城下へ來て居て角田の親分の近所よ居るから若し夜中よ痞が起と困るから川要よ迎ひよ往つて來るといつて出て行きました　照「左樣でゐ座い升か貴方深更なつてお氣の毒樣大した事もゐ座いませんからお攝ひなくお歸り遊ばして　草「ヘェ酷くお前さんが痞といけねへと思ッたが斯やッて好い擂梅よお寐みあすッて……大分額よ汗が發ました　照「疲れて居りますからで……どうぞお歸り遊べして　草「ヘェ歸ります……アノ照念樣貴婦ゐ親父樣よも奥樣よも一二度お目よ掛りましたが此度の事ゝ何とも申さう樣もゐ座いませんねどうも橋が墮てお兩親ばかりでゝおく何千人となく死だつて云ひますから貴婦もお諦めなさいまし　照「ハイ有難うゐ座います……草三さん貴方が側よ居て下さると妾ゝ尙ほ胸が痛くなり升から何卒お歸り遊べして下さい……兩親が箇樣な死樣を致して此歎き苦みを致し升のも皆な妾の現世の罪と思ひますと嗚呼恐ろしい事でゐ座います輪回應報南無大慈大悲の觀世音菩薩樣と唱へて居りますうち又痞てんで來まして烈しくウーンと仰向よ反たから草三郎ゝ抱へて押へ付けたが勿〳〵男の力でも問よあひ

ません横よ反て倒れましたから傍よ有ッた熊の膽を取ッて飲せ様と思ふと歯をかみ〆て居りますから熊の膽も通りません仕方があいから口移しゃうしやうとグッと含んで飲ませ様とすると慌てゝ自分で飲んだから又た含んで漸く二度目よ薬も通りました手足い氷の様よ冷えて居るが火が消えた炬燵い間よ合いずどうかして熱ためて上げ度と思ふが生憎婆さんも居ず草三郎い一人で狼狽して居りましたが仕方がない誰も見て居ないから肌で温ためたら宜からうと思ッて自分の股を廣げて足を狹み身体を抱き〆めて暫く温ためました其のうち藥の驗めか照念尼い汗を發て來て眼を細く明いて疲勞と致しました草三郎い照念尼の看病をしながら行燈の火蔭で熟〻見ると年い十九で城中で城下評判の淫嬢様が思ひ斷てクリ〳〵頭を剃り落ち尼よあッたも元い己ゆゑ己が女房の首を斬て耻しめたものだから面目ないと尼よあッて佛門よ入り其志を立ると云ふのい……嗚呼濟まねへ事をした實よ憫然だ……尼よして置くのい惜いものだと人情木石でも座いませんから草三郎も情が起りましたか熟〻と照念尼の顔を見て居るうち又た痛が起ッた様子だから照念尼の懷中へ手を宛行ますと照念尼い恟り跳ね起きまして座〻改め　照念「草三さんお前さんい怪からん事をさいます妾い法衣を着る身のうへ……何卒歸ッて下さい　草「へェ……歸りますが實い貴尼が病みが起ッて反りかへッたので手足が冷えて居るから夫を温ため様と思ッて誰も居ません

から看病一三昧よ抱いて口移しよ水をあげたので　……お嬢さん去年小哥が女房の首を引提げてお前さんの御屋敷へ行たのい誠よ怖しい鬼の様ゑ奴と思ッてお出か知らねへが私の様な者を思ッてお煩ひなすッた其お志しい忘れやァしません私も男を磨くてへ程でもねへが故があッて道樂者と交際をして居るがお前さんい五百石も取る重役のお嬢様私が板倉様の家來よなッて大小差してお前さんを女房よ貰へば女房よ義理も立たず草三い慾よ欲ッて屋敷へ胡麻をすッて武士よあッたと云いれるのが殘念是といふも百姓の難儀が救ひたいばッかりで本心よもねへことを云てお前さんの様な美麗い嬢様をクリ〳〵坊主よしたい誠よ今よあッて見れァ後悔で……此度いお前さんが尾崎様とい別物だから其處へ行たッて私が慾よ欲るてへ譯もおし……何卒お願へですから改めて草三郎の女房よお願みゃ升何卒元俗して私の女房よあッて下さいと云いれて照念尼い驚き草三郎の顔を見詰て居りましたが又駒が迫ッてポロリと膝よ涙が落ちました　草「どうですお前さん頭髪を切ッたッて一年半も經過ば仲びて結び髪ぐれへい出來ませう新規よ私が改めて願へ升が……ェ　照「草三郎さんお前さんい情けない事を仰しやる罪もあいお内儀さんを斬らせたのも妾の迷ひから起りました事で御座い升からお内儀さんの菩提の爲め妾い出家を遂げて髪も切りまして斯うやッて何不足おく尼様と云いれるも耻かしい事で唯だ心のうちでお歌さんの追善供養妾の是

までの罪亡しよ毎日絶間なく大慈大悲の觀世音菩薩様と唱へて、お謝罪を致しますが勿〻思ひ斷りのおらぬもので觀音様よ向ッて合掌してお經を誦で居るうちも貴郎の事を忘れる暇もなく幾度となく胸ゑ浮びますから嗚呼此煩惱の心を斷り離し度と思ッて漸く此程容易ゑ回向も出來ます樣ゑなりましたそれを貴郎が傍ゑ來て其の樣ゑ事を仰しやッてゐ妾いまた迷ひまして惡道ゑ墮落ます草三さん貴郎の樣な罪なお方ゐありませんと照念尼が草三郎の膝の上へ手を突いて恨めしさうゑ横眼でジロリッと見ました　草「うれい私が濟まねへ死だ女房ゑも濟まねへけれども私も今ゐ女房もねへ者だから何卒お前さんうんゑとを云はず ゑ私の云ふ事を聽いてお呉んゑさいと頸筋へ絶り付きましたから　照「お止しなさい……アレ―草三さんと大きな聲をあげますと　まよ「照念樣〳〵氣丈なさいましヨ……オヽ大層惡魔れてお在でゑさるから私ゐ額ひの汗を拭きゑがらお起しヤましたが夢でもならんゑすッたか　照「嗚呼……お婆さん夢では座いましたか……妾ゐ怖しい夢を見ました　まよ「怖い夢ゐ夢でもいやゑもので私ゐ貉と相撲をとッた夢を見ましたが貉ゑ負けまいと骨を折ッて眼が覺めましたが……マアビッショリ汗をお搔きゑすッて　照「此間通照樣の講釋で煩惱の邪ゑ睡眠と云ふことが出て居て睡ゐうつゝ眼ゐねむるといふ事其のうつゝゑ見る夢の迷ひの雲霧が霽れゑけれゞ佛心とゐ云はれゑいと仰しやたが勿〻去り難いもので心ゑ

有れゞこう夢ゑも見ますア、惡い夢を見ました南無大慈大悲の觀世音菩薩様と唱へて居ります處へ突然ゑがラリと開けて一人の男が這入て來ました案内もゑく這入て來た男の姿ゐ菅の深三度笠ゑ千草の半股引盲編の脚半甲掛草鞋穿旅馴れた容子小包を提げて廻し合羽で柄前ゑ革を卷きました小長い銅金を差してスッポリ手拭で顔を包んで居て草鞋穿の儘で上ッて坐ッたがまた徐々土間へ下りて後をピッタリ閉めて　男「御免なせへ　まよ「ア、惚り致しました。ゑんで御座いますねへ突然ゑ人の家へ這入て挨拶もゑさらゑいでさア何處のお方で御座い升エ　男「今餘り悞を喰ッて逃げ處を失ッて此處へ飛び込んだが旅の者でげす板鼻の渡しで駕籠を賴まうと思ふと減法高へ事を云やアが ッて小癪ゑ障ッたから二言三言いふと向ふゐ多勢で薪を持て追かけたから川上を渡て此處へ逃げ込んだので御寺樣のやうだが人を助けるゐ出家の役だ何卒本堂の脇へでも隱して

まよ「うんならさうと早く仰しやいゑ惚り致しましたよ……此所ゐ尼寺で御座いますから男衆ゐ無暗にお置き申す譯ゑゐ參りませんゐれゑ人の家へ這入ゑ笠を冠ッて草鞋穿の姿でゑんです　男「御免なせへ狼狽たもンだからと草鞋を拔て笠を取り廻し合羽をゐねのけ手拭を取ると年ゐ三十一二色の淺黑い鼻の高ひ眉の濃ひ眼ゐ小さいがグルリッとした口元の締ッた好い男どう云ふ事か頭から面部から咽喉へかけて刀疵があッて眼の際ゐヒッツリだ

らけで　男「お婆さんどうぞお助なすッてといれて婆さんハ驚ろき　まよ「誠よどうも困りますね……どうも其男衆をお泊め申譯よ參りませんからどうぞれ歸りあすッて婆アと此の比丘さまばかりで御座いますから　男「まアうんゐ事を云ハず本堂の下へでも隱して……お比丘さま何卒お願ひでお助けなすッて……お婆アさん此のお比丘樣が御庵主樣でげすかへと照念尼の顏を餘念もなく腕を組で頸を伸して見詰めて居りました　まよ「どうぞお歸りあすッて下さいよ御攝梅が惡いので御座いますから　男「お婆さんこれが庵主樣かまよ「ハイ此庵主でゐた座います　男「好い容貌だねへ私ハ今迄女を見たが此位へ美しいお顏を見た事ハねへが此樣な容貌をもつて居て未だ若へよお比丘樣よあるゐんて……お幾歳でげすエ　まよ「ハイお十九でゐた座いますヨ　男「ハア元ハ浮氣だヲ浮氣から起つて尼よなつたのだらうねへ　まよ「イヽエどうして因緣があつて斯う云ふ譯で……モウ行て下さいヨ　男「オイ婆さん　まよ「ハイ……アレ私の手を捕まいてドどうあさるのでハ　男「神妙よしろあんでへといふ其の聲の大きいので腹よ響き婆アハ度肝と拔かれて口も利けあくあると掛竿よかゝッて居た丸縄を取て柱へ縛り付け手拭で猿轡を箝めましたから照念尼ハ驚き　照念「アレーと逃げよかゝると鋼金を引拔いて　男「逃げると打き斬て仕舞ふヨオイお比丘樣何を隱さう私ハ肩書のある盜賊だ被捜索身の上で遂れて此處へ來ると板鼻の渡口よ張込が付て己よ危へ所を逃げて駈込だが此いそがしい身の上でありながらお前さんの樣あお比丘樣を見てハ素手でハ歸られねへ只た一度云ふことを聽て……どうか何よも云はず出て行くからオイお比丘樣　照「怪からんと……妾ハ法衣を着る身の上どうして左樣あ事が……妾ハ女を離れた身の上で　男「何を云ふのだ離れるたッて身体よ付て居るのだ色氣面ア持て居て迷ひを露すハ出家の役だ……さアどうだ　照「アレーと逃げよかゝるからゝ襟頸を採て臂手をとり逆よ捻るアレーと横よ倒れたがら脅しよ傍へ長刀を置いて乘かゝつて己よ辱め樣とする所へガラッと雨戸を開けて燻た吊提灯を出したハ安中草三郎で　草「婆さん〳〵と云ひながら這入りましたが此時婆さんハ猿轡を箝められゝゝと云ふのみ何も云ふとハ出來ませんト見ると照念尼を抑倒し大の男が乘かゝッて居るから　草「盜賊と聲をかけて眞鍮の菊燈臺を持つて打て懸りました

第廿二回

草三郎ハ納め物よありました眞鍮の菊燈臺がまだ本堂へ供へませんで座敷よ在たのを引提踊り込升たが幸吉も中々八洲を切拂ッて逃げる位ねな惡徒で此男ハ二十五歳の時面部を切れまして二十四針縫ひましたので人稱んで斑々といひます溝呂木の幸吉と云ふ肩書のある惡徒長刀を突然振上てさア來いと身搏へました草三郎ハ柳生流の目錄を取た男一方ハ劍術

い存じませんが唯だ悪徒でゞ座いまして人を斬狎て膽が据ッて居りますから抜刀を持て切込うと思ふが中々草三郎ゝ透がおい之ゝ懼れてシリ、シリ、と後へ下るから草三郎い段々狙け入ッて行くと板の間からズル〳〵と足摺して本堂の方へ這入て往ましたが頓て草三郎ゝ透がおつたか幸吉が切込んで來るとチヨキリと菊燈臺で受け流し踊り込んで撃うとする幸吉い後へ飛ト る機會ゝ木魚ゝ躓づいて轉びながら身体を逆ゝ致しまして向ふへ逃げかゝる突端ゝ鐵燈籠を倒しましたから草三郎い此處そと付け入て撃てかゝると菊燈臺が釣してある大きな天蓋ゝ當たり天蓋い彼方是方へ觸れる幸吉いモウ適はおいと思ッて拔けて行うとすると今度い香爐から經臺を蹴つけるお華い散る金佛樣い落る木像が轉がるといふやうなわけで本堂の騒動い一方ありません照念尼い頻りゝ婆アさんの身を厭ッて猿轡を取たから二人で土間へ下りて盗人〳〵誰か來て呉れと大きな聲をして怒鳴る積りだが少しも聲が立ちませんから他へ聞えません其のうち照念尼が思ひ付きゝ側ゝあッた釜を無暗ゝ擂で叩きましたからガン〳〵ガン〳〵と云ますので通りかゝッた百姓が　百「なんだ火事か百「エ、火事ゝ違へねへ照念堂の鐘の音がする行て見樣〳〵と二人の百姓が飛込で來て見ると照念尼と婆さんい口も利けずタヽ本堂の方へ指さしを爲升から何んでも往ッて見ろと本堂へ行ッて見ると爭鬪が始まッて居たので　男「オ、……危險〳〵爭鬪が始まッた……

長脇差だまた此所ゑ所へ這入りやアがッたか……何か持て來いと云て居るうちゝ草三郎と幸吉い組打ゝなッて揉合ましたが草三郎の方い力がおいから溝呂木の幸吉ゝ押伏せられて今幸吉が懐中の短刀を拔て斬らうとする所へ　百「此野郎とゝ百姓が何か手當り次第い物を持て溝呂木幸吉の右の膝を撲たから氣が遠くなッて後ろへ倒れかゝる所へまた續て一ッ撲たから横倒れゝなると草三郎い起き上ッて　草「私い安中の草三郎です　百「何れが盗人だか　草「私い草三で其の畜生めが盗賊で　百「呆れた奴だ……尼樣モウ叩かんでも忍エ騒々しいから……灯りを持て繩をと云ふので是からグル〳〵巻ゝ縛ッたからモウ仕方がおい幸吉い度胸を据ゑて萎たれて居る　百「貴方どうして此所へ　草「私い惚りしたので……照念樣が塩梅が悪いので鍼醫を頼みゝ行ッて歸ッて來ると照念樣を押倒して慰まうとする所で……誠ゝ太へ奴で……まア有難うゞ座へます　モウ少しで斬れる所ろで有難うゞせへ升　百「此野郎呆れた奴だ照念尼樣ゞ座る所へ這入ッて來て汝なんぼ盗賊だッてどうも照念樣を打倒がしやアがッて……盗賊てエ者い糞度胸の据ッたものだ呆れた奴だ……此奴打殺して仕舞てお役所へ届ければ搆ふ事いねへ撲殺すべエ　草「殺すのいまア待て下せへ無闇ゝ撲ていいけねへ……まア〳〵少し待て……照念樣ゞ怪我いゞ座へませんでしたか嘸お驚きでゞせへませうまアゞ心配なさらねへで　照念「誠ゝ好い所へ來て下すッて　まよ

「私ゝ口が利けねへヨ草三何か飲まして……ア、釜が破壊て仕舞たヨ　草「ひどく叩いたからよダがおかげで助かッたのだ　草「哥オイ頸を上げねへ哥頸を上ねへ　幸「ヘエ……ア、痛へ……カラどうもいやッてほど撲たれたので身体も何も利かねへ……重々濟まねへどうかまア見逃して逃がしてお呉んあせへ　草「中々宜い悪徒ですなア　百「宜い悪徒だッて褒める譯ゝねへ此野郎此處な照念様ゝナ御年若で坊様よなッて衣法を着て觀音様へ拜をあげて居らッしやる此佛様見たやうあ御方を何と心得て居るのだ……太へ奴だ打撲ッてさうして役所へ届けやう　草「まア〳〵左様ですが少し待て……哥已ゝ御城下を商へとして歩行く饅頭屋で草てエ者だが已ア事故あつて二三年跡信州の相の川の親分の所で悪所爲アした事もあッて哥どもが逃げて來れば僭匿てやッて一ッ鍋の飯を食て悪い事も爲たがまた善事も爲て居る者だがお前ゝ強悪非道だナお前の様な者ア見た事がねヘヤ十九や二十で尼よ成て生涯佛門よ入ッて身を暮らして仕舞ふ照念さまの様あ尊ひお方をお前押轉して慰まうとするのゝ畜類よりも悪い人だエオイ立派な哥でお前其刀疵を見ると中々肩書のある人と已ゝ思ふ此處で百姓衆よ撲殺さしてお役所へ引たッて仔細ゝねへのだ假令此所で殺さねへまでも引かれゝば生涯沙婆へ出る事の出來ねへ人だといふのゝ面部の疵で分ッて居る已も若へうちゝ隨分樂道者とも交際たが嗚呼悪い事を爲た友達が悪くッちやアいけ

ねへと後悔して今ちやア博奕のゞの字も長脇差のあの字も廢うと思ッて百姓衆も知て居が端たねへ饅頭を賣て跣足で歩行て罪亡しをして一人の阿母よ面會てエと神信心をして此様な片田舎よ潜んで居る身の上だがお前だッて生若へ身の上で兩親でも壯健で居て此様な事を聞いたら其様あ生付け様ゝしねへが今頃ゝ何うして居るかさう云ふ身狀ちやア大方縄よかゝッて入獄だらうかうれども山にでも隠れて居アしめへかと暑よつけ寒よつけふ前の事を忘れる氣遣へゝねへがお前も親を可愛さうと思ふならプッゝリと悪い念を切斷て假令舊悪のある身体で配符が廻ッて居ても頭ゞ剃こかして法衣を着て罪亡しよカン〳〵坊主よでもあれゞ彼奴頸の細ッた奴だがアゝやッて身を正しくして居ると云て八洲も眼こぼしをして素首ゝ繋げて親よも遇へる時節もあらうぜお前が立派あ姿をして親よ小遣を持てッて遣ッて訪問てもお前が盗人でお尋ね者であッたら親の身にとッてゝ嬉しくゝ思やアしねへどうか逃げて呉れば宜い仕舞よい苦しくなッて死で仕舞へゞ宜ひと思ふが當前だお前が法衣を着てカン〳〵鉦を叩て一文二文貰ッて歩行く身上で竹の皮包み一ッ持て行ても親ゝ嬉しく受けるチー人間生れ落ち腹から悪徒てエ者ゝねへが皆んな迷ひから斯うなるのだ旨へ者を食てへとか好い女を抱いて寐てへとか皆な意から出る迷ひだ恥だねへうんあ事で大事あ身体を棄てちやア詰らねへ命がおれゞまた好い時節もあらう何卒お前スッパリ悪事を廢め

て是から眞人間よなッて呉れる心があるなら百姓衆に願ッてお前の命ハ己が貰ッてヨ照念様の方ハに立腹かハ知れねへが改心すればお願ひ申路用がなければ澤山ハ出來ねへが五兩や八兩ハ貰ッて提灯を點けて中の竹を渡ッて通がさうから惡い事ハ云ひません己も惡事の中へ這入たこともわるからお前スッパリ改心して人間よあッて呉んねへ……お前あれねへか哥否かエオイと親切よ意見をしました

百「草三さん駄目だヨ改心する〳〵と云ッたッて直ぐ惡い事をする駄目なものだ止すが宜エチお前ハ信實者だから他人も信實者と思ふが改心致しますッたッて直ぐ嘘を吐くだ嘘言を吐くハ盗人の初め……モウ盗賊よあッてるだ駄目だ無益の話だ　草「左様ですがね……哥エオイ　幸「へエ〳〵と口のうちで返辭をして漸く頸を上げ草三郎の顏をジッと見て居りましたが鬼の眼よ泪だ手が利かないので拭とハ出來ませんから下を向くとパラ〳〵と一度よ涙が落ちました　幸「兄哥さん誠とよ面目次第もねへ實よお前の云ふ通り禽獸よりも劣ッた所業だ兩親の事を云われると嗚呼濟ねへと時々思ッて惡事を爲ても親の有難へ事ハこれでも知て居るがどう云ふ因果か惡道へのめずり込で身腰の拔けねへ樣な身体よあッてまた受けた此疵嗚呼親父や阿母が壯健で居たら片時忘れる閑ハなく血の涙を流して居るだらうと思ッて居る所へ饅頭屋さんが今の異見ハ身よ徹て親父や阿母のことを思ッて私ハ實よ胸が裂ける樣よありましたお前さんハ年ハいかねへが立派な人だねへ己ア八州を切拂ッて逃げた事ハあるがお前の樣お腕前の良い人よ出會した事ハねへ……アア妙な人だ私ハ今迄八州御奉行の云ふとも聽たことハねへが饅頭屋さんの今の異見ハ膽に響いて惡事ハ廢め度なッた誠に濟まねへから此お比丘樣よお前さんから詫とをしてお弟子よして貰ッてお呉んなせへ　草「ハイ誠よ感心しました……どうです皆さん人てエ者ハ斯う云ふもので心ハ皆善人で　百「あれまた眞正直よ受けて……空ら涙だ酷しやアがつて撲拂ッて仕舞へ　草「まア〳〵撲ッちやアいけねへ……どうか照念樣助けてやッて私よ貸すと思ッて……私ハ持合せが御座いませんから十兩許り金を貸して下せへ跡で御返しゃしますから　照念「ハイお前さんの異見で其人が人間にあれば妾も快よい善い功德をあさいました貴方よ金子ハ差上げませう　草「有難う御座へ升……哥サア繩ア解くからね　幸「有難う御座へます……私ハお禮の仕樣がねへがお前さんの此處よ居るうちハ安中の宿へハ小賊の一疋も入れませんうれ丈けが御禮で　百「あんな事を云やアがッて氣味の惡い奴だ　幸「大丈夫でと是から草三郎が繩を解いて目立ぬ樣にして照念尼から十兩の金を貰ッて溝呂木の幸吉よ遣り燻ッた提灯を點けて草三郎が送り升幸吉ハ照念尼始め皆に詫入ッて青菜よ臨嗚呼惡い事を爲たと雲霧が霽たと見えて草三郎の心よ從ひ是から共よ妙義中の嶽を夜越をして甲州口迄

送って参りました

安中草三後開榛名梅香上巻終

安中草三後開榛名梅香下巻

三遊亭圓朝演述

酒井昇造筆記

第壹回

偖お話し二つに分かれまして恒川半三郎の身の上、是い前申上げました草三郎の主人で坐います、文化元年の時浪人致し根岸の植木屋喜平次の厄介になって居まして植木屋姿で取手屋久兵衛と云ふ新橋の呉服屋へ手傳に参り圖らず本庄宿へ棄てました我子のお貞が拾はれてお蠶ぐるみ乳母を付けて丹精と受けて居りますことを知って喜びました、取手屋久兵衛も容子で恒川の娘と知って、丹精して育て上げるから決して心配せぬが宜いと云ふ謎も此方で解き、實子と思召して何卒御養育を願ひますと男同士の信實から半三郎が泊る事になると其晩草三郎が妙義の白藏に誘引て抜刀で盗みに這入った處を半三郎が居たばかりで両人を打懲したから取手屋も喜び危い難を助かった禮として金を三十両と小袖一重ねを遣ると半三郎もいつまで斯うしても居られない屋敷に知れぬ内に何地へか立退ふと風と考へると毋方の弟に當る藤沼圖平といふ者が信州の福島と云ふ處に参って居りますこれは木

曾街道で御坐いまして御嶽へ參る道で御坐いますお國い信州筑摩郡福島で丸の内に一の字の御紋所ろ大神樂の樣な紋所で七千五百石の御家で熊の膽の運上が澤山取れる富貴な御屋敷で御坐います此の家來の藤沼圖平と中者は實の伯父に當りますから之れを便ッて半三郎が參りまして身の上を打明けて話すと眞實の伯父で御坐い升から心配せぬが宜いどうか拙者が世話をしやうからと是から劍客者の門を張て柳生流の奥儀を究めた半三郎山村家のれ召抱になッて劍術の指南を始めましたが藤沼圖平方に厄介になッて居ても氣詰りで世帶を持ち度と云ふときに風とした緣で越中屋と云ふ穀問屋が御坐いますこれい木曾の御嶽講の宿を致しますが宿屋ではない穀屋で御嶽講丈けを泊めます家で此家の娘は名をお常と云て年二十二才御城下評判の娘でこれを藤沼圖平が這入て半三郎と夫婦にしたが恒川は養子に行く事も出來ず向ふも一人娘で嫁に遣る事が出來ないと云のでまづ越中屋の奥座敷へ若夫婦で住込みましたが其頃ろお武家が養子ゑなッて呉れると町家では忝なく心得たもので、庭口へ新たゑ門を建て柳生流の表札を打ッて庭で稽古を致しますうちに屋根を拵へて道場らしくなり、自分は山村樣へ出稽古に參る樣になッて參りました、月日の經い速いもので文化元年の八月の末からして最早福島に五ケ年程居ると藤沼圖平は逝去り跡は奥樣と娘一人ゑ頑是もない悴一人殘り居りますから恒川半三郎は後見同樣になり丹精致すうち娘い十

八になりましたから直ぐ山村樣へ奥勤めお小姓奉公に上げました十一才で圖太郎と云ふ子が家督相續で御坐いまして後れ毛を引詰に結て小さい身躰で親譲りの重たい大小を差して御奉公を致します歸ッて來るとお師匠樣へ稽古に行き越中屋へ來て劍術の稽古をして宅へ歸ると本の稽古乘馬を習ふと云ふ樣にお武家も習ふものが中々多う御坐い升十二才で奉公致す事になりましたが此姉いお藤と云て年十九で美人で御坐います殿樣に思はれまして殿樣が内ゑお藤にお戯れなさる折ゑい手紙抔書いてお贈りがあり戀歌抔も再度送らるゝがお藤は迂濶殿樣の御機嫌の好い樣お すれゞお松の方樣に目敵にされるが怖いからお返辭もあげませんと殿樣は焦て再ゑ返辭を遣せ〳〵と内緒で仰しやる、奥樣はお逝去で白須島新吾右衛門と云ふ家老の娘お松と云ふがお妾ゑなッてそれが奥樣の無い上へお嬢樣を擧けました其頃お姫樣の事をひい樣〳〵と申升が病身さうな名で、姫樣が出來て四才になるからお松の方はお上通りとなりましたが美女で御坐いまして薄での瘠形の細りした少し癇癪持で御坐いますから眼尻がキリ、ッと釣るし上ッて口元の締ッた見るさへ嫉妬深さうな婦人でこれは殿樣を手の平へ載せて丸める樣に致しますまた家老の娘と云ふので人も立てますから益ゑ增長致しまして女の癖に徐々御政事の事まで口出しを致します、才氣のある女でお上通りになると尙々增長致しまして殿樣が一寸でも他の女に串戯でもなさると、御前は小

菊に何かお戯れがありますが貴郎御申戯遊びして若しお手でも着くと松は姫様をグッと刺殺して自害致しますヨなんと云ふ殿様は懼いから、ろんな事は致しませんハイどうして決してありません、杯と殿様方は人が善いから家來任かせなれども藤には念が掛かると見えて三月二日に宿下りを致しましたが或時殿様が藤に逢ひ度ばかり野掛の御裝束で川添富彌と云ふ供廻りを連れ其外近侍二人草履取を連て野掛の歸りがけ藤沼圖太郎方へ行て藤に逢ひ度と云ふとろれはお宜しくない松の方へ知れても宜しくないから恒川半三郎と申す圖太郎とは從弟同士で御坐いますが年取て居ります伯父分になって後見をして居ります、恒川半三郎方へ成せられて宜しからう彼れは柳生流の劍客者で他に少い所の武藝で中々志も善い者で……左様遊ばせ決して知れません、と是から直ぐ恒川方へお出よなりましたので半三郎ハ驚きまして山村家の御家來ハ皆なお松を憎んで居りまして彼婦ハ悪婦だあれさへなければ宜い彼れハ山林家の害だ、どうかお藤にお手が着てさうしてお藤が氣に適てどうかお松を押籠て仕舞度と皆なの量見よあるからお藤の方へ勸誘る様な事で、恒川ハ殿様がお出よなッたので厚い坐布團もありませんが何かお褥を其處へ出しまして寒う御坐いますから火鉢へ火を起し、整然家來へも手當を致して結構な御菓子を山の如く積で出す、此方等へハ茶臺で御茶が出る、殿様ハ床付に坐り傍に富彌が居り升恒川ハ襖を明ひ半御免下さい富「サア先生遠慮なくお這入半「初めて御目通りを致し升、今日ハ圖らずも見苦しい處へ御尊來で何とも恐れ入ります、拙者は恒川半三郎と申す圖太郎の縁合の者で御坐います此後とも御見知り置かれて御贔屓に相願ひます 富「御前これは圖太郎の伯父分よ相成て後見を致して居る恒川半三郎と申柳生流の武邊者で御坐ッて見苦しい處へ御尊來で何とも恐入り升と有がたく御禮を申上御寛くり御休足遊ばす様にと申升 山村「ア、左様か誠に迷惑であらうが一寸野掛の歸りに寄たが藤に逢ひ度ので緣者と云ふから却ッて宜敷い宅へ行ては宜敷ないと云ふ富彌の指圖によッて立寄た、手間がとれるかは知れぬが藤が不在なれば早く何處か探して聘で見たい藤の來る間此處で食事を致すから 半「御寛りとどうか……川添氏 川「エ 半「承はればお松の方は御嫉妬深いと申事、誠に御贔屓は忝けないが藤をこれへ御招きよなッては奉公中で御坐るからお松の方のお耳よ這入て藤がまた後ふに難儀致す様な事でハ年いかぬ圖太郎親の代りよ出勤致して居るが何分にも父親のない家で御坐るから其れのみ半三郎心配致しますがどうか此へお招きでは却ッて……川「先生心配はない宜敷、どうもソノお松の方は高い壓では云へぬがねへ實に嫉妬深い怪からん奴で家中一同難いて居る彼れが爲に折〻差扣へを仰せ付られて居る者もあるのでお松の方を片付け度と思ふが中〻致し方がない家老の娘を鼻にかけて姫様を舉けたのでお上通りとか云ひ誠に憎まれて

居るのだから却ッて藤が御意に適ひさへすれば拙者どもの爲め又たお家の爲めだから宜敷いので半「只今母と墓參に參ッて未だ歸宅致しませんが歸りますればお目通りまで川「成丈け速いが宜敷いヨ 山「富彌 富「ヘエ 山「藤はまだ歸らんか 富「母と墓參に參りましたさうで程なう歸宅致してお目通りを致します 山「早う參らんかナ、寺は何處か 富「何と申寺で御坐いますか近邊で御坐いまして日の暮れる事いありませんが早々呼に遣りまして…… 山「早う致せ……辨當を持て來たらコレ〳〵出せ……恒川半三郎とやら一杯遣らう 半「有難き御意恐れ入ります 山「ナニかお前の姪に當るか藤は 半「ヱ、實は從弟同士で御坐いますが年も相應致しますから手前を伯父〳〵と呼びます事ゆゑ姪の取扱ひを致し、後見に相成て居ります 山「左樣か、藤は感心な者で女どもゝ多く居るが彼れは別だヨ誠にソノ柔和で何か云ても耻ぢてネ後へ下ッて居る彼れはねへ內端で誠に感服の處がある氣に入たのう 半「ヘエ誠にどうも御懇の御意で私まで滿足致し有難く存じます 山「ノウ富彌、藤は歌を詠と聞たからどんなでも心の丈けを詠で予に贈れと申たが赤面して後へ下ッたがぱッと斯う赤くなッた顏はまた好いノウ 富「ヘエ誠にソノ顏に紅葉したは別段て 山「ろれになんだヲ唱歌も知らかだノウ 富「ヘエ仇やかな音聲で實にあれは自然とソノ別で、裾捌きと申しあれは眞の女で至ッて孝心で御坐いまして…… 山「ア、早く鵜

度、とお急ぎで其うち御酒が出て盃の献酬をして居る處へ藤が歸ッて來ました拙もお目通りを仰せ付けられたから有難いと心得て恒川方へ參りましたお藤は年十九で文金の高髷に結び宿下りの事で御坐いますから晴の上にも着飾りまして頭の物から懷中物まで美を盡して、化粧を致した處は實に美人で、昔時風は隨分宜しいもので現今は彼ア云ふ風ゝ御坐いませんが腰帶などを提げまして耻かしさうに恒川の後へ來ました 半「藤が歸宅致えておお目通りを……富「ナニ藤が參りましたか……御前、藤が只今歸り取敢ず罷り出ました、お目通りを仰せ付けられまして誠に有難いとで 山村「藤か……近うコ、へ……能く來た、染〳〵逢て話を致し度と思ッて居たが何分にも出憎いから ……今日ゝ圖太郎方へ行うと思ふと富彌がろれゝ宜敷ないから他へ知れて宜敷ないから伯父の宅へ寄た方が善いと申からこれへ參ッたが富彌がどうかしたいと云ふ指圖で 富「御前、左樣な事を御意遊ばしてゝ困りますナ、御館へお歸りに成て富彌の指圖と仰しやりになると富彌甚だ迷惑を致します 山「それゝ仔細ない、決して言いぬヨ、其方の迷惑になる事ゝ存じて居るから 富「左樣御意遊ばしても迂濶り御意遊ばす事がありますと何うも迷惑致します……今日此處へ御出の事ゝ口へゝ毛筋程も御出し遊ばさぬ樣に…… 山「ア、富彌知れても決して左樣な事ゝ言はぬヨ 富「どうか…… 山「富彌、半三郎ゝ善い姪を持て仕合だナ、實にどうも美しい

富「ヘエ……どうも御意で御坐いまして　山「藤、もッと側へ來い……一杯つげヨ、手前の酌で飲み度と心得て態〻參ッたからつげ、との御意でお藤ハ恥かしさうに恐る〳〵銚子を把て酌をするを殿樣ハ餘念もなくお藤の顏を穴の明くほど見て居らッしいやまして

山「富彌　富「ハヽ　山「なんと襟元の白い容子と云ふものハ藤ハ別だナ、髮の毛の艶と云ひ色の白い事何して箇樣かと思ふ程だナ　富「ヘエ誠に眞白で雪よりも白う御坐います　山「富彌、顏を出すな、手前の樣な不潔い顏を出していいかん　富「富彌の顏とお見競べてハ恐れ入ります　山「藤、此間ね一寸書いたものを遣たがあれッきり何とも云ハぬが四方兼ても居るから尤もと思ふが……今日ハ心いきを聞き度と思ッて聘だのだ……富彌斯樣致さう藤に内〻話があるから其方共ハ次へ下れ　富「ヘエ……皆な下げますか　山「アヽ、半三郎にも下ッて貰ひ度……其所をビッタリ締て　富「ヘエ左樣なら御用が御坐いましたらお手をお鳴し遊ばして　山「宜しい、其所を皆なメめて襖をたッて、屏風の後にかたまッて居ナ　富「ヘエ……重田氏、御前ハ餘程お藤に御執心だナ　重「左樣誠に御意に適ッたね……何所までも藤でなけれバならぬとなッたらお松をどうかして退け度ものだナ　富「退け度といッたッてお上通りになッて居るから迫ひ退ける譯にもいかないが唯だお松の方へハ上が行さへなさらなければ宜いので、まるッきり行かぬと自然と見識に障るから位が落る樣なもので、どうもお松の方ハ非道な事を云ふナ　重「此間藤川抔が可愛さうに、班毛猫をお松の方が可愛がッて居るあれを一寸撲たのだすると猫の事ぢやア何とも云へぬから外の事にして殿樣へ吹かけてトウ〳〵藤川ハ押籠られたが描の爲で……誰れか忠臣な者がおッてお松の方を打斬て切腹すれバ宜いが　富「ぢやア貴公やれバ宜いに　重「己ハ出來ぬがまア忠義ならバサ　富「貴公ハ忠義でハないのか　重「ないのかッたッて無暗に斬れやアしませんが實ハ身分のない者が遣れバよいので　富「何を云のだ、と狐鼠〳〵話して居ると殿樣ハポン〳〵と手を鳴らして　山「富彌富彌　富「ヘエ、……御呼びなさいまして　山「アヽモウ宜しい此方等へ這入れ　富「這入ても宜しう御坐い升か　山「這入て宜い、藤と話をして仕舞たから宜い　富「お早い事で、鶏だね　山「ナニ　富「ヘエ……なに宜しう御坐います、御用ハ　山「藤に是まで予が種〻書いて贈ッた事もあり今一度どうか逢ひ度と思ッたが幸ひ逢て藤の心も分り予が心も藤に分ッて大きに互にテ……誠ホ此上もない大悦だヨ　富「ヘエ御恐悦申上げます　山「モウ是で宜しい、默ッて居れ　富「ヘエどう致しまして誰れおッて申者ハ御坐いません　山「迂濶り言ていいかぬヨ　富貴君さへ御意遊ばさなければ……御前ハ迂濶御意遊ばして困り升、此前富彌迷惑致した事が御坐い升、御花見の折柄　山「あれハ予が悪かッた、モウ言ハないと殿樣ハお人が善い

事で、是から御仕度遊ばしてお館へお歸りになりました

第貳回

翌日お藤は御館へ上り疵持脚で氣味が惡く恐る〳〵御松の方の處へお目通りに出ました、其の頃ろお松の方の勢ひい大したもので小松山に小松の御殿を建てたのを誰云ふとなくお松の御殿〳〵と云ふ位ゐ羽振が宜しいので松露しの御坐敷で御坐います、ズートお屏風抔い奥州松嶋の景、又たお襖い松の極彩色で御出入の畫家に畫せましたがお抱の者も手に手を盡して蒔繪から御手元にあります陶器まで注文をして皆な松が付て闌間の透しも松が彫てあります、お松の方い我儘氣隨で御坐いまして藤かけ色の三所紋に白襟でドッしりした濃紫き淺黄房の下ッた被布を着て大丸髷、彼れ是れ一尺もある幅廣の笄ひを挿て櫛も色の良い厚ぼッたいのを挿し白粉氣い餘まり澤山着けるい嫌ひで尤も色も白い、襟へい濃くり着けて顔いほんのりと致し眉い少し釣し上ッて居てどうも怖ゝしい婦人で御坐います、チラ〳〵雪が降て來ましたからお寒いと云ふので傍の火鉢へ切炭をいけてありますが燃る樣に致し所ゝい火鉢を置き寒いけれども南の方を開けると小松山へ雪が積り其景色い畫にもかけぬくらゐで、お藤は怖がつて遠くの方で頓首をして居る　お松「藤、其處ぢやァ話が出來ぬからお前此方へれ這入り……其處ぢやァ話が出來ぬからズートれ這入り　藤「御機嫌宜しう三日の御暇頂きまして父の墓參も致しましたお松「ハイ……まアもッと側へお出方樣へ申上げる樣にと呉れ〳〵も傳言を致しまして扨も殊なう悦びまして宜しうお松のて……妾いもう頓と下方の事い知らぬからお前に聞くのを樂みに待て居た、お前の宿下りにい無面白い事もあるだらう、さアもッと側へ來てお聞かせ　藤「恐れ入ます　松「もう少し側へ來ナ　藤「ハイ、と膝を進めて疊二疊バかり隔ッた處に居ますと　松「まだそれぢやァ話が出來ない妾い大きな聲で物を云ふのい嫌ひで靜かな聲で云ひ度からズット側へ來ナ、藤「ハイ恐れ入升　松「遠慮をしないでモット側へ來ナ、話を聞き度からぢやァないか……側へ來ないか、と云ふと眼が釣し上る、お藤い怖いからハイと恐る〳〵間近く來まして頓首をして居るとお松の方い松の彫のある銀の延煙管を疊へ突き立て乘り出してお藤の顔をジッリと覗きました　藤「何んぞ御用で御坐いますか　松「イヽヤ用でいないが稀の宿下りで思ふ人に逢ひ嘸お前嬉しかッたらうと云いれて悒り致しましたが覺られまいと思ひ　藤「思ひがけない事を御意遊バして、妾が宿下りに思ふ人に逢ひます抔と何して其樣な事が御坐いませう、御申戯を御意遊バすも程があります、妾ゝい思ふ人などい御坐いません　松「ふち、何故お前お隱しだ、隱さないでも宜いぢやァないか年に一度の宿下りで思ふ人ゝ逢ふのい當り前だ、それが樂みで辛い奉公をして居るのぢやァないか何も隱す事いない、さう

云ふ事ゝ打明けた方が却ッて宜いから聞かしてれ呉れ　藤「如何やうに御意遊ばしましても妾ゝ思ふ人などに逢ふと云ふ事ゝ御坐いませんものヲ　松「どうでも隠すか……お前が戀ひ慕ふ殿様がお野掛にお出遊ばして何處でお目通りをしたか言ても宜いぢやァないか　藤「エ、……まァ思ひがけない事を……殿様にお目通りを致しました覺えゝ決して御坐いません　松「イヽヤ幾ら隠しても往かぬ殿様ゝッイお口が辷ッて御意遊ばした事もある……殿様も是までお前を最屓に遊ばすがどうも妾と云ふものがあッて思ふ様に出來なかッたがお野掛で染〻と殿様のお肌召を汚して嘸お前も嬉しかッたらう殿様も思ふ念が露れて嬉しく御思召たらうと妾ゝ思ひ升ゝ　藤「誰が其様な事を申ましたかお松の方様ゝ御疑り深い事で、妾ゝ殿様のお肌召を汚しました事ゝ決して御坐いません、そんな覺えゝありません　松「是程妾が柔しく云ふに何處までも情を張て明かさなければ妾ハ言はせる様にして言はせるが言ぬか……是でも云はぬか、と手に持て居た延煙管を持てお藤の膝をピシリと打ちました、お藤ゝ飛上るほど痛いが逃げる事も出來ず　藤「嗚呼情けない……何の様に御意遊ばしても妾ゝ殿様の御肌召を汚した覺にゝ御坐いません　松「まだ左様いふ事を云ふか……云はぬか……、云はないか……云はなければ量見があるぞ、と黒檀柄の火箸を燃える様な火の中へ捕した時ゝ傍に居りましたお附の女中衆も互ひに顔と顔を見合せて怖いから、逡巡よ次へ

下りました　松「さァ何故云はぬのだ、悋氣も何もするのぢやァない……御前が何か御意遊ばすも當前で、一人や二人のお召使ゝ當り前だから妾ゝ立腹して云ふのでゝないが隠してをされてゝ妾も此儘棄てゝ置れない……ナぜ云はぬヨ　藤「ハイ……　松「まだ云はぬか、と此度ゝ小鬢を撲ちましたから小鬢の所へ厂首が這入ッて血が流れました　藤「嗚呼お情けない、妾の様な下役の娘賤しい身の上で殿様のお肌召を汚す様な事を致す譯ゝ御座いませんのに何故左様な事をお疑りで御座いますか……お情けない、何の様に御折檻遊ばしても神かけて覺えゝ御座いません　松「どこまでも神かけて覺えがなければ賤しい身の上でありながら何うして馬蹄香の馨がお前に移ッて居るかサァろれをお云ひ、殿様のお肌召にゝ二代の上様より拜領の馬蹄香を彫んだお守りをお外出の時ゝ屹度お持ち遊べす名香がどう云ふ譯でお前の肌に馨がするかさァそれをお云ひ、云はないか……ェーそれを云はないか、と問ひ詰められた時ゝ一言半句の答もない、殿様が何でも云ふなと御意遊べしたから云はず に居たが思ひがけない名香の移香に分疏立ずァッと其儘泣き倒れました　松「サァ泣て居てゝ分らぬ、言ひさへすれゞ何も仔細ない　藤「ハイ……誠にお松の方様ゝ相濟ませんが殿様がお情けのお言葉に有難いと存じまして實ゝ昨日殿様の御思召に從ひました　松「能く言た、よく殿様のお言葉を背かずにお肌召を汚したナ、と云ふうち顔色が變ッて眼尻が上り

煙管を持つて居た手がブル〳〵と慄へまして一と通りならん嫉妬で御座います　松「それほどお前が殿様に御眼をかけられて忝けないと思ひ、昨日お目通りをしながら今迄能くも隠したナ、此偽り女め、と左の手で文金の高髷をムツと掴んで横に引倒しました、ア、御免遊ばせと女中が總立に來てどうぞお宥し遊ばしてと云ふを　松「お前方が寄ると楽て置きませんぞ、と云ひながら火鉢へ挿して置いた焼火箸を把たからお藤ハ驚いて後へ下ると、此の大胆女め妾がこれほど思ひ詰た御前様を汝能くも寝取たナ、能く白ふしく隠して妾を欺いたナ、と憫然ま十九になるお藤の咽喉元へ眞赤に燃てゐる火箸をジーッと差通しましたから虚空を摑んでウーンと七轉八倒の苦しみ腰の抜たお女中もあり這て廊下へ出ますもあり バタ〳〵と云ふ騒にお松の方ハ火箸を持て立上る、身の毛も凄立ばかり實に酷い嫉妬で、　松「恨めしいハ殿様能も浮氣を遊ばしたナ此上ハお表へ行て問ひ糺さなければならぬ、と廊下を蹴立て狂氣の如くなつてお表へ乗込ました殿様ハ雪が倍々積るので簾を拂ッて雪を覧ながら一盞召上ッて入らッしやる、信州福島方りハ寒い所で三月末四月上方りまでどうかすると雪の降る事が御座います、此騒ぎで今お松の方がお表へ飛んで行くのを御近侍も居りましたが怖くッて寄付者ハなく誰あッて止人も御座いません、此事を聞たハ白須新吾右衛門といふ家老で、お松の方の親で御座い升、駈付けてお仲臈下でお松の方を抱止め新

「上を何と心得る荒々しい、心を鎮めろ新吾右衛門であるゾと云ふので漸く止めましたが殿様は慄へて怖がッて入らッしやる、可愛さうなのはお藤でまづ死骸は親方へ引取らせ藤が不憫であると仰しやッて殿様から百兩のお手當ろれて事ハ濟んだので實に惨酷な事で御坐います、人命が百両で事濟になるとハ昔時の法で實に情けない事で御坐い升金を山ほど貰ッても一人の娘を非道な殺され方で母も殘念に心得ましたけれども泣子と地頭で云ふともッたが夜に入ると枕紙の乾く間もなく徹夜泣き明す事は稍〻一月ばかり其うち内聞の御沙汰で百日ハ忌服で御坐いまして圖太郎も番を退て居り升、六月の二十六日に漸くの事で百日の忌服も明き是から土用干で御坐います、母ハ四十九ようなりまして年寄ッ子で御坐いますから圖太郎を可愛がりまして二人で土用干を致し書物や何か椽側へ並べてこれに采配をいれて片付る、圖太郎は年は十二だが怜悧な子で母の言葉に從ひまして能く働いて居りまス　圖「阿母様此御本ハ何で御坐いますか……コレハ何の箱へ入れますか母「大きなのは大きい方へ入れて小さい方は此方等へ入れて夫から其處へ殘ッたの丈けハ積で置て明日能く采配を入れてまた乾さなければならんからマア大きに御苦勞草臥たらうノウ　圖「些とも草臥やアしません……阿母様土用干にお矢が二本出ますが此お矢ハ公方様から頂戴したと

阿父様が仰しやッたが左様ですか　母「夫れにはお書物も附いてありますがお前がソノお書物の事は心得て居なければなりませんよ、此の藤沼の家にとッて此お矢ハ大切な寶だよ此お矢を鹿相にも折たり又ハ疵でも拵らへる様な家來があれバ手討にすると云ふ程で、二代の上様から此二筋のお矢を拜領したので　圖「ヘエ左様ですかどうして御拜領になりましたので御坐います　母「これは關ケ原の戰爭のとき二代の上様が十三峠をお越し遊バすとき當家の殿様がまだ木曾の義仲の殘黨で當國にお出の時分で、其時お味方申上げるとて野武士山賊を五百人も聚めて二代の上様へお味方を致し峠をお送り申上げた事がある其時に黒澤の十千藏と名前を代へた奴がこれハ大坂の間者で上様のお越しよなるのを松の樹に乘て待て居て鐵鉋で撃殺さうとしたのを先祖の圖平殿が見て曲者が彼れに居るが上を覘ッて居りますぞ早く〳〵と云たが聞に合ひませんから上様の持て入らッしやるお矢を拜借して弓に矢を番て放つと野武士で鳥や　獸を射るは至ッて上手であッたから覘ひ違はず十千藏と云ふ曲者を射落したので上様のお身も安うしてお越しになッたから何でも褒美を取らせる望めと仰しやッたが昔時の人ハ慾が無いから望む物は御坐いませんが結構なれ矢で御坐いますからこのお矢を頂戴したいと云ふので上から二筋のお矢を頂戴して當家の殿様ハ馬蹄香と云ふ名香に偖か兼氏の太刀を御拜領遊ばしたと云ふと、此家に取つて家來筋でも殿様の

拜領物と云ひ上様御手づから下すッたハ別段尊いから上用干をするときも上へ一度申上げてお矢を出しますと云ひ立て于す位だから大切の物で　圖「ヘー左様で御座い升か、阿母様若し此お矢を家來が折りますとお手討ゑなり升のですか若しお手討がお宥しのときハどうなります　母「お手討がお宥の時ハ永の暇、これハまア出さなければなりません　圖「若しお矢を此圖太郎が折りましたときハどう致します　母「折てハ大變で御座います、お書面もあり升事だから先祖の遺言で棄てハ置けぬ縱令子でも手討ゑするのだがお前の様な少年者なら上へ對して濟まないから久離切て勘當せんけれバならん　圖「ヘーでも他ゑ子供が御座いませんで阿母様ハ圖太郎が可愛いから勘當ハ出來ますまい　母「ナニ先祖のお書物には換へられません不禮があれバ子でも殿様へ對して濟まぬから勘當しなければなりません　圖「左様で御座いますか　母「念を押たッて妾も御父上様が亡後ちハお親父様の代り武士の家に生れたからハ二言と申ません　圖「ヘーと何か致してゐるうちにピシリッと云ふ音がしました　母「なんだい、コレ圖太郎何うしたの

第三回

圖「阿母様大變な事を致しました、お矢を損じました　母「あれまア……悔りしたどうして……持て來て見せな　圖「誠ゑ能けない事をしました、二本ながら折れました　母「呆れ

て仕舞ふ、まアなんでこれを、お前大切な此矢、過矢でいありますまい故意折た樣に思はれる、棄てい置かれません 圖「仕方が御座いませんからお勘當を願ひます 母「ろれぢやアあんだチお書物の客子を聞き妾に念をついて二言とい云はぬと云はせて置いてお前がお矢を折ッたのい故意と勘當がされたくッて折ッたか 圖「ヘエどうかお勘當を願ひます……阿母樣私い疾から武士になるのが否で御座います 母「まア〳〵呆れた奴だ、何で武士になるのが否だ 圖「ヘエお稽古が忙ケ敷ので遊ぶ事が些とも出來ません、坊が勸めます所い皆な年を取た方ばかりで、親父樣の紀念の重たい大小を差して彼所まで行のい途で腰が痛くなッて歩行ません、耐忍して此間も足が腫れました、否で〳〵なりません、歸ッて來ると伯父樣が劍術の稽古お鎗の稽古などして毎日些とも遊べませんろれから思ふと百姓の子や柚の子い樂で御座います毎日〳〵明ても暮ても遊んでばかり居り升から坊い百姓の子か柚の子になり度う御座い升から何卒勘當なすッて 母「不埒な奴、何とも云ひ樣い御座いません……勘當がされたければ何ぜ武士が否だから勘當して下さいと云はぬなんて大切のお矢を折た、棄て置かれません汝の樣な者を助けて置くと後よい何う云ふ事を爲出すかも知ません此んな不孝不忠の子いありません親父樣になり代ッて只タ今手打にするから左樣心得なさい 圖「どうぞ御免なすッて お手打丈けい御免なすッて 母「料見なりません憎い奴で、

親父樣い亡し妾が甘く育てたから歎へが悪い、濟ませんから此儘にて樂置きません、と立上ッて聽かぬ氣象な母で御座いますから床の間の刀掛けにありました小刀を把て鞘を拂ふと圖太郎い御免下さい〳〵とバラ〳〵廊下を逃げる母は小刀を振上げて追ひかけると嘉平と云ふ若徒か飛出して 嘉平「マア〳〵御新造、危險御座います、お少年でい御座いませんか、なんだッて年もいかんから御立腹でせうが刃物三昧をして……若樣ですから 母「イヽエ棄て置かれません憎い奴で御座います、嘉平や、お前大事なお矢を二節折て故意と勘當をされ度い百姓になり度と云ふこんな心がけの者を助けて置けば始終い殿樣のお家に害を爲す奴、殿樣へ對して棄て置かれませんから男親に代ッて斬ります 嘉「左樣でも御坐いませうがまア〳〵少しお待なすッて……お坊樣、何ぜこんな事をなすッた、若若いお坊樣でい御座いませんぜモウ旦那樣のお逝去の後い御家督相續で上へ大小を差してお勤めなされ年の往ぬに毎日〳〵暑くも寒くも否な顏もなさらんで出勤なさるが否な事も有ませうかと思ッて聞くと親父樣の亡い後い太儀とい思はぬ早く坊が大きくなッて阿母樣に御孝行しなければならん今に立派な武士になッて加增して藤沼圖平の家を相續すると平常貴方が仰しやる、貴方の小さい時分から私い奉公して居るから後れ毛を漸く鬢付で着けて若衆に結て重たい大小を差してお勤めなさる御孝心を嘉平いいつも譽めますよ、貴方い阿母樣い大事

と仰しやるぢやァ御坐いませんか、勘當され度と大事な親を思はぬと云ふ貴方いつそんなお氣におなりなすッた、實に貴方に似合ない事ぢやァありませんか……御新造樣御立腹で御座いませうが上のお耳に入ませんやう間へ竹を通してそれをコウ膠で繼で苧で卷きまして漆か何かで古びの樣に見せて若お尋があれば拜領の時分から糸が卷てあッたと云へばどうしたッて古いから知れる事はありません 母「なりません、お書物にお矢の圖が畫てありますから勿ろんな後ろ暗い事をしてゝ濟ません、妾ゝ乘て置かれぬから勘當するか手打にする 嘉「まァ〳〵れ待なすッて、 宥めてゐるうち圖太郎ゝ袖下を潛ッてフィと駈出し陣屋を出まして坂を下りて横に切れ橋を渡ッて黒川莊助と云ふ舊來居た家來が柳をして居る其處へ參りまして 圖「爺やァ在宅かへ 莊「ヒャァ御座らッしやいまし、何所へ御座らしやッたノ 圖「アノ坊ゝ勘當になッて子、行く處もないから爺やァ當分どうか置てお呉れナ 莊「ヒャァどうも困りますねへなんで御勘當になりやした、只た一人のお子樣を御勘當なさるてエゝ困りやした事で莊助お詫とに出やせう 圖「詫とをしても往けない、坊ゝ勘當され度から故意と勘當されたので 莊「ヒャァどう云ふとで 圖「お稽古に計り行て勤めゝ否だからねへ一通りの事ぢやァ滅多に勘當しまいと思ッたから爺やァも知て居るアノ尊いお矢を折たの、れ矢を折たら勘當するだらうと思ッたらお手打にするッてへから逃て來た

莊「ヒャァどうも頑是ねへたッて……仕樣が御座りやしねへナ、彼れゝお家に取てゝ大事なお矢で家來が折れゝ手打ゐすると家來に申渡を致しやすほどの大事なお矢を勘當され度からッて打折ッて仕舞ふ抔とゝヒャァどうもお怜悧でも左樣云ふ所ゝ子供だナァ……貴方ゝモウ子供ぢやァねへよ旦那樣の跡を繼ぐ人だ……相續のが否だからッたッてあんたまァどうなさりやす 圖「爺やァ坊ゝ柳の子になッて遊び度から 莊「馬鹿な事を仰しやります、お前樣ゝコレ濱浦樣の家來であれゝあんたに途中で逢へゝ百姓が土下坐をしてヒャァと云てお通りの時ゝコレ頓首をしなければならねへわけだ、夫れを若君が百姓になッて仕舞へゝ土下座ァするものもなくあるが若君ァそれでも宜うござりやすか……若君ゝ駄と云ふとを知りやせんね 圖「駄も何もいらん、遊び度から置てお呉れナ 莊「置かれやァしねへ、若君の樣な馬鹿な者を置て駄目で御座りやすから置かれやしねへ何所へでも出ておいてあさりやし 圖「爺やァお前が置いて呉れないと坊ゝ何所へも行く所がないから木曾川へ飛込で死ますよ 莊「ヒャァ困りやすナ、どうもうんな頑是ねへ事を言ひやしてゝ已が困りやすよ、家へお歸りなさりやせ御一緒に參りやすから 圖「否だ、家へ歸れと云へゝ木曾川へ飛込で仕舞ふ、置て呉れゝ宜いが置て呉れなければ死で仕舞ふ 莊「どうも仕樣が御座りやしねへ遊び度くなッたか……お待なさりやし、まァ御新造樣に話しするから、と莊助が往ッて嘉

平にも會ッて種々相談をすると棄て置かれないからと云ふので是からお矢を折た廉で圖太郎樹當の旨を重役の千村喜又と云ふ人へ屆けました、垣川も來てれい遊び度いだらう、子供い遊び度いものだのよ勸めが烈しいから無理もない、少し遊ばしても宜からう、遊び盡して倦た所でまた詫ことをしたら宜からうと千村喜又へ話しをしたら、年のいかぬ事だから御前体ハ跡で話したらどうかなるだらう、と話し合て莊助方へ預けましたが表向い勘當で御座います、圖太郎い毎日莊助と一緒に山へ行て鹿柔を折る手傳をしたり鐵砲を搗いで兎や雉子を打て山中を歩くから壯健になッてムク〳〵と肥滿て來ましたが頑是もない事いふので莊助も世話がやけ升が夫〳〵手當を致して居りました、六月から七八九と四月ほど居て丁度九月の十三夜に圖太郎い小さい鐵砲に彈玉を込めて雉子でも擊つ量見か月夜ざしに山を下て澤を越えまた向ふの山へ登ッてまた大きい山を越えると下い谷間で流れがあるこれを渡り向ふの小山を下ッてまた山を越て七八間も行くと少し平坦の所へ出まして小松原が御座います圖太郎い小松の植込の中へ隱れました向ふの新御殿でい丁度十三夜の御觀月の催しと見ゝ家老白須新吾右衛門も居りお松の方い美〳〵しく飾ッて居る、お小姓衆い音曲を費で頻りに興にいッてお酒盛最中で御座い升、圖太郎い松の枝股の所へ胡の狂はぬやう鐵砲の燧口を掛けまして 圖「お松の方覺えて居れ此三月十八日によくもお姉ェ樣を燒火

箸で殺したナ、今其の讐を此の圖太郎がとるから覺悟しろ、といひながらカチリと引金を押すと玉いヒューと飛んで往きましたお松の方い今延煙管を持て微醉で殿樣へしな垂れて居る處へドンと一發鳩尾を覗ッて擊ちました玉い少し上へそれて咽喉元をプッリ擊拔きましたのでお松の方い前へバッタリ倒れましたが側にあッた物を摑み片手に延煙管を持て爪立つとたん髷の元結が切れまして毛が下る、呼吸が切てガラ〳〵ッと血を吐き身を慄いしてドンと其酒宴の中へ倒れました、殿樣を始め家來お小姓等い驚きまして只ハッと云ふバかり、それ狼藉者と云ふうち圖太郎い鐵砲を搗いですた〳〵歸ッて來て 圖「爺やァ今歸ッたよ 莊「ヒヤァどうも心配しただ何處へ坐らしッたか私探しに行うと思ッて居た 圖「アノ子澤を渡ッてヅン〳〵行たら新御殿の方へ出た 莊「まァあんな所へ行てヒヤァ濟まねへ事だ誰にも會いんかねへ、叱かられますぜ 圖「お松を擊て來たノ 莊「無暗に鐵破打ていならぬッて制札が建てあるに無暗に擊て中に人でも居ると怪我アしますよ 圖「ナニ松の樹を擊たのぢやァないお妾のお松の方を鐵砲で擊ち殺した 莊「エッ……、と莊助い驚き腰が拔てブル〳〵慄へ 莊「ナ……なんでそんな事をなさりやすか……それだから云いねへ事ぢやアねへ鐵砲抔生じ出來てポン〳〵兎や雉子を擊ていならぬと云に飛だ事をなさりやした、鹿相ぢやァ濟みませんぞ 圖「鹿相ぢやァない眞實に擊たので……爺やァ此の三月十八日お

松の方がお姉ェ様を焼火箸で殺してから阿母様ゝ夜登泣通して居て口惜いからお松を殺し度が家老の娘でお上通りだから家に疵が付くと詮方がないと云て阿母様ゝ泣て居らッしゃる、又た御家來等も濱浦の家にお松が居てゝ殿様の瑕瑾だと悪く言て殺し度が殺せゞ自分の家が潰れるからと皆な耐忍をして居て、多勢様の難儀になるから坊がお姉ェ様の讐をとッて殺さうと思ッたが坊が殺せゞ矢張藤沼の家が潰れ死だ親父様に濟ないから坊さへ居なければ宜いと思ひ故意とお矢を折て掲當となッたからお松を殺したッて藤沼の家に疵ゝ付ぬ、お役所へ坊が鐵砲で撃殺しましたと名乗て出るから爺やァお前阿母様にお目に掛ッて此六月阿母様にあんな悪口を吐きましてお矢を折て出ましたがお姉ェ様の敵が討ちたいばかりで御座います、心にもない悪口を吐きまして是まで御養育を受けました御恩も報じませんで先立て濟ませんけれども御家に障らぬやうお松の方を討止まして殿様の禍も退けましたから坊ゝ名乗て出まして御處刑を受けます、阿母様ゝ他處から御養子をなすッて死水を取てお貰ひなさるやう願ひますッて……誠にたゞ坊が阿母様ゝ悪口を吐たのゝ濟まないと思ッて寐ても覺ても坊ゝ今まで忘れません……爺やァお前から能く阿母様にお言傳をしてお呉れ……爺やァにも此處へ來て永く厄介になッて態と坊が我儘に見せてお前を困らしてお前が心配した事ゝ坊ゝ忘れやァしませんから坊が後來に成長なッたらお禮もするのだが坊が先立てゝ濟まないけれども殿様の爲めお姉ェ様の讐を討ッたのだから仕方がない……爺やァ追〻寒くなるから身体を大事におしよ 莊「ヒャァ〳〵どうも魂消やしたナヒヤァどうもそれゝ、ろんな事とゝしらねへで若君が出てござらしッた時ゝこんな馬鹿な坊様ゝねへ如何に年がいかねへからたッて頑是のねへ坊様だッて馬鹿だ馬鹿だと叱りましたのゝヒャァ面目次第もねへでござりやす……十二でこんな考へを成らッしやるに六十五才になッて其の考へが無とゝ耻た事でござりやす、坊様あんたゝ先の永へ方で莊助ゝ定命より十五年も生延びたから私ィ引受けて代りになッて鐵砲で撃たと云ふから……圖「イヽェ爺やァろれぢやァ何にもなりません武士が讐討ゝ當然だから私が名乗て出なければ苦勞した甲斐がないから爺やァ私をどうぞ莊「ヒャァ若君アやッてゝなりましねへ 圖「イヽェ放して、と取縋るを振切て圖太郎ゝ黒川のなだれを駈けて行く莊助も一生懸命追かけるが子供の足ゝ速い、坊様ァ〳〵と呼びまするが構はず駈け下りて參り升

第四回

昨年より引續きの安中草三郎の傳記で御座い升、彼の濱浦家の愛妾お松の方を打殺した藤沼圖太郎ゝ自ら名乗て出るとて莊助の止めるも聞かず黒川の濁れを駈下ります莊助も一生懸命に追かけますが老体で足も渉取ませんし子供ゝ身輕で御座いますから忽ち一町ばかり

遅れまする、なれども莊助の怒鳴ります聲い谷間へ響きます此時恰好恒川半三郎い重箱へ園子や栗柿の樣な物を入れて、莊助の宅でい思ふ樣に食物もあるまいから些との物でも持て行ッて圖太郎に食べさせやうと重箱を提まして黒川を上ッて來ると向ふから坊樣ア〳〵と云ふ莊助の呼聲が致し升、何事かと透して見ると十三夜の月い木の間を漏れて圖太郎が駈て來る姿が見えます跡から莊助が追駈て來るから何事かと直ぐ圖太郎の手を捕へ半「コレ何で左樣に世話をやかせる、エー考へて見なさい阿母樣からお勘當よ成て莊助に世話に成て居ていないか莊助を何と心得る莊助の庇蔭でコウ遣て居られる身の上、いつまで頑是なく世話をやかせるのだ……サア私が連れて行くから……チ、莊助か、何うしたのだ莊「ハイハイ、好い處へ來て下さりやした……ア、呼吸が切れて……此處ぢやアお話が出來やしねへから何卒私の宅までお出なさりやして半「コレ圖太郎どう云ふ事か爺やアよ世話をやかしていなりませんぞ、と半三郎に押へられて逃る事も出來ませんから圖太郎い泣きながら莊助の宅へ歸ッて來ました莊「サア此方へお這入なすッて半「どう云ふ事で莊「ハイ旦那樣、是々て御座いますと莊助が後前なれど圖太郎の志を話すと半三郎も實に感心して半「圖太郎能う讐を討た私が初めて當地へ來た時いまだ頑是なかッたが其折でさへも伯父樣い劍術のお師匠樣、此御陣屋の家來等に御親父樣が連れて行てお薦め申たらお弟

子も澤山出來ませうから陣屋へ伯父樣が出稽古なさる樣にお世話あすッてお遣りなさいとお前が親父樣へ言たときい私い惝りしてア、實の成る木い花から知れると其時お前の親父樣へ言た事もあります……尤もな事で決して惡い事でいない、殿樣へも害ある女憎むべき寡婦、彼れを棄て置く時い始終禍ひを惹起す、諸役人も頻りに心配して居る處なれどもお前が是から駈込で出て御仕置を受けてい忠義にならぬ、お前い先の永い身の上、ゞ死ぬ命を時經て殿樣へ差上て忠を竭す時節もあらうから此度の事い乃公に任かせろ、ア、能う阿母樣に向ッて愛想盡しを言て勘當された實に私もそれ位の事といい心付かなかッた……ア、圖太郎から見ると私い耻入た事だ……まア〳〵莊助阿母樣をお呼び申せ、と云ふので是から莊助は陣屋へ悄と往ッて圖太郎の母を招て一寸來て下さいと連れ立て陣屋を離れて途々小聲で圖太郎の身の上話をして來たから母いモウ途々袖を絞るばかり泣入て這入ッて參りました恒川い右の次第を話すと母「ハイ……圖太郎勘忍してお呉れお前が左樣云ふ心ろにい知らず餘りな奴だ不孝者と其心底を知らぬからお前を斬るとまで脇差を把て追ッかけたが妾が惡かッた……能く讎を討てお呉れだ、草葉で、藤が無悅んで居ませう、殿樣のお爲め、縱令藤沼の家が潰れても濱浦樣のお家の爲めにい代られません妾も共々お仕置を受ます……さア二人て名乘て出ませう半「まア〳〵伯母樣左樣云ふ事を仰しやッていならん

私の云ふ事をお聽なさい、圖太郎ハ十二才の未だ子供で斯う云ふ謀計を設けて奸婦を討ち止めたハ忠義だが名乘て出れバ乘て置かれぬ殊に對手ハ家老の娘、藤沼の家が潰れても詰らぬ、私ハ無祿で主もない祿もない、獨立の半三郎八ケ年以來御丹精を受けたのハ一かたならぬと、此御恩報しに半三郎が身に引受けて私がお松の方を殺したと云ふとに何處まで言張れバ仔細ハない、此國を立退きます、何卒知らぬ顔してモウ宜からうから圖太郎の勘當ハ上へ願ひ立て元へ歸ッて阿母樣へ孝行を竭し殿樣へ乘る命を以て盡しさへすれば忠義ハ此上もないとて、忠勤を勵むが宜しい私ハ伯母樣江戸表へ出立致します母「お前が立退たッて跡方ハ半「イヱ決して何とも言て下さるナ、私の命に係ハる樣な事ハ致しません御心配下さるナ、何も言ハず跡で分るから就てハ御無心だが宅へ歸ると宅を出るに面倒だから私ハ幸ひと門弟の小島の家へ預けて置た師匠から譏られた柳生流の傳書と此間彼所の娘が洗張をして仕立直さうといッて呉れた羽織を一枚恰度持て來ました、私が家へ行くと面倒だから伯父樣の合羽がありませうあれを貸して下さい、路銀ハ多分にハ要ませんが江戸表へ參ります丈けあれバ宜しいので……私が身に引受けて屹度跡方の御迷惑にならぬ樣致します御氣遣ひなさり升ナ

「伯父樣貴方が殺しもしないに罪を引受けて下さると私が濟みません、何卒私を半

「まア〳〵私の爲ると見て居な深い事を知らぬからだ……私に任かして下さらんと止を得ず、母と圖太郎と同意してお松の方を害せんが爲上を欺むいて勘當をしたと訴へる、さうすれバ藤沼の家ハ忽ちに潰れる、これ位ゐ親不孝ハないでハないかまア〳〵心配せずに私に任して下さい、と云ふ母も何事か理由ハ知りませんが、ろれまで御思召下さるなら宜樣に願ひます決して何もいひません知ぬ顔して居升といふので恒川も安心し、莊助も一言他に漏してハならぬぞと確と言含る、伯母ハ駈て行て着替の風呂敷包と旅金を三十両、其頃の三十両ハ大金で、これを餞別として半三郎へ與しました、恒川ハ三十両の金を着換の間へ挾んで傳書と一緒に柳行李へ入れ暇乞として立退くとき離縁狀を一通認めて越中屋の庭から投り込で出立し福嶋の御關所へ掛ると馴染で御座いますから、此間ハ先生と役人も云ふ位ゐで仔細なく關所を越して建札の處へ二行の貼札を致しました、濱浦家へ害と爲すお松の方を殺して立退く者ハ恒川半三郎源朝義、と名乘まで書いて搗ハず其晩ハ世波へ泊りました、關所の人ハ跡で貼札へ氣が付き直に訴出ましたから濱浦家でハ諸方へ手配を致しましたがよもや順道にとハ思はない上方へ出たか飛驒へ越えたか三越探と諸方へ手配をしましたが知れません、恒川ハ世波の宿屋へ泊ッて翌朝遲う出立致しました、沈着りを致しました、十九

たもので、あれから下の諏訪へ掛りましたが久〳〵く歩きませんから脹足で草臥て翌日ハ思

ふ樣に歩行ません彼れ是れ只今の三時少々廻った刻限に下の諏訪の鳥居前へ來ました、其處に宮本屋といふ休み茶屋が御座い升、お世辭の能い女房で、往來へ繁く來る客出る客が多う御座い升 女房「さア此方へお掛けなさりやして、どうか此方へ、狹う御座りやすから此方の角へお掛けなさりやして……ヒヤア眞にお生憎で御座りやして御酒を召上るなれば錦糸鰍に牛房が御座りやして眞にヒヤア……饂飩がござりやすヒヤア……御寛らヒヤアどうも御茶代を有難うござりやす御機嫌宜しう御坐りやすヒヤア、抔と云て入替り立かへり人が出這入ります、半三郎此所へ這入て角へ腰をかけまするとと前の方に居ました人へ旅功者と見えまして油紙包を幾個も累ねて荷拵へが上手で、深い三度笠を被り寒いから紋羽の頭巾を冠って廻へし合羽を着、銅鐵を差して盲縞の脚半脚かけ草鞋穿で 旅人「殿樣御免下さい 半「どうもお寒いとて御座って 旅人「誠に失禮で御座います頭巾を冠って……何うもお寒う御座い升ナ笠を被って挨拶してへ濟みませんが誠にどうもお寒い事で 半「仰しやる通りお寒い事で、是から和田へへ何の位ありますか此峠へ 旅人「五里半九町と申ますが實へ六里で御座いませう、是から峠を越すと餘程骨が折れませう唐澤方りで暮ませうが片宿へ行て泊まれば不自由へ御座いませんが唐澤へ泊ると召上る物が御座いません 半「ハア大分お委しいね 旅人「へー 私へ旅商人で毎度下り上りを致します、へー貴君もお越

して御座い升か 私も是から越しますので……殿樣誠に失禮 半「どう致しましてモウお立て御座い升か、といふうち旅馴れた男へ出て行きました、恒川へ寒いから酒を飲で饂飩を一杯食て大きに温まりましたから 半「コレ〳〵家内勘定致して呉れ、何程か……アノ左樣かと勘定を仕樣と傍を見ると柳生流の傳書や旅金を入て置いた柳行李が御座いません 「これ〳〵家内 女房「ヒヤア 半「此處へ置た包を其方へ片付たか 女房「ヒヤア片付やしやせん 半「誰も居りへせぬ、旅の人へ此方に置いた包を片付たか 女房「ヒヤア片付やしやせん 半「イヤ此所居て包へ此方へ置いて壁に付て食事をして居たがどうした 女房「どうで御座りやすかヒヤア盗人でも持て參りやしたか知れやしねへ 半「持て參ったか知れやしねエでへ困るお前へ客商賣をして斯う云ふ身分体の者へ怪しいとか少しへ心得があらう、此處へ置いたので取られる氣遣もないが探して呉れ 女房「ヒヤア度々物が無くなりやすけれども知れやしねエてねへヒヤア誠にお氣の毒樣で御座りやしてヒヤア 半「ヒヤア〳〵とばかり云て居てへ困りますね問屋場へ掛るとか名主へ掛るとか、詮議をして一日二日心配したら知れぬ事もあるまい大事な品があるので 女房「紛失物もありやすがね皆樣が泊って問屋場へ掛り名主へ掛って詮議なさりやすがどうも日間潰し丈けで物の出た事へござりやしねへで小賊がゑらう御座りやしてヒヤアお氣の毒でヒヤア 半「どうしても出ぬかへ、當惑致したナ、と

流石の恒川も實に困却いたしました

恒川半三郎ハ柳生流の傳書と餞別に貰ッた三十兩とを入れた行李を取られ、昨夜宿錢を拂ッた殘りが僅かあるぎりで後へ歸る事も出來ず路銀を貸て呉れとも云われぜ書面も遣られず誠に困却いたしましたなれども此所に居る譯にもいかぬから仕方なしに茶代を拂ッて出ましたが足が進みません、どうしやうと種々思案をしながら段々と和田へ上ッて參ります

とバラ〳〵霙が落ち肌を切らるゝ程の寒さで濡れ上りに北の方へ折り曲ッて行と左りの方ハ樽木岩と云ふ樽を積累ねた樣な岩のある所ろ突當りハ德本立戻りと云ふ德本行者が立戻ッたと云ふ大きな石塚があります實に凄い所で其山の根方の所に牛小屋といッて牛方が牛を牽て峠を越うとする途中で雪や霙が降ると止を得ず牛で圍繞て其中へ遣入て一夜野宿を致します所で恰ど牛小屋の形がある、其所でポウ〳〵と焚火をして居る者があります、恒川ハモウ足も進みません無茶苦茶に越してガッカリしたから半「少々御免なさい、火を一つお貸なすッて下さいませんか 男「さア此方へ入らッしやい誠にお寒い事で、霙が降出して來て酷う御座います 半「實に寒い事で箇樣にならうとハ思ひませんでした、大分降て來ました 男「山の癖で雨霙れでも霧が降ると氷りますので顏へ打かると鼻がもげさうで……此方へお掛なさい、今堪り兼ましたから鹿朶や木の葉を拾ッて一くべ温まッて夫れから越さうと思ふので、酷い目に遇ひました……オヤ旦那ですか先刻宮本屋にお在でなすッた殿樣でげすねへ 半「オヤ先刻傍にお在のお方 男「嘸お困りでしたらう 半「酷い目ハ遇ひましてね……災難に遇ひました 男「ヘエー左樣ですか 半「彼所でね柳行李の包を盗まれました 男「ろれハ御災難な事で、何ですかへお召物でも這入て居ましたか 半「ヘエ着換ハ惜いともないが大事な書物を入て置たので實に當惑致しましたろれにまア些とバかり金子もあッたので 男「夫ハ災難でげすね、油斷ハなりません、旅へ出てハ迂濶ハ出來ませんがまア貴君方ハ少し位ゐ包や着換を盗れても路銀を持て居らッしやれバ困りもなさいますまいが何しろ不自由なもので 半「イエ路銀も三十金バかり這入ッて居たのでろれに取急ぐ旅で大事な書付を入て置いた夫を失なッたので當惑致しました、モウ一錢の貯もないので峠を越す氣もないが取敢ず和田まで行うと思ふので 男「それハお困りでせうお察し申ます 半「イヤもうどうも仕方がない和田宿へ泊ッても一錢の宛もないから立つ時ハ刀でも賣て宿賃を拵ッて兎角も法を立てなければなりません江戸表まで參るにハ裸体になりますが譬に裸体て道中がなるものかで實に困りました、金が無いハ頸の無いに劣ると云ふ戲けた事を云ふと思ッたが道中で金のないくらゐ困る事ハありません 男「實にろれハ旦那樣でも困りませう 半「フッ〳〵困ッた、氣力も衰へた 男「左樣云へばお顏の艶色も悪い樣で……

旦那久し振でお目ゝ掛りましたね　半「何方です　男「へエ御免なさい、と三度笠を脱て頭巾を脱ぐと年の頃ろ三十四五、色の浅黒い鼻の高い口元の締ッた眼のクルリッとした大男で御座いますがどう云ふ事か面部へかけて刀疵があります　男「旦那誠にお久し振で　半「ハイ何方で　男「へエ久しくお目に掛りませんお忘れでせう十二年跡にお目ゝ掛りました　半「ハテ失禮ながら貴方のお顔だからお目に掛ッたら忘れる氣遣ひゝない、人違でゝないか私の方を見違へたのでゝないか　男「イヽエ丁度十二年跡九月初めお忘れですか追分通りの原中でお前さんの持て居る柳生流の傳書を盗うと思ッて鼻の先へ稲が嶋を突付けて書付を附與なけれゞ打殺すと云たとき私の足をずくッた小僧があッて前へ俯伏た突端に引鐵が拔けて彈玉が反れたから逃げ樣と思ふと追かけて間に合ゝねへから橋から飛込む所を旦那に斬られた疵ゝ二十四針縫ひました、お前さんゝお忘れかねへ　半「オヽ成程……

第五回

男「へエろれから名前を疵々と人が肩書を付て仕舞てカラモウお前さんどうにも斯にも仕方がねへ悪い事も出來ませんで斯うして居がお前さんを恨んだね、いめへましい面部へ疵を付やァがッてどうかして復讐しを爲てへと思ふが手浮羅ぢやァ往けず劔術でゝ敵ゝねへから闇の晩に向脛でも叩き撲らうと付た專ゝ一通りぢやァねへ常陸の國まで行ッてつけたが撲殺すやうな手掛りもなかッた其うち月日も經過て仕舞ッて流れ〳〵て京から九州へ行ッて廻り廻ッて福嶋を通ると關所の前に貼札があッて、恒川半三郎濱浦家の是々を殺したとあるから一枚へがして〳〵たていつゝ追手が廻ッて上方へ行く氣遣ハねへ踪跡を上方と見せて峠を越して逃げたに違へねへと思ッて付けて來るとお前さんに違へねへ宮本屋で出會したがお前さんゝお忘れと見にる　半「ハア隨分お老成なすッたね　男「なんだッてあの時ゝ極若かッた二十四で、今ゝ三十五になりますからねへ　半「十二年恨んで居たか、執念深い奴だモウ大概にして呉れ　男「だがねへ且那に鐵砲を向けたとき盗賊でも私が乾度取ると言ッたらお前さん乾度取るぜと言て其言葉が反古になッちやァ伊闘へ面出しが出來ねへので先刻宮本屋で柳行李を盗んだのゝ己れだ　半「コレ馬鹿な……まア宥せ、大概にして呉れ何時ゝても遺恨に思ッて居てゝ困る涙八の身の上で困るから　男「先生一度ならうと思ッたのだから今一寸取りさへすりやァ夫れで宜いので何も欲いものでゝねへお前さんが青へ顔して何うしやうと云ふのを見れゞ濟むのでハヽヽヽ、お前さんが盆餘して來るに違へねへと思ッて焚火をして待ッて居たので、柳行李ゝ此所にあり升から之を返しせへすれァお前さんも恨む理由もねへと斯う云ふ譯で　半「まアどうも……どうして取るねへ此方の方へコウ包を置いたので汝ゝ其方の方よゐたがどうして取るねへ　男「何所へ置いたッて盗うと思ッ

たら屹度取る、其處ゝ劔術遣への油斷だ 半「何時までも恨むものでないモウ死して呉れ實に當惑致した 男「ハ、、、、、 半「可笑かない戯言ぢやアないぜ 男「ナニ私も欲いのぢやアねへお前さんが悔りすれア宜いのだと、包を夫れへ出しましたから調べて見ると元の通り 半「コレゝ不思議だ、汝ゝ何と申ね、 男「ヘエ私ゝ上州赤城下で溝呂木の幸吉といふ肩書のある疵率と云ふ盗人でお前さんに斬られて名が高くなッた代りに素首が細りやした 半「どうも實ゝ妙だね、幸吉、大賊となる者ゝ違ッたものと云ふが成程さうだ賊中に義があッて、盗ッたら何うかしさうなものだがそれを返さうと思ッて焚火をして待ッて居るとゝ妙だ、是丈けゝ實に感服だ 幸「譽めなくッても宜い餘り譽めるとまた取りますヨ 半「止せよ幸「旦那江戸へ一緒に參りませうか 半「それゝ困る 幸「どうせ私も行から一人旅ゝ淋敷から一緒に 半「それゝ困る、並の顔なら宜いが、どうも同類と見られてゝ宜くないから 幸「どうぞ一緒に 半「廢せよからかふな、と恒川半三郎も氣味が惡いから柳行李を背負て 半「許せ、と云ひながら和田峠へ上ると下でゲラ〳〵笑ッて居るから尚ほ氣味が惡く少し行て振返ッて見るとまだ焚火をして居るから此間にと急いでなだれを下りて和田峠を越して和田宿へ參ッて中屋と云ふ宿屋へ來てホッと息を吐き先づ湯に這入てから、膳が出まして煙草を一服呑んで居ると障子をガラリと開けて 幸「旦那お早う 半「アラ幸吉來たか 幸「お前さんより先に來て居升、お前さんゝ大名歩行をして居る私ゝ林を切たり山を越したり澤を渉ッたりして來るから半分もねへ、歩行つけて居ますから 半「是ゝ困りますね 幸「一緒に江戸まで 半「止よ、いつまでもからかッてゝ困る 幸「ハ、、、、、 半「笑ひ事ぢやアない何卒宥して呉れ 幸「お前さんゝ私が聞いて居るとゝ宿屋の女中に疵のある人が來ても逢して呉れるなと云ッて居たが私の方が先に來て居るぐらゐで 半「誠にどうも……モウ是切りで明日ゝお別れで、と翌朝ゝ怖いから半三郎未明に立ッて岩村田へ這入て師匠の菩提寺へ布施をしてお經を上げたりして遲くなりましたなれども急ぐからせッせと十一里半何町の里程を行ッて沓掛宿へ來て宿ると八洲をお願みて濱浦の家來千村喜又と云ふが沓掛宿の出口に見張を付て捕人が皆取圍みました恒川半三郎ゝ夜に入ッて漸く沓掛宿の蔦屋清造といふ旅宿に着き食事を濟まして只今便所へ參らうとソット廊下傳ひゐ來ると一間隔ッた隣座敷でヒソ〳〵咄を爲て居る者が有る樣子に何事かと耳を欹て聞くと婦女の泣聲が聞えまた荒々しい聲で頻りと苛言を云てゐる奴が有るから是ゝ何か惡人が非道に軟弱い婦女を威迫て居るので斯樣に泣聲が聞えるかと心得尚ほ障子の透間から覗くと中に泣いて居るのゝ年の頃

ろ五十一二にもならうと云ふ感の悪い盲目婦女で、傍に十五六で色白く鼻筋通り口元の可愛らしい品と云ひ標致と云ひ實に稀な娘が泣いて居り升、其傍に居るのは八咫烏の九平と

云ふ悪黨で年齢い四十七に成て未だ悪事が止まぬ野郎と其女房の髮櫛のお坂と云て年齢四十に成る夫婦伴れで夫に板鼻の龍太原市の若造などと云ふ旗賊が相槌を打て居り升 九「オイ婆さん幾許泣いても仕方がねへ皆な和女の不實から起る事だ他人の情けを受けながら其恩を知らねへといふのい和女夫い狗畜生にも劣るぜ可愛さ餘ッて憎さが百倍といふ比喩の通りて餘り遺憾しいから乃公い飽までも和女の仇敵に成て事を爲なけれァならねへ盲目さんノウ仕様がねへから和女の娘を追分の大黒屋へ娼妓ょ叩き賣て埋草にするのだ今ょ成て何も然んなに泣涕る事いねへ然うちやァねへか 母「ハイ……御尤さまで御座い升が妾い誠に感が悪う御座いまして御飯を喫ますにも床の上げ下しから用場へ參るまで皆な此のおつねの世話で御坐い升此娘が居りませんけれい妾い實に杖に離れました如く路途ょ迷ふ者で御坐い升から何うぞ其處丈けい御勘辨を願ひ度う存じ升 九「然んなら乃公の貸した金を早く返せ、此五月の月末に娘が伊香保の大家へ潰物を賣りに往く道で悪者に搶れて往うとするから乃公が見て目の悪い阿母に年の往かねへ娘を氣の毒だと思ッて二十両てへ金を貸したので乃公だッて有り餘る身代ちやァねへが眞の情けで貸したのだ返せねへのも宜いが蜗牛ぢやァ有るめへし居宅を打棄て己に沙汰なしで安中の山田屋へ往たから山田屋で捕得めへたのだ、是非とも貸た丈けの仕事を爲なけれァならねへ 母「イヱ夫れ丈けの事は素より

お返し申さんでい御坐いませんが急々の御催促でい致し方が御坐いません伊香保の福田屋の親分が信州の相の川へ往て御不在で御坐い升から何うか親分のお歸りになるまでお待ちなさッて下さいまし親分がお歸りになりさへすれば決して尊公さまの方へ御損を掛けい致しませんから何うぞ親分のお歸りになるまでお待ちなさい、母い此通り目が悪いばかりでなく感も悪う御坐い升ので妾が居りませんと困りますから何うぞ福田屋の親分のお歸りまで何うぞお内儀さん親方ふお詫とをなさッてお待ちなさッて下さるやうに願ひ度う存じます 母「娘も斯様に申升から親方何ぞ御勘辨なすッて さか「オイ〳〵婆さん然んな事を云ひなはんナ結句娘ッ子い娼妓に成た方が僥倖だヨ和女の様な目の悪い阿母の傍に居れば生涯伊香保で潰物を賣て果なけれァならねへのだ今娼妓に買られゝば身を捨てゝこそ浮ぶ瀬の比喩の通り容貌が宜いから大靈容に身受をされ御新造さんとか奥さんとか云れりやァ和女の手助にもなるから然んな事を云はずに思ひ切て此娘を手放す方が宜イ、ノウ龍太 龍「然うですとも、先方でも早く當人を見てエ見てからの相談とい云て居るが五十兩にい慥かょ先方で引き取てエました……婆さん早く爲ねへ愚圖〳〵爲てエると遲くなるモウ彼是亥刻だから出掛けやう泣てたッて仕様がねへ幾許詫ことを爲ても盲目さん押附かねへ夫が否なら耳を揃へて金を返せ 母「ハイ……夫い只今お返し

申す事ゝ出來ません つね「お願ひで御座い升阿母さんが困りますから何うぞ親方さんと九平の袖ゐ縋ッて頼むも聞かず荒々しく娘の手を取り引立て立上るときガラリと隣座敷の襖を開けて這入て來たのゝ安中で饅頭を賣て居る草三郎で御座い升 草「御免ねへ、眞平御免ねへ 九「何んだェ 草「イヤ九平さんお初よお目に懸ります小哥ゝ安中の饅頭賣り草三と云ふ粗忽者、此後ともにお見知り置れて御洲懇に願へやす 九「ハイ是ゝ初まして申後れましたが小哥ァ信濃屋九平と云ふ粗忽ものです此後ともお見知り置れて何分御別懇に願へやす此婦ゝ小哥の嚊ァでさか「兄さんゝ名高い仁だヨ誠に思ひ掛けない事ヤァ此方へお這入なさいまし、何御用で 草「ナニ他の譯でもねへが小哥が歸り掛けに安中の山田屋へ寄たら此方ゐ娘を取られ氣の毒な事だ娘が居なけれァ目の惡い阿母が困るだらうと噂さァまて居る處へ小哥が往たのだ、嘸ぞ困るだらうと思ひ遣て入らざる醉狂のやうだが峠を越して斯う遣て八里二丁の道程を來て御無理を願ふンだが此の阿母が愍然だから斯うして遣て下せへナ借金が有るてェ事だから實ゝ二十兩持て來やした、小哥のやうな身の上だから方々で七處借をして、持て來たから改めて受取て下せへ然うして此娘ゝ阿母に返して遣てお呉んなせへ 九「夫ゝヤァ御親切に遠方の處を御入來だが兄さん肯かねへ二十兩ぢやァ咄が押附かねへ迎もの次手に五十兩出してお呉れ 草「だッても二十兩借りたんぢやァねへか 九「貸したのゝ二十兩だが五月から此九月まで二月縛りで跳利が付いて書換から五分の禮金が附いてるのだからヨ……エー何んな事をしても五十兩貰ゝなけれァ割に合ねへ夫に安中の山田屋から駕籠に乘せて峠を越し目の惡い阿母と娘を伴れて來るにも多分の入費が消ッて居るから五十兩が三文欠けても娘を渡す事ゝ出來ねへお氣の毒だがお謝絶だ 草「此の阿母ゝ俄盲目で愍然だし娘ゝ伊香保へ漬物を賣りに往くのだ不便だと思ふから乃公が方々才覺して來たんだが利の附く金とゝ知らなかッた 九「然うよ始まりゝ實情で貸したのヨ併し當人が餘り不人情だから利も取らうぢやァねへか乃公だッて有り餘る身上ぢやァねへから他から高利を借りて貸したのだ二月縛りで五分の禮金で跳利が附いたッて仕樣がねへ 草「然うても有りませうが小哥も遠い處を跡から追駈けて來たのだからまた咄ゝ跡で爲やう何うか元金で負けて娘を返して下せへナ 九「氣の毒だが入費も掛ッてるから負られねへヨ 草「然んな事を云ゝずゐ小哥に免じて 九「負られませんヨ 草「然う隱蔽な事を云ゝなにねへ小哥も峠を越して來たものだ 九「峠を越さうが谷を越さうが負けられないヨ始めてお目ゝ掛ッた和郎さんに何も負けて進げる緣がねへから 草「緣が無へと云ふが和郎ゝ今の處ぢやァ八咫烏てェ肩書の有る立派な親方だが信州相の川の身内で居た時にやァ小哥も一緒に一櫃冷飯を喰た事も有るから舊を糾へゞ一家子分も同樣ぢやァねへか さか「始めてお目に掛ッた

和郎さんに負けて進げる事ゝ出來ませんヨ二十両持て來た親切が有るなら迎もの次手に跡金の三十両をも出して遣んなせへ、入らざる事だが思ひ切てモウ三十両お出しヨ跡金の三十両が出來ねへと指を咬へて引込む譯にも行くめへから、エー兄さん 草「金を持て來いたッて知らねへ土地でゝ才覺も出來ねへ尤も安中へ歸れゞ小哥だッて世帶を持て 瀚 媼も有るから何うでも咄ゝ付けるがろれぢやア安中へ歸るまで貸して置いて下せへナ さか「イエ貸されませんよ始めてお目に掛ッた和郎さんにゝ貸されませんヨ 若「兄さんも名高い仁で一文商エから仕揚げた人だから金ゝ出すに違へね へ出したがッて大騒ぎイ遣てる位だ、何んでも慇然な者ゝ助けるてエ氣象だから椽の下にゝ壺が這入てゝ其中ゝ金ゝ充溢有るんだから出すに違ねへ、金ゝ有るんだから出しねへヨ 草「エー静かにしろ何を云ふんだ龍太若三汝等の顔ゝ知てるぞ以前板鼻に居て惡い眞似した事を乃公ゝ知てるぞ汝等ゝ餘計な口を出すナ 龍「口を出したが何うしたエ 草「ナニイ 龍「ナニイ 九「ヨシ〳〵汝等を相手にしてゐると遲くなる大黒屋が待てらア……エー泣きやアがるナ つね「アレー堪忍して下さい、と云ふ娘を無理無体に引出さうと致し升ので草三郎ゝ口惜いが金が無けれア動かねへ八咫烏の九平何うしたら宜らうと下を俯て考へて居ました

第六回

九平がおつねを引出さうとする處へ障子を開けて這入て來たのゝ恒川半三郎で御座い升、草三郎ゝ顔を見て驚愕り八年振りて主人恒川に逢ふとゝ思ひ掛けない事ゆゑ 草「尊公ゝ何うして此處へ入らッしやいました、と云ひ掛けるを眼先で押へ 半「イヤ始めて逢た饅頭屋とか始めて逢て見ぢ知らずだが如何にも感心致した見ぢ知らずなれども其 志 と云ふもの ゝ實に畏むるに餘り有る事だ此の親子の者が難儀を致すからと赤の他人の貴樣が二十両と云ふ金を才覺して娘を助けやうとする 志 し如何にも感服した、始めて逢た事なれゞ和郎ゝ見ぢ知らずだけれども其 志 に感服致して此處へ出て參ッた……何も云はんが宜しい……コレゝお坂久振りで面會したが何時も無事で宜いノウ 坂「ヘエ……コレゝ何うも思ひ掛ない恒川さまがお入來なすッて誠に驚愕り致しました、思ひ掛けなくマア何うして入らッしやいました、斯ンナ處でお目に掛らうとゝ存じませんでした 半「誠に久敷逢はんノ丁度九年振で面會爲たが誠に不思議な事も有るものだ相變らず快健だノウ 九「誠に尊公さまもお變りなくふ芽出度エ事で、チヨイト往還で出會すとお見外れ申ます位でへイ何時も御機嫌宜くッて……何處へ 半「予ゝ信州福島へ久敷參ッて居たが仔細有ッて此度江戸表へ出て來たが、ナニかへ九平とお坂ゝ夫婦に成たのかへ 九「ヘー夫婦に 半「全くの夫婦ぢやア有るまいノ 九「ヘー全くの夫婦で 半「虚言を吐く男だ虚言だらう大方女房の体裁で同伴て歩行

くのだらう　九「イエ何う致しまして然んな事ハ有ません眞實の夫婦になりましたので　半「九年前に坂が予の家來藤造の女房で有た時に、九平を予に引合して何んと云た妾の眞實の兄て御坐い升血を分た妹で御坐い升と申て予ハ親昵に成たが眞實血を分けた兄弟同志で夫婦に成たのかへ　九「エー……ヘー實ハソノ眞實の兄妹ぢやァないので義理有る間柄なので　半「義理有る間と有れば尙更悪るいやうだ……エー義理が有れば尙更宜敷くないでハないか、兄妹で夫婦になるとハ畜生同様の奴等だ　九「ヘー　半「此者が宜しくないが饅頭屋ハ二十金を持て態々此處まで參るとハ實に感服致した……汝等ハ此軟弱い小婦を非道に引ッ立て旅娼妓にても爲やうと云ふ氣か實に何うも怪しからん悪業ぢやないか今聞けバ安中宿から母子の者に女房のお坂を同伴て此處まで駕籠に乘せて來たといふがさうか　九「ヘー駕籠で參りましたので御坐い升から餘程入費も掛ッて居ます　半「能く御關所が越せた、手形が有るのか　九「ヘー……大概御坐ませんても間道を致しやすので　半「フーン然ればナニカ汝ハ關を破ッたのだノ　九「ヘーナニッノ關破りてエ譯ハ有りませんが王法で大概間道を通行て參りやす　半「大概通行て參ると云ふ事が有るかエ……其事も跡で篤くり取調べなければならぬが殊に九年前坂の亭主に成て居た藤造ハ予が家に若黨奉公を爲た家來で有るゆゑ夫婦の者の世話に成て居たが藤造の踏溜りで斬り殺され其折に予が土浦へ持して遣ッた藤吾國光の合口が紛失致したが其合口を窃んだ者ハ九平の子分矢太郎七三の両人で藤造を殺害した處の次第ハ仔細有て承知して居たがアノ折ハ旅の事なれバ何事も云はず打棄て置たけれど今度ハチト調べなければバならんまた坂と九平と夫婦に成た次第柄も併せて取調べなければならん何うせ今晩ハ此家に泊ッて居やうから跡で調べるぞ　九「ヘー……何う云ふお調べで御坐へますか　半「何うも斯うも有るものか夫れハ跡で咄す……初めて面會爲たが其方ハ感心な志した幸ひ此處に持合せて居る處の金子三十両是ハ縁類の者より餞に申受けた者なれども其方の志しに免して遣ハすから其方の持て參つた二十金へ此三十金を添へて九平方へ返せ然うして此娘を取返して母へ渡さんけれバ其方も男が立つまいから此悪黨等に遣る譯ハないが貴樣に用達て遣わすから此金で娘を助けろ　草「ヘー……ヘー有難う存じ升何んともお禮の申さうやうハ御坐いませんヘー有難う　半「サア九平金を受取ンねへ旦那さまから三十両戴いたから都合併せて五十両宜いか其代り慥かに受取たと云ふ書附けを一本認て呉れ　九「ナニ……書附けを出す譯ハ無へ元別に證文を爲たてエ譯ぢやァねへから　草「書附けを一本呉れなけれァ結局が附かねへ　半「九平早く書け〳〵若し強て書んと有れバ抽者了簡が有るぞ書んか　九「ヘー書きます〳〵、と九平夫婦ハ恒川半三郎が恐怖から假名交りで金子ハ慥かに受取た娘ハ親元へ返したと云ふ書附を認め印形ハ有りませんから爪印を押し

て草三郎に渡す　半「草三郎夫で宜しからう就ては少し其方に咄し度い事があるからチョット予の室まで來て呉れんか　草「九平どん座敷を換へるから緩り休みなせへ、と伴れ立ッて往く九平等ハ不氣味だから早く立たうと思ッたが半三郎が草三郎へ訝な言葉遣ひを爲て何うも前々知り合ひの樣子だがハテ變だ樣子を聞うと宿の女中に二分遣り其頃ろ二分と云てハ大した金で　九「何處か知れぬへ座敷へ案内をして下せへナ　女中「ハイ……此處ハ狹う御座い升がお客を致さない座敷で御座い升と云ふので九平がお坂龍太若三を伴れ忍んで居りましたが何んだか氣に成て堪まりませんから九平が雪隱の上草履を借り庭の植込みの處へ匿れ樣側で立聞くとも知らず座敷の中でハ半三郎と草三郎と差向ひゐなり　半「少し聞き度事も有るが、誠になつかしかッた　草「何時もお變りもなく……ヘー何とも何も申されません斯な處でお目に掛らうと存じませんでした　半「八年跡にお別れ申た時もお言葉を換す譯に參りませんだッたが毎日〳〵旦那樣ハ何處に在ッしやるか御壯健で在ッしやるかと思ひ出されぬへ事ハ一日も御座へません實に思ひ掛ぬへ御目通りで先づ以て御無事の尊顔を拜見致し草三郎の身に取てハ斯な有難い事ハ御座いません　半「予も誠に滿足した、大分老相らしく成たノ　草「尊公さまも御年が老り實に御見違ひ申すやうになりました　半「彼奴等二人ハ少し調べる事も有るが……コレ〳〵婆ァ貴樣ハ仕合せだのウ此安中の草三郎が來んければ

貴樣ハ惡人等の爲めに娘を取られる處で有たのだ實に仇に心得てハならんぞ此饅頭屋の恩義を忘れてハ濟まんぞ　母「ハイ有難う存じ升、と草三郎に向ッて叮嚀に禮をいふ　草「ナニ乃公が二十兩持て來ても彼奴等ハ金が足らぬへッて肯ぬへ處を旦那樣が三十兩下すッたから事が濟んだのだ乃公ぢやァねへ旦那さまのお蔭だ　母「ハイ有難う存じ升　半「然うでハない草三郎が追ッ驅けて來たれバこそ斯う云ふ譯に成た誠に倖な事で有たノウ　草「婆さん和女伊香保の福田屋の親分に何か緣が有て跡を追ッ驅け相の川へ往くてイのか福田屋の親分と別懇いのか伊香保の住民かへ　母「ハイ妾ハ伊香保の住民でハ御座いませんが福田屋の親方さんに地藏河原へ世帶を持して戴き、目の惡い母を持てゝ慇懃うだと仰しやッて資本を貸玄て下さり此娘がネイ和郎さん大家さん方へ漬物を賣りに這入るのも皆な福田屋さんのお引附けで御座いまして母子の者が稍と生活して居り升ので　草「和女ハ餘程感が惡いやうだがナニカ此頃ろ目が潰れたのか　母「イヱ此頃でハ御坐いません十六年跡に斯樣ナ盲目よなりましたので御坐い升、と云ひ指して浮べる涙を袖にて拭ひ　母「妾が斯う云ふ眼病よ成まして難儀を致し升のも皆　妾の心柄で惡い事ハ出來ませんもの道に曲ッた事を爲た罰と自分でハ斷念て居りますけれども親の因果が子に報うと申てまだ年も往きません此娘に苦勞をさせますのが誠に慇懃うで毎日〳〵若い自分の事を思ひ出してハ泣ない日ハ御坐い

ません　草「何を悪い事を爲たのだか知らねへが然んなに苦勞爲なさんナ誰だッても一度ン悪い事をするが和女も斷念めて仕舞へば夫で宜い何時までも苦慮〳〵爲てへると何ほ眼が全快らねェヨ　母「ハイ、有難う存じます此度びの御親切ン設令死んでも忘れません御評判にン　承はッて居り升が安中の饅頭屋の親方さんン俠客氣の御仁だと福田屋さんからも　承はッて居り升、妾しが斯な眼病になりました始まりをテエ貴郎さま身の懺悔で御坐い升から聞いて下さいまし、丁度二十八年己前の事で御坐い升、天明二年から七年まで饑饉歳が續きました事ン貴郎方ン御存じ御坐い升まい　草「夫ン乃公ン知らねへまだ赤ン坊の時分だから知てる譯ンねへが其時分に和女の眼が潰れたのかへ　母「イエ貴郎ネエ　妾ン上州の赤城下で溝呂木村の百姓で御坐いまして良人を鹿之八と申升が淺間山が噴き出したり饑饉年が續き仕方がないので乃公ン江戸へ往て米舂奉公でもするから和女と息男ン宅に殘ッて何うやら斯うやら細くも粟でも稗でも喰て命を續げと申て良人ン江戸へ奉公に出て仕舞ひましたが妾しン若い時分の事だから一生懸命に働いて居りましたけれども息男が一人ありまして何分致し方が御坐いませんので一人でも口を減したら宜らうと存じ赤城の島屋傳右衛門と云ふ宿屋へ鹿之助と申す一人の息男を奉公に遣りますると誠にお耻しい事で御坐い升が其息男が十四の時に主人のお金を二十兩持ち出しまして行衛知れずに成ましたので

御坐い升　草「エー……夫ン頓だ事ッたノウ……フウーン然うかエ其子と云ふのン和女の一人ッ子だノ　母「ハイ、夫だもんですから和郎さん其の宿屋で矢釜敷申まして二十兩のお金を即刻返せ此恐ろしい世の中で二十兩と云ふお金を持逃げされてン堪らないから親が此處へ來て息男丈の埋合せに谷から水を汲み揚げる用をしろと云ふ嚴しい催促で仕方が有りませんから宅を仕舞ッて妾が息男の爲にソノ島屋方へ參りまして谷から玄蕃で水を汲み揚げる奉公を致し泣いてばかり居り升るン内に泊り合した仁ン常陸の神郡村の名主さまで石井文左衛門さまと云ふ御仁が何うしたと仰しやいますからコレ〳〵で御坐い升と申升と夫ン困るだらう乃公が二十兩出して和女を貰ひ切て遣らう然んな事を爲て居ちやァ身体が續くまいと仰しやるから有難う存じます何うぞ願ひますと云ふので其石井さまと云ふ名主さまに願ひましたらネへ其御仁が二十兩のお金を立替て下すッて妾を常陸の神郡村へ伴ていらしッて下さりお手許を働いて居る内に義理で御座い升から忌でも否とン云れず御新造の無宅で御座い升から妾ン權妻とも附かず女房とも附かず其石井と云ふ名主の宅に居る内に貴郎出産ましたのン地處に居り升る此娘で御座い升　草「フウーン然うか、久しい己前の咄だノウ、母「ハイ此娘を産み落しまして時にン産ン輕う御座いましたが産所で考へて見升ると良人の方から手紙一本音信ンないけれども江戸へ奉公に往た跡で鹿之助のお影とン云ひな

がら亭主に無沙汰で他人の櫂妻や女房に成て娘まで出來たが若し良人の鹿之八が歸ッて來て顔を合せたら何んと云譯を仕樣かと存じましてカーッと逆上て夫から眼が惡くなり乳も止まりました然うなると名主の石井が矢釜敷く申まして迫も子供の育てられん婦女なら置く事ハ出來ん今の內何處かへ金を附けて遣て仕舞ふと申て土浦の森田屋金六と云ふ油問屋へ此娘に沁金を附けて遣て仕舞たので御座い升、夫から貴郎石井が是迄とハ打て變ッて妾を邪慳に致し邪魔な盲目だ出て往けと云ハぬばかりの打ち打擲大概倉庫の中にばかり這入て居りましたが實に此難ハ罰で御座い升、と云われて草三郎ハ聞く度事に胸に答へると云ふのハ丁度今年で十年已前此旦那恒川さまの爲めに土浦の森田屋金六と云ふ油問屋へ忍び込んで五十兩の金を窃まうと爲た時に傍に寢て居た娘ハ此のおつねで有ッたかアヽー惡い事ハ出來んもの夫に當年で九年已前常陸の神郡村の名主石井文左衛門方へ妙義の白藏と共に狎込んで長刀を窃まうとして倉庫へ往た時に眼の惡い女房が這入て居たがアヽー人が何う云ふ處で邂逅ふか知れん惡業ハ決まて出來んものと若い時分の事を思ひ出すと身の毛立つほど自分ながら恐しくなり下を俯いて考へて居りました

第七回

草三郎ハ暫くして頭を擡げ草「成程夫ハマア段々艱難辛苦をしましたナニ母「ハイ、夫れからナニ尊公さま妾ハ其處に居たゝまれませんから杖を突きながら感の惡い癖に常陸の土浦まで出て然うしてソノ何んで御座います森田屋と云ふ油屋へ參り娘を呼び出しましたハ三年以前の事で然うすると此娘が出て參ッて何うしたんだと申升からコレ〳〵で追ひ出され感が惡くッて何うする事も出來ないと申すと此娘ハ親孝行で御座い升から森田屋夫婦に妾の眞實の母が盲目に成て石井方を追ひ出されて參られて見れば子の身として見捨る事ハ出來ません是まで御高恩さまゝなりましたが妾ハ此母を伴れて義理有る親父の池上鹿之八と申すものが上州赤城下の潛呂木村に歸ッて居りますかも知れませんから妾が母と一緒に往て詫とを致したら存じ升から何うぞ緣切りでお暇を下さいと改まッて願みましたら先方の森田屋さんでハ腹を立て呉ろといふなら暇も遣うが其代り三文も手當ハ爲ないと仰しやるから仕方なく其儘に此娘に手を引かれて潛呂木村へ尋ねて參ると一度ハ歸ッたが今ハ水澤へ往て饂飩屋を爲て居るといふ事だが夫も判然りハ解らんといふ事で一先づ水澤まで尋ねて參りましたれども年を經たので何處に居るか薩張り鹿之八の樣子が解りませんので霙の降る時で御坐い升忘れも致しません觀音さまのお堂の下へ這入りましてブル〳〵震へて泣いて居り升る處へ通り掛ッたのが福田屋の親分で慇懃うに此体裁ハと仰しや

ッて地藏河原へ世帶を持たして下さり此娘が濱物を賣て妾を養ッて居りましたが此五月の月末に濱物を賣りに出やうと存じ升ると惡黨に捕まり擔がれて參る處へ通り掛ッたのがアノ九平で御坐い升乃公が助けて遣らうと言て娘を伴れて來て二十兩貸して呉れたのも矢張り此娘が標致を見込で御坐いませう夫に今聞けバ九平の傍に居る野郎ハ妾にハ見えません が龍太若三といふ兩人の舁夫ハ五月の月末に此娘を擔いだ野郎ださうで其者が一緒に成て居るからにハ矢張り共謀で御坐いませう、何うでも親子の者が助りません處をお蔭樣で助かッたので御坐い升何んともお禮の申さうやうハ御坐いません誠に有難う存じます、親方さん何うぞ殿樣へ御禮を仰しやッて下さいまし半「フーン、頓でもない事だッたノウ……貴樣の亭主池上鹿之八と云ふ名前ハ聞いて存じて居るが水澤へ參ッて上州屋藤造と言てナア饂飩屋を致して居たのだ母「ヘエー……尊公の處の御家來さまで、オヽ〳〵マア不思議な御緣で……まだお宅に鹿之八ハ居りますので御座い升か半「イヤ〳〵夫が九年前に非業な死を遂げた母「エー……半「今茲ハ居た九平といふ野郎が殺したに相違ないと申すは今の九平の女房さかと申すものは實と藤造の女房で有たのだ予が涙人をして水澤へ尋ねて參ッた時にお さかが九平ハ眞實の兄妹と云て予に親昵に成たが今夫婦に成て居れバ藤造を殺害して予が

所持の藤五國光の合口を窃んだけれとも其品ハ予が取返したが兩人の者ハ全く貴樣の亭主藤造の仇敵だ、と云はれて驚愕り母「ハイ左樣で御坐い升か、と云ひさしサメ〳〵と泣き沈みましたが暫くして母「良人が殺された事ハ薩張り存じません何處に居る事かと毎日〳〵早く良人に逢て詫とを爲たいと存じて居りましたのわ然んな事になり刹さへ亭主を殺した仇敵の爲めに母子の者が斯な酷い難に逢たのハ誠に殘念で御座い升、妾が責めて片〳〵の眼でも見えますと亭主の仇敵と名乘り掛け彼奴等兩人へ傷を附けて設令妾ハ殺されるまでも死去りなした鹿之八へ少しハ云ひ譯も立ちますから仇敵が討ち度う御座い升が斯な盲目でハ何うも致し方が御座いません 草「阿母さんマア然う一圖に思ひ詰めて心配おしでないヨ つね「阿母さんハ眼が惡いから仇敵ハ討てないが安中の親方さんへお願ひ申たら助太刀も爲て下さりませう夫に此處に在ッしやる殿樣にも願て妾の義理有る父の仇敵を討て阿父さんの手向が爲度う御坐います 母「和女にハ迚も仇敵ハ討てやァ爲ないヨ怪我でもすると困るから 半「イヤ〳〵、感心だオ、〳〵幾歲だ……ナニ十六だ夫ハ感心能云た流石に何うも藤造ハ誠に篤實ものでアたが何うも妙な者だなァ主從緣合の繁がるとハ、夫に眞實の父親でハないが自分が仇敵を討て母は亭主へ云ひ譯を立てさせるとハ如何にも孝心な者だ、幸ひ今夜ハ家此ヨ泊ッて居るから九平お坂を取押へるのハ仔細ない、予が助太刀をして直

さま仇敵を討たして遣らう、と云ふ咄を此方に匿れて聞て居た九平ゝ恒川半三郎と安中草三郎が居ますから驚いてソット裏口から逃げやうとする處へ襖を開けて這入て參りました ゝ爲屋清藏といふ年齢五十五六になり頭の禿げたチョン髷の老爺さんで 清「ヘイ御免下せエ 半「何んだノウ 清「エー尊公さまて御坐りやすかソノ恒川半三郎さまと仰しやりやす殿樣ゝチエ 半「ハア予が恒川半三郎だが何う致した 清「夫でゝ迷惑致しやす乃公が恒川半三郎だと仰しやりやして尊公が落着て御坐らッしやりやしてゝ誠にハア困りやす只今本陣松屋清兵衛方へ八州のれ捕方大沼金七郎さまてエ仁が御出になり出口〳〵へ手配りをして恒川半三郎を尋ねる者だ濱浦さまから御頼みに成たと云ふのゝれ妾のれ松の方を鐵砲で彈殺して逃げて置きながら平氣で在らッしやりやしてゝ困ります 半「フーン……追手が來たか 清「追手が來たかてゝ御坐りやしねへ實に迷惑致しやす段〻宿帳をお調になりやすと私の處の宿帳に恒川半三郎と認て有るので誠にハヤ迷惑致しやすから直ぐ何うか本陣へお出を願エやす私の處で迷惑を致しやすから 半「イヤ〳〵貴樣に心配を掛けぬから宜しい、此方から自白て出るから宜しい、少〻仔細有て濱浦家に害の有る姦婦を鐵砲で討ちチャンと張札まで爲て逃げて來たから追手と云へば大方豈又が八州へ頼んで取卷いたものだらうから喜又に面會致し容易にゝ繩よ掛らん其處にゝ仔細の有る事だから心配ゝない 草「旦那が自白て出るなんてエのゝ御而倒だから小哥が代りに自白て出て恒川半三郎さまが濱浦の妾を殺したてエのゝ全く間違て賃ゝ安中の饅頭屋草三郎が殺したんだと爲屋の旦那然う云て下せへ 清「和郎さん夫ゝ困りやすチャンとお帳面ゝ認て人相書が廻ッて居りやすのにお妾を殺したのゝ安中の饅頭屋だ拵と御役人さまを馬鹿にするやうな事を云てゝ出られやせんね草「出られねへッて殺したから殺したッて出て呉んなヨ 清「出ろッたッて夫れゝ出來やしねへ、と咄を爲て居る處へガラリと襖を開けて這入て來たのゝ清呂木の幸吉で 幸「旦那エ半「和郎また來たのか 幸「モウ疾に來て居りやすへ……爲屋の旦那ソノ大沼さんと云ふ八州の旦那に然う云て下せへ度〻御厄介になる清呂木の幸吉と云ふ窃ッ盗が殺したと然ふ云て下せへ 清「皆なタワイねへ事ばかり仰しやりやしてゝ仕樣が御坐りやせん先方さまでゝチャンと目途が附いて八州へお頼みになりやしたもので……何をなさりやす小哥の手を押へて何う爲やす……オヤ乃公を就縛るか乃公ゝ殺しも爲ねへのに殺した者が殺しも爲ねへ者を縛るちう事が御坐りやすか 幸「エー神妙に爲ろ、と縛るのゝ早い自分ゝ度〻縛られ付て居ますから慣れて居り升手早く縛り揚げ引ッ立て土間へ引摺下し山手の方の物置へ投り込み手拭で猿轡を噛ませ四斗樽の中へ入れてまた其上から四斗樽を被せ戸締をして元の座敷へ歸ッて參り升した 半「其方宿屋の亭主ゝ何う爲た 幸「ナニ表の方へ知れませんやう

手足を就縛ッて離れて居る奥の方の物置へ片付けて參りましたから聞へる氣遣へハ有やせん 半「恠からん事をする、左樣な荒い事をするナ何だッてまた咎もない亭主を左樣な難に逢した 幸「ヘエ小哥ハ此安中の饅頭屋さんにハ五年以前に野尻の觀音堂で小哥が突出される處を提灯を點けて妙義の中の竹を夜越に送ッて呉れた恩義ハ幸吉生涯忘れやせん 草「違ェねへ、兄イの顔ハ忘れねへがまだ悪事ハ止めねへか 幸「ヘエ……和郎さんに異見を云れたから悪事ハ止やうと思ッたが外に商買もねへから手ハ下して爲へけれど手下の野郎等が分配を爲てへるから矢張り窃むも同じ事だが和郎さんの事ハ毎日〳〵忘れずに居やすヨ……ヘエ、旦那エ今聞けバ草三兄イハ和郎さんの御家來筋だてエ事が始て解りやしたが小哥も和郎さんの家來筋とハ存ませんでした小哥の實父の鹿之八ハ和郎さんの處へ奉公に參ッて御恩を戴へたてエ事ハチッとも知らなかッた其御主人さまを今まで怨んで居たハ誠に相濟みません 半「フーン然らバナニか貴樣ハ藤造の實子か 草「ヘエ小哥がソノ十四の時に主人の金を貳十兩持て居なくなッた池上鹿之助と申す者で……阿母ア和女マア頓でも無へ盲目になならうとハ思ハなかッた今日聞いて肝を潰した夫れでも能く今まで壯健で居て呉れたノウ 母「ハイ、誰公さまで御坐いますか 幸「十四の時に島屋から二十兩の金を持ッて逃亡を爲た鹿之助と云ふ和女の子だと、云ハれ母親ハ怒りを面に現ハし身を震ハせて 母「エ此

野郎……此野郎ウヌ、と云ひながら幸吉の結髪を取て捻倒す 幸「アイテ、、至當だ和女の腹を立てるのハ至當だアイテ、詫事ハ跡で緩くりするからマア手を放して呉れ 母「此野郎ウヌ親不幸野郎ウヌ能もノメ〳〵と此處へ出て來やアがッて和女の子の鹿之助だと云ハれた義理かエ汝のお影で母子共に路頭に迷ふ身の上ゑ成たぞウヌ 幸「アイテ、至當だが少し手を放して呉れ然う結髪を取捕へて、ハ仕樣がねへ……成程母子と云ハれた義理ぢやアねへまた乃公を子とも思ふめへ、親と思ッてハ濟まねへ位の乃公の悪業だが今日此家に泊り合せ黙らず隣座敷で聞けば只だ一人の息男が十四の時に逃亡たバかりで水汲奉公をして難儀を爲てゐる處を石井に助けられ櫛妻に成て娘が出來たが產所で亭主に濟まねへ死んだ父さんに濟まねへと思ッて血が上り目が潰れたのも息男ゆゑと云ハれたことを影で聞き手ハ下げねへが乃公が阿母の眼を潰したも同じ事だアヽ何んたる親不孝な事だ非義非道の了簡に成ッたハ何う云ふ因緣かと吾身ながら愛想が盡きた、コノ阿母を助けて下すッた饅頭屋の兄さんに五年以前に異見をされ今まで少し悪事ハ謹しんで居たが實父が御恩を戴だいた恒川さまがまた阿母を助けて下さッたからお目に掛り斯う云ふ身の上てエ事を打明けて阿母にも一言云ハなけれァならねへから出て來たのヨ重々濟まねへ勘忍して呉れ 母「ヤイ此の野郎何うも……素より汝に逢ハふとハ思ハねへが實父が御恩を戴いた旦那さまにも饅頭

屋の親方さんにもお禮を云いなけれァならねへと云へば少しい義理も恩も知て居るだらう
夫れなら此處へ來て盲目の母が路頭に迷ふ程の難儀を爲て居るのを見たら是から改心して
阿母や妹を助けて遣度と云ふ心に成て今までの惡い事を止め眞人間になれるだらうノウ
幸「夫がノ三下の御ッ盗なら直に斷念て堅氣になる事も出來るけれど濱呂木の幸吉と云ふ
肩書が附き面に傷を受けて居るから逃げ逐せやうと爲ても逃げ逐せられねへ强惡の身の上
だから今足を洗ふ事も出來ねへ、何うか阿母ァ子の無へ昔と斷念めて乃公に似ねへ柔和い
婿を探して妹に娶せ然うして死水を取て貰ッて呉んねへ其代り乃公い實父の恩返しに此旦
那さまに代ッて福島へ身代りに出るから夫丈けを効として今までの不孝の處い何うぞ堪忍
して呉れ……旦那さま誠に面目次第も御坐へません

第八回

半「是い何うも思ひ掛けない事で有たノ藤造の息男とい思ひ寄らなかッたテ 幸「エー旦那
さま小哥の樣な者が爲公の身代りに成てい外聞が惡いかも知りませんがノノ濱浦の妾を殺
したのい小哥だと少し譯が有て何處までも云張て通る事を小哥い知て居丹から何うぞ是丈
けい小哥が今まで親不孝を爲た罪滅し一つにい阿父や阿母ゐ云ひ譯の爲で御坐へ丹から何
うかノノお身代の役を小哥ゑ仰しやり付けて下せへまし阿母も悦びませうから願ひ度う御

座へます 草「戯談云ちやァ往けねへ和郎い今解ッたのよ乃公い永へ聞だ暴公を爲たものだ
から名乘て出なけれァ乃公が忠義が立たねへ 幸「兄さん和郎ぢやァいけねへ安中の饅頭屋
と云ッてい誰れでも人を殺すこが殺さねへ人かい知らねへものい無へから和郎が名乘ッて
出ても先方ぢやァ眞實に爲ねへが乃公だといへば眞實にする事が有る此の傷い十二年旦前
旦那に斬られた傷だから此の傷を證據に乃公が名乘ッて出て恒川半三郎に斬られたのを遣
恨に思ッて十二年の間だ附き纏ッたが敵手い强術遣ひゆゑ叶ひ合ッてい殺へが江戸へ立
つ事を聞いたから一番濱浦家で大事なものい妾のお松と云ふ事を聞知ッてるゆゑ饅頭で彈
殺し方々へ恒川半三郎と張札を爲たのい此の幸吉だ者恒川半三郎なら饅頭ぢやァ殺すめへ
刀で斬るゑ進ェねへのを鉄砲で覘ひ彈に爲て方々へ張札を爲たのだ殺した野郎が悪々自分
で張札をする野郎が有るか、サァ證據ゑ一枚殘ッた此札を引合せて見ねへと幸ひ一枚引剝
して來たのが妙に役に立ちやした是で何處までも云ひ張り濱浦へ名乘て出て御處刑を受け
旦那さまの身代りになれば死んだ實父も何んなェ悦びますか知れません……併し小哥が無
へ後い便り少ねへ盲目と妹とい和妹さん何うぞ賂然うと思ッて力に成て遣てお呉れ夫に今
聞けば實父を殺した仇敵い九平お坂で妹が仇討を爲てへと云たから兄ィ何うか助太刀をし
てお呉れ全体い小哥が仇討をする處だが和郎さん何うか小哥になり代ッて仇討の助太刀を

爲て下せへ然うすれァ和郎さんが名乗て出ると同じ事だから、是ばッかりゝ何うか殿様小母に仰しやり付けて下せへまし實父も何の位へ草葉の影で悦ぶか知れません 半「ウン能く了簡が附いた何うせ永持の無い命だらうから……幸「乃公ァ御恩返しに名乗て出る覺悟だ阿母ァ 母「チ、……有難い夫で妾ゝ何にも思ひ置く事ゝ御座いません 半「ア、大悪ゝ善ゝ近いと申すが幸吉が敢心して予の身代りに名乗て出やう實父の恩返しを仕様と云ふ其の志は如何にも尊とい實ゝナ其妾を銃殺したは予でゝない外に殺し人が有るのだが彼を殺さんければゝ濱浦家の害ゝなるから殺した方が宜しいゆゑ千村に逢て其咄を爲やうと思ッたが其方の志を感心致ゑたから、其方にゝ此事を許す譯でゝないが贋造の息男で有るから其功を立てさせる爲めに身代りを許すから速かに名乗て出ろ 幸「ヘエ有難う御座へ升、然んならゝ大沼さまへお目に掛ッて小哥ゝお繩に掛ります、ヘエ有難う存じ升、と草三郎や母妹にも暇乞を告げ銅鐵作りを腰に差して外へ出ゝ係ると充分の張り込みで駕籠の鳥同様一杯に取り囲んで居る處へ幸吉が名乗ッて出ましたさて八州の捕方が取巻いて居り升中へ溝呂木の幸吉が名乗て出ましたが濱浦家の重役千村喜又と云ふ人が附添て居りまして何うも恒川半三郎ゝ柳生流の武邊者で平素の行狀と云ひ誠の侍なれゝ濱浦家に害の有る奸婦ゆゑ設合討て立退にもせよ劔客者が卑怯にも飛道具を以て討つ譯もなし何うも恒川半三郎では有まいハテ何者が討たらうかと調ましたが餘程事面倒に成ことて素より殿様のお爲にならん處のお松の方ゆゑ彼が討果されゝば臣下一統の仕合せ又御家の爲で有る幸ひ名乗出た幸吉を引縛り引て往其法に行へゝ夫れで事果る恒川ゝ惜い侍だから別に陷し度ないゆゑ幸吉を引て參ッたが宜らうと考へましたから名乗て出たを幸ひに之に繩を掛て福島へ引く事に成ましたから幸吉ゝ全く濱浦家の櫂妻お松の方を討たと云ふ廉で江戸表へ差立に成て御處刑になりました、草三郎ゝ主人恒川と目の悪いお春と云ふ婆ァと其娘おつねの三人を同伴て先兎も角上州安中の秋間道の自性寺村へ伴て來まして自分の宅と云でゝ御座いません老鄙老媼の居る處へ同伴て歸りました、此雜沓紛に九平ゝお坂を連て逐電致しました、お話二派に分れ少し跡へ歸りますが文化三年に新橋の取手屋久兵衛と申す呉服屋の家内が死去まして丁度三十五日の墓參りの歸りに取手屋久兵衛が根岸の植木屋幸次方へ立寄ますとお出入の事で御座い升から鄭重に待遇て酒肴を出し誰か相手に酌をする者ゝ無かと云とッィ表に人來鳥と云待合でゝ有ませんが掛茶屋にお里と云ふ年増が居りまして美人でゝ有るし口前ゝ宜し調子が宜からァノ人を呼んでお酌をさせたら宜らうと云内儀さんの計ひでお里を呼び酌をさせると取手屋久兵衛さんが實に美い婦女だとシミ〴〵お里に惚れ込むお里もまた何う云ふ事か取手屋久兵衛を宜さろうな仁だ親切な仁だと思ひ込ま

したから品垂掛りお酒の上で忌らしい事を一言二言云ッたのが病み附きで遂に之を櫂妻に致す事となりました此のお里と云ふ婦女い前巾上げました通り文化元年八月廿日の晩に取手屋方へ盗賊に這入りました妙義の白藏ゝ夫婦約束を致し白藏が引廻しの時にお里が逢ひまして馬の前に捕まつて泣いて離れませんのを無理矢利に振り切て乞食が引出さうとする其時に白藏が深くお里へ念を殘し御處刑になる時に強く取手屋久兵衛を恨んで死にました何う云ふ譯か自分が盗賊を致し悪い事を爲たから就縛れ自己に重罪が有るから其報を受けるのい當然だのに夫を恨むと云ふい解りません久しい前に千住の小塚原で磔刑ふ揚るものが有りましたゆゑ前に立て見物し居てる者が數百人居り升ると其前前の田圃で農業を爲て居たお百姓に處付在言を云ひました云ふ此百姓にい恨みも報いも有りませんが乃公が今鍬で脇肋へ風穴が開いて此儘相果る苦しみをする中で煩冠りを爲てノン氣にも畠のものを作ッて居る百姓の心持い誠ゝ悠然して誠に宜い心持たァ、羨ましい事だと思ッたより他に何も念いないか其念が霽れなかッたと見えまして斯う云ふ在言を云ひましたから御處刑の跡で其暴された男の骨を貰ッたら病氣全快したと云ふ事い全く有た事で御座い升現今然んな咄をすると虚言のやうで御座い升白藏い自分で悪い事を爲ながら取手屋を恨みました、自分も悪い事を爲ていならんと知ッて居るから止めれば宜いのゝ止め度と云ふ心が

有ても止むを得ず悪事の深入りを致し自分が悪事を止めやうと思ッても其心を押へる事が出來ず自由になりませんで就縛れゝゝ先方を恨むなうな事になります「心だに誠思ふにも任せねば人を恨みん理りぞなき」と云ふ歌が有り升、成程左樣でせう白藏の念が殘りお里が取手屋の櫂妻になり其翌年文化四年に本妻に直されました是から十年の間と云ふものい稼業も繁昌致し彼の拾ひ娘を丹精して誠に家内穏やかに睦じく暮して居りました事で娘い今年十三お里い三十五取手屋久兵衛い四十九になりましたが年が悪いから御嶽山へ參詣爲やうと講中に誘いれ吉原の角海老の主人に魚平と云ふ先達其他花川戸の講中が附添て木曾の御嶽山へ參詣で六月の末に立ち七月一杯掛りますから歸りの程い遲う御坐い升、其内にお里が不圖思ひ出したい何う云ふ事か深川の靈岸に妙義の白藏の遺骸が葬ッて有るのでお里がおよしと云ふ赤ら顔のデップリ肥ッたお尻の大い丸々としたお饒舌りさうな下女を一人連れ盆の十二日に墓參りに參り里「熱いから納涼うぢやァないか、と高橋の田川と云ふ船宿へ立ち寄り屋根船を誂へ其中へ喰べ物を入れ里「面國い人目に立て往けないから大橋の方が却ッて宜いと船頭に吩咐て橋間へ船と繋留て大橋の踊粉抔を入れ両人で納涼で居り升ると直ぐ次の橋間に繋いで居た一艘の屋根船の中にい年頃三十四五に見えまして誠に人柄の宜い色白な何處の御用達で御座い升か黒紗の羽織を疊んで柵へ上げ細かい隈ノ飛白の

單物に本獻上の帶を締めゐ帶揚を引附け其側に居る者い出入町人らしい小粋な男で町人「エー旦那エ両國橋や何かでい人通りが有て綴くり噺が出來ません傍でチヤカ〳〵三味線を彈たり隣の船から一杯お呼んなせへなんて五月蠅が此處いそんな事が無くッて宜うがすナ……旦那エ、旦那エ 旦那「何んだ 町人「向ふの船に居る年増い何うです 旦「ムー美い婦女だノウ 町人「實に美い婦女ぢやア有りませんか大丸髷で衣服の裝飾が宜いぢやア有りませんか忌みが無くッてサ着物が隨广飛白で帶い珠珍ですぜ顔い長くもなし圓くもなく宜い加減で二重瞼で口元の可愛らしい婦女だが先刻から頻りに横目で旦那を見て居やすぜ 旦「戯談云ッちやア往けねへ和郎い美顔だから和郎に惚れたんだらう 町人「戯談云ッちやいけやせん小哥杯に婦女の惚れる事い有りやせんが何しろ容子の宜い婦女でげすが婦女い立て見なけりやア解らねへもんで立た姿を見るとお尻が大きかッたり何かして買ひ冠る事も有り升が、坐ッてる容子が極宜いが幾歳位てせう 旦「然うサ年増盛りだノウ三十前後と云ふ處か夫れともモウ些と出越て居るか婦女い若く見えるからノウ 町人「實に美い婦女です夫に引換へて彼の下女を御覽なせへ圓い顔で麺よ頬遊が赤いぢやア御座いませんか併し一ケ所取柄が有る卷縮髪だア 旦「止しなヨ風の摸樣で聞えると悪いヨ 町人 ナニ風が強いから咄を吹飛しちまいますから聞える氣遣い有りませんが何しろ美い婦女だ、と男い直き婦女に

眼を附けるい妙な者で御座い升、思へば思いるゝでお里い頻りと隣の船を覗いて見ると両人ともに容子の宜い男子も見るやうに見ないやうに横目で頻りと此方を見ながらお園子を喰てい色氣が無いから園子も喰べないで細い籐で編んだ煙草の筒から煙管を出し烟草を薫しながら横目で此方を見て居り升

第九回

里「和女モット此方へお寄りナ 下女「ハイ只今、ネエ尊婦妾の身体が重量から船を傾げるッて船頭さんに苛言を云いれましたノ自分にい解りませんが尊婦眞實に熱くッて堪りませんと、早く來月に成たら少しい樂が出來ませうかと思ひます旦那さまい隨分お八釜敷う御座い升けれども其代り打解けてお酒を召上ッて在ッしやる時にいまた可笑いお咄をなさいまして氣を詰めさに一緒に遊べと仰しやッて眞實に宅の旦那さまのやうに宜い御方い御座いませんよ……ア尊婦向ふの船に居る仁い美い男で御座い升と御覽遊ばせヨ 里「大層容子の宜い御仁だノ 下女「容子が宜いたッて先方でも内儀さんをジロ〳〵見て居ますヨ尤も誰だッて尊婦を振返ッて見ない仁い有りません往來でも何處でも人い振返ッて見ますが眞實に美男で御座い升ヲエ……尊婦妾いアノ粋風な仁い嫌ひですよモウ一人の旦那らしい仁い人肌が宜ぢやア有りませんか眞實に容子の宜いと扇子をパチ〳〵遣て首い向ふの方を向い

てましても眼の球い此方へ來てエますヨ眞實に宜い飛白で御座い升こと　里「柄の宜い飛白だす　下女「然うですネ、したが眞實の薩摩飛白い少ないと云ひますから妾しなどい一生涯奉公しても買へませんワ……アノ飲んで在らッしやるのいお茶ですかねへ　里「ナニ和女お茶でいないよお酒だァネ　下女「デモ尊婦……アレ彼樣な大きなお碗で召上ッて在らッしやい升から妾いお茶かと存じまた……お肴が種々なものが這入てますヨ　里「お止しよ然んなに覗き込でないよ……デ、船に居ても隨分今日い蒸暑る日だねー、と云ひながら扇遣ひを爲やうとする同時にプーと風が來て扇が手を離れて川の中へ落ました　里「アレ扇が、と云ふ中に流れて往のを向ふの船に乘て居た町人体の男が手を伸て拾ひ取り此方へ向ッて差出し　町人「エー扇が風で飛びまして少し濡れました　下女「是い有難う存じ升ゞ　里「誠に何うも恐れ入ます　里「有難う存じ升　町人「何う致しまして　下女「尊公い大層お手が長く在ッしやい升事　町人「エー……ナニ大事なお扇子が濡れました　里「誠に恐れ入ります有難う存じます頓だ事でお手を濡しました　町人「ナニ何う致しまして……お二人限りですかェ　里「ハイ今日いお寺參りの歸りで餘り熱う御座い升から此處に納涼んで居り升ので　町人「二人限と御しやッても何でせう早晩に男の伴れ衆が飛込んで來るやうなす法なのでげせう　旦那「止しねへ　里「何う致しまして妾どもい左樣の者でい御座いません二人限で斯う這て居り升

る　町人「誠に失禮で御座い升が一盞献度もんですナ、船が餘り離れてますナ……オー船頭さんモウ少し船を此方へ廻して呉んねへ……小哥どもゝ兩人限で淋しくッて困りますから　里「恐れ入ります　下女「宜う御座い升よ尊婦……船頭さんモット船を寄せて下さい足を踏張て向ふの船へ一緒に附着て下さい　里「何んぼ何んだッて和女　下女「宜う御座い升よ……船頭さん早く、と云ふので船を着ける　町人「ヘエ是い旦那さまから失禮で御座い升が、と杯を出す　里「有難う存じ升、と一盞飲んで先方へ差し一盞二盞取替す内に口が合ひ話を致すと自然氣の合ふと云ふものい妙な者で　旦那「宜いぢやァ有りませんか御近所なれば兩國までお送り申ても宜ろしい此方も二人限で淋しいから、と云われお里い今年三十五になりますけれども素より浮氣の水性ゆゑ其御用達の旦那の樣な人柄の宜い仁を思ひ染め何んだか傍へ往き度から厚顏しくも　里「御免なすッて下さいまし、此船い片道丈け雇ひましたものですから此處から歸へしても宜敷う御座い升、妾の宅い直アノ新橋で御座い升　町人「然んなら雜作もないお送り申升からお乘んなさい、と取卷の男が氣が利いて居ますから其儘下女とも兩人を船の中へ入れました、スル内に互に酔ひが廻りましたので一ッ目の柏屋と云ふ船宿へ寄り御膳を喰べましたのが縁で是から度々此熱い時分い納涼〳〵と云てい出掛け柏屋で逢引を致しました浮氣いいかんもので始めい何處の仁とも知らず身分も糺しませ

んで戀慕と云ふの仕方の無いものでお里の彼の御用達の樣な人と馴染で段々深く成て來升と 旦那「予の實の芝片門前に居る井上と申して大公儀へ御用を達すものだが勤めをするのが忌で湯治に往たり上方見物に往たり伊勢參りをしたり方々遊び歩行てるが水邊が宜いと思って本所緑町に竪川と云ふ待合茶屋が有る夫へ來て實は兩人でブラ〳〵遊んでばかり居るのでタガ予でなくとも弟が勤めて居るから何も心配いない身の上だが懶惰者で往けないのサ併し不圖した緣で斯う云ふ譯に成たけれども段々容子を聞けば和女の良人有る身の上と云ふ事だから何うか是切りに成て貰ひ度、と男に云われ尙更情が增し 里「妾の設令取手屋を追ひ出されても和郎さんと離れる事の否です、と婦女が手强いから男の逃げ場もなく其儘にて折々逢引をするうちに取手屋久兵衞が御嶽山から歸って參りましたゆゑお里のモウ思ふ男に逢ふ事が出來ませんので何うかまて宅へ近しく遊びに來てもらふやうわ仕度と婦女の淺智惠で取手屋の、宅の益々繁昌で御座い升丁度其年の暮の二十六日の事で是から商人衆の忙がしう御座い升から番頭の帳合を致し春の仕度も有り小僧の大きな硯で頻りと墨を磨て居ます 番「帳面屋へ往て跳へて置た帳面を持て來て呉れ 小僧「ハイ、と暫くして五六冊の帳面を持て來ますと番頭の彌平の太い筆を取りまして帳面の表書を致さうと云ふのです奥での主人が頻りと酒を飲みながら種々春の事を指圖致たして居ります 久兵衞「清次、和郎何んしたでのないか……イエサ其方の事を先に爲なければならぬへから 清「然んな事を仰しやッたって出來やアしません此方を先に致すと順が惡う御座い升、と咄をして居ると 男「御免下さいまし、御免下さいまし 番「ヘエ入らッしやいまし、ヘエ是ハ入らッしやいまし 清「入らッしやいまし 小僧「入らッしやいまし 男「何うか糸織か結城紬か御召縮緬の樣なものを二十四五反頂戴致し度う存じ升 縞柄の田舍へ土産に持て參るのですから江戸風の新形の宜い處をお見せなすって下されば有難う御座い升 番「ヘエ何うぞ此方へお掛けなさいまし何うぞ此方へヘエ誠ニ好くお天氣さまが續きますがお寒い事でヘイ追々月迫致しましたサア何うぞ是へお掛け遊ばしませ 男「エー田舍へ土産に持て參りますので何うか宜しい處を、夫に黄八丈とか云ふものが御座い升なら宜い處の本なんとか云ふのを、ヘ、、頓と私の心得ませんが村方の者に頼まれて參りました 番「左樣で御座い升か畏りましたヘエ 男「其御召縮緬の方の少し縞柄の太粗處を 番「ヘエ御婦人召で……畏りました、其微塵や萬筋や何か宜ささうな處を取揃へて早く持て來ナ、と是から宜い反物を取揃へて出した時にお里が奥から店を覗いて居たが何んと思ッたかッカ〳〵と出て來て 里「オヤマア誠に暫く 男「オヤ是ハ何うも……思ひ掛けない、お里さんぢやアありませんか 里「マア何うも……何うして當地へ入らッしやいましたか……餘りお久しくッて 男「イエ何う

も大きに御無沙汰を致しました、此家がお宅で 里「ハイ此家へ縁付ましたが阿父の死去りました時にハ種々お世話さまになりました事ハ母から聞いて存じて居り升がアノ時分ハまだ妾も年が往きませんでしたから精しい事ハ後日で母から聞きましたが……マア何うして此方へ入らッしやいました 男「ハイ、久し振で從者を連れて江戸表へ出て來まして思ひ掛けなくお目に掛りました大層お見違へるやうになりで、ナニか氣の詰るやうな立派なお内儀さんになりです 里「マア何うぞチョイトお上がり遊ばせ……旦那エ旦那 久「ナンダ 里「時々和郎さんに話しをするアノ妾が北條に居た時分阿父さんが死去ッた時ゑ世話を爲て下すッた北條の信濃屋喜兵衛さんと云ふ旦那さまで山も田地も澤山持ッて居らッしゃる御仁が、と云はれて久兵衛ハ笑顔を造り拵手を爲ながら出て參り 久「オヤ〳〵是れハ何うも、先づ何うかお上がり遊ばせ何うぞお上がり下さいまし毎々家内からお噂ハ伺ッて居ますが家内の親共が沒する時にハ深くお世話さまに成ッたからお目に掛ッてお禮を申度いが江戸へ出て來ていお禮も云へないから折が有たら寺參り旁々北條へ一度一緒に伴て往て呉れないかと和郎さまにお目に掛る爲か此頃ろ頻りとお噂を申て居りましたがマア何うぞお上り下いまし 男「是ハお初にお目に掛ります私ハ信濃屋喜平と申す不調法者で御座い升、彼樣な片田舎に居り升が若い時分にハ一二度江戸表へ來た事も有り升、夫から打絶て參

りませんので、ヘエお里さんが此家にお在にならうとハ存じませんでした、此度少々國土産に致さうと存じて御面倒を願ひ升 久「有難う存じ升、さマア何うぞお上り下さいまし 喜「イエ今日ハ少々取急ぎますから 里「マア和郎さん然んな事を仰しやらずに何うぞお上り下さいまし、彌平ヤ妾の御親呢の御仁だから 彌「ヘエ左樣で御座い升か、尊公何うかお通り下さいまし品物ハお與へ持て出升から……お連さんも何うぞお上りなさいまし 里「マアチョイト上ッて下さいまし少し伺ひ度い事も有り升から誠に此通り手狹で店ハかり廣くして奥の方ハ揃ハずに置き升から眞實に見る影ハ有りませんがサア〳〵、と云はれて直に歸る譯にも參りませんから連も同道して上ると直に何か有合で一猪口出ました其内話への料理も參り大した御馳走で御座い升、種々國の話などを致しながら久兵衛ハ此人が里が國で恩に成た旦那かと思ッて居るので御座い升けれども此仁ハ彼の絲町の堅川ゑ居る男で船で逢引を致したお里の密夫ですがお里に分れるのが否だから頻りと咄が長くなりました其内夜に入りました 彌「旦那さま、旦那さま 久「アイ 彌「漸くの事で森山から金が屆きました 久「然うか來たか 彌「私も金の處ハ御存じの通りお拂ひの處が隨張り御座いませんから心配致して困ッて居りましたが六百両屆きました 久「然うか何しろれ客さまだから例の抽斗へ入れて置いてお呉れ……お客さま御兒遊ばして下さいまし……其處へ入れて

お置き……然う夫れで宜いから確り締りを附て置いてお呉れ……誠に何うも失禮を致しました 喜「誠に何うも暮いお商人のお忙しい處へ出まして頓だ御厄介に成りました今日いお暇を致しませう 久「マア何うぞ今一献 喜「有難たう御座い升……左様なら二タ子十二反程目を附けましたから頂戴致し夫から紬を五反に八丈の黐黍手の方を三反丈け何うぞ緑町三丁目の竪川と云ふ貸席に居り升から明日其處へお届けを願ひます實い明日出立うかと存じましたが此容子でいまだ一兩日い居る積りですが遲くも二十八日にい歸ります心得で 久「お引止め申度が左様で御座い升かお出立前でい何んでせうから明日取揃へて番頭か手代に持たせて差上げます 喜「何うか御勘定をなすッて何程か金子を置いて參り度う御座い升 久「イエ〳〵何う致しまして代物と御引換で宜しう御座い升 彌「只今でなくとも明日 私が持參致しますへエ其時に頂戴致せゞ宜しう御座い升 里「誠に今日いお搆ひ申ませんで遠い處ゆゑまたお目よ掛る譯にも參り升まいが何うぞ御新造さまへも宜敷う願ひます夫から何うぞ蕎屋のお内儀さんへも宜敷う 喜「誠に今日い圖らず大御馳走に成りました皆さんへも宜しう願ひ升 久「左様ならゞ 喜「左様ならと、歸して仕舞ひましたが暮で込取で居る處へ來られ店の用も段々後れに成て彼是亥刻少々前で 久「彌平どん大きに遲くなりました併しナンの方さへ來れゞ是で暮の極りい附いた 彌「へエ是でお拂ひがチヤンと取れゝゞ宜しいが取れん時い此方の拂ひ方に困るから是丈けは是非極りを附けなければなりませんへエ……小僧や然う墨を曲げて磨るものぢやアない氣を附けねへ和郎い奉公人根性で磨るから往けねへのだ……且那さまモウお店い大概にして締めませう……是い大層宜い筆で御座い升ナ……へゝゝイエ何手自慢所ぢやア有りませんが……其敷紙を敷いてお呉れ跳やア爲ねへけれども帳面だから勢能く認めなければなりませんへエ大福帳から先へ認めますのが慣か例年のお極りでへエ宜しう御座い升と、云ひながら太筆を取りドップリ墨をつけて今認うとする處へ門口の戸をトン〳〵〳〵

第十回

男「一寸開て呉なよ一寸開て呉ナ彌「へエ誰公か入らしッたお客様だ小僧「へエ只今開升と、小僧が立上りガラ〳〵と潜り戸を開る同時よヌッと這入て來のい黒の羽織に白小倉の袴を穿き大小を落差に致し山岡頭巾を冠り眼ばかり出した侍で跡から續いて這入て來た者も一本差して居り升、先へ立た白小倉の袴を穿いた侍が突然に長刀を引拔き突き附けました今彌平い帳面の表書を認うと爲て居り若衆い帳合を爲て居る小僧さんい十露盤の稽古を爲て居た處へ長刀を突き出されたから番頭い驚愕してハッと思いず手に持た筆を取落すとゴロ〳〵〳〵と廻轉り彼の侍がピタリと店の端ッ先へ坐り込まうとする膝の下へ這入りました、附隨て來た一人の若いヒンと戸の締りを附け上り口の戸の側へピタリと寄り掛ッて

小長いのを引抜いて突き出され番頭ハ眞ッ青に成ッて只震へて居りまして口が利かれません殊に廻轉て往た筆が彼の侍の坐ッて居る膝の下へ這入り白小倉へベットリと墨が附いたから尙ほ叱られやァ爲ないかと思ひ恐縮て仕舞ひました 侍「貴樣ハ當家の主人か、主人ハ其方か 彌「テ……タ手代で御座り升……シ、主人ハオ、奥に居り升 侍「主人ハ奥に居るのか 彌「ヘエ……オ、奥に居り升るので御座い升が少々用事が有て裏口から用達に出ましたので御座い升 侍「虛言を云ふナ 彌「ヘエ……今方歸りまして奥に居るやうな容子で御座い升 侍「大家と見掛けてチト頼みが有て來たが貧ハ此度名前ハ云ハれんが拙者ハ芝邊の或大名の家臣であるが御舍弟附と若殿附と兩黨に分れて屋敷も大きに面倒を生じ拙者等ハ御本腹の若殿に附いてお國表へ退くゝ付き多分に金子も要る事で有る貧ハ出入町人にも無心を云ひ三千兩程ハ才覺を致したれども殘金二千兩程足りないので斯く夜中に來て白刃を揮ひ威して取るハ賊に均しいが決して左樣でハない併し聲を立てられて他へ漏れていお主の爲めにならん、ダガ拙者ハ素より一命ハ惜まん命を棄てゝ主人の爲めに金子の才覺を致す身の上で有る何うか長うハ頼まん來年の三月下旬までと思ッて呉れゝバ決して間違ひない必ず返金に及ぶが來年の三月まで金子千兩程貸して呉れんか 彌「ヘエ、ヘエ、左樣に金子ハ御座いませんヘエ御存じの通り先年の大火事で土藏を二戸前落しましたから又急に金策を致して斯樣に普請ハ成りましたので御座い升ヘエ就きましてハ誠に勝手不如意で御座いまして他より金子を借受けて稍と此暮も凌ぎ升くらゐの譯で表向ハ誠に繁昌致して居り升けれども内所の處ハ皆な機場〳〵へ金子を廻して仕舞ひますから中々遊んで居る金子なぞハ少しも御座いませんヘエ何うか御勘辨を持ちまして他の大家へ仰しやり付けて下さる樣に願ひ度う存じ升 侍「默れ他の大家へ頼む位なら當家へハ來ない 新橋の取手屋と云てハ音に聞えた豪商で有る千や二千の金のない事ハ有るまい出さんに於てハ致し方がない主人の爲めにハ換へられんから其方の首を打斬ても金子を 彌「イエナニ 私ハ泰公人の身の上で御座い升から一存にハ參りません一應主人に相談致して御挨拶を致し升 侍「ムー然らバ主人を此處へ呼べ 彌「ヘエ、旦那エ、旦那エ、と大きな聲を出す積りだがちッとも聲ハ出ません、久兵衛ハ奥で一杯飲て居りましたが店が闇として居り升から何心なく中仕切の障子の處へ出て來ると番頭の鼻ッ先へ長刀を突き附けて居り升から驚愕して腰の拔けたやうにペタ〳〵と其處へ坐るを見て 侍「其方が當家の主人か 久「ヘエー 久「何を和郎方ハ不調法を爲たのだ……ヘエ店の者の屆きません處ハ 私 がなり變ッて幾重にもお詫を致します

侍「何も屆かん事ハ別に無い拙者等ハ主命に因て金子才覺に歩行く身の上のものだが來年の三月まで金子千兩程貸して呉れ 久「イエ中々持ちまして只今左樣に金子ハ御座いません

侍「ナニ無い事いない筈だ深川から此家へ廻って居る處の金子も有らう今日六百両届いたらう久「ヘエ其金子ハ有り升が其金が御座いませんでハ下拙方が行立ません事でヘエ侍「默れ其方ハ匿して居るけれども遣さんに於てハ止むを得ず、と云ながら刀を振り上げました久「イエ進げます〳〵、と仕方がなと侍「まだ金子が有だらう無い事ハない、と店に在た金を掻集て二百両都合八百両出すと沈靜たものでチャンと數を改め二つに分け一つハ伴の樣な附隨て來た男に持せ一つハ風呂敷に包んで自分が持ち侍「夜中に來て大きに騒がせ誠に濟んアヽー侍と云ものハ御主の爲にハ一命をも棄ねばならぬ實に餘義ない譯が有て心苦しい身の上で有る其代り來年三月に至り事整ひ金子を返すやうになれば其時に名前を明しまた其方をお屋敷へ出入の出來るやうにして遣ハす若殿がお乘出しになり世に出るやうになれば御目見得を仰せ付けられるやうに取計らッて遣る、此金で事整へば千萬辱ない、取手屋許せ、奉公人誠に騒がして濟まん堪忍して呉れ、と柔和く挨拶を致しチャンと鍔鳴をさせて刀を鞘に納め出て往きました跡ハ一同落膽してハアーと云ッて居りましたが暫く經過と畏怖くなり久「ナニヤ早く大工を呼んで來いとバタ〳〵夜半に忍び返しを附けると云ふ騒ぎで御座い升、何しろ取手屋ハ大火事に續けて倉庫を落した樣な事で身代が往き立たないから他で金策を致して其年を凌うと思ひ漸く借りた六百両の金子を強奪た事ゆゑ何うしたら宜からうと主人と番頭が鼻と鼻を突合せて種々心配致して居り升 彌「先づ 私 の考へでハ取れる丈け取り返して手尊公斯々云ふ災難に逢たと柳川町に手先が居り升から是へ咄を致し夫々へ訴へる事に爲ませう夫から尊公難儀を云ひ立て得意先の貸の有る處ハ御勘定を願ひませう、夫に昨日來たアノ常陸の北條のお客さまハ反物さへ持て參れば僅少でも少しハお足しになりますから往て參らうと存じますが持たして遣るにハ書附を認たり面倒ですから却ッて私が往て參りませう又た若い者を遣て屆かん事でも有ると何んですから久「夫でハ御苦勞だが往て來てお呉れ綾町三丁目で堅川と云ふ貸席で常陸のお客さまと云へば直に解るさうだ彌「ヘエ畏まりました往て參ります、と若い衆にドッチリ反物を脊負して僅少な拂ひでも取らぬと不都合だと主思ひの彌平が參りまして彌「ヘエ御免下さいまし下女「入らッしやいまし彌「エー當〳〵さまに常陸の北條から入らしッてるお客さまで信濃屋喜平さまと被しやる御仁ハお在で御坐いますか下女「ハイお在です一番奥のお二階に在らッしやいますが、何誰さまで彌「私ハ新橋の取手屋久兵衛方からお誂への反物を持參致しました者で下女「左樣で御坐い升か少〳〵御待ちなさい、と是から奥へ取次ぐと此方へ通れと云ふので番頭の彌平ハ女中の案内に從ひ奥へ通りました喜「サア〳〵何うぞ此方へ〳〵、出立前で荷拵へをするので

取散かッて居り升　彌「へエ昨日ハ誠に取込んで居りまして折角の御入來で御坐いましたが
お粗々申上げ主人も心配致し宜しうお詫を申て呉れとの傳言で御坐い升「又た家内も誠に
お久し振でお目に掛り斯な嬉しい事ハないが何かソワ〳〵してお話も取殘ッたが呉〳〵も宜
しう申上げて呉れろとの事で御坐い升　喜「實に私も思ひ掛けない事でお里さんが御宅ホ緣
附いて居やうとハ思ひませんで闇らずお目に掛り大御馳走になり何とも立ち前だからお禮
の致し方も有りませんが詰らぬものでも國の名産と云ふ程の名産もないが何んぞ差上げ度
く心得ます併し昔馴染に逢ふと云ふハ妙なものでッイ〳〵お話が持てましてお取込の中を
も憚らず長話を致し嘸御迷惑で御坐いましたらう　彌「イエ何う致しまして「就きまして
ハ昨日お詫への品を持參致しましたがエー他さまで御坐いませんからお跡でも宜しいので
御坐い升が是丈けの御勘定ハヘ〳〵〳〵何うか願ひ度ものでハ實ハ昨晩少〳〵災難が御坐いまし
てす私方へ賊が這入りましたので只今訴へましたが實に種〳〵心配の中で　喜「チャ〳〵夫ハ
頓だ事で……昨夜賊が……ヘエー夫ハ頓だ事で嘸ぞお驚きでしたらう、何かお取られです
か　彌「ヘエ金子を取られました實ハ此暮ハ其金子を持ッて先づチャンと極りを附けやうと
存じ他から少〳〵足らず前を用立ッて貰ふ事に種〳〵心配致し漸くの事で届いて參ッたのです
が附けてゃる參りましたものか强盜が這入りまして二人りながらギラ〳〵するのを引ッコ

扱きましたので私ハ腰が抜けるやうに成ッてしまひました、夫れゆゑ御馴染さまのお得意
さまへハ御催促ハ出來ませんが方〳〵さまへ私が直〳〵參りまして譯を御話し申てヘエ殘りの
お拂ひを頂戴致し升やうな譯で　喜「ろれハ〳〵御心配な事で、何の位のなんですか知りま
せんが暮の事ゆゑ定めてお差支へでせう國へ歸れバ少し位ハ御用達ても何んですが眞實お
困りなら早速國へ飛脚を立て金子を取寄ても宜しいが尤も多分ハ出來ません千兩位あら何
うか才覺も出來やうかと存じ升　彌「〳〵エー〳〵御親切に有難う存じ升其御言葉を主人に聞せ
ましたらば何のくらゐ悦びますか知れません實ハ奪公八百兩程强奪れましたので他から才
覺致しました六百兩の他に店に有た金まで集めて拂ひでも致すやうに奪れましたので　喜「
夫ハ〳〵……フウーン……若し火急御入用ならバ國から取寄せて差上げませうか　彌「
ヘエ誠に有難う存じ升ヘエ何分宜しう、と云ひながらチョイト面前の壁を見ると床の脇に
荷が積んで有る上の掛竿に種々の物が引掛けて有る中に羽織の袖疊みにしたのと白小倉の
袴とが掛て有り其袴の膝の邊にベットリ墨が染て居りましたのを見てゾッと總毛立ちまし
たは昨夜帳面を認うとしたとき扱刀に驚き取落た筆が廻轉て侍の膝の下へ這入り墨が附た
ゆゑ怒らうかとブル〳〵ものでゐた處へスーッと立た時に氣になるから能々見たが膝の下
へ附た筆の跡の形が昨夜の通りゆゑ若しや晝間來て金の届いたのを見て居たから此二人が

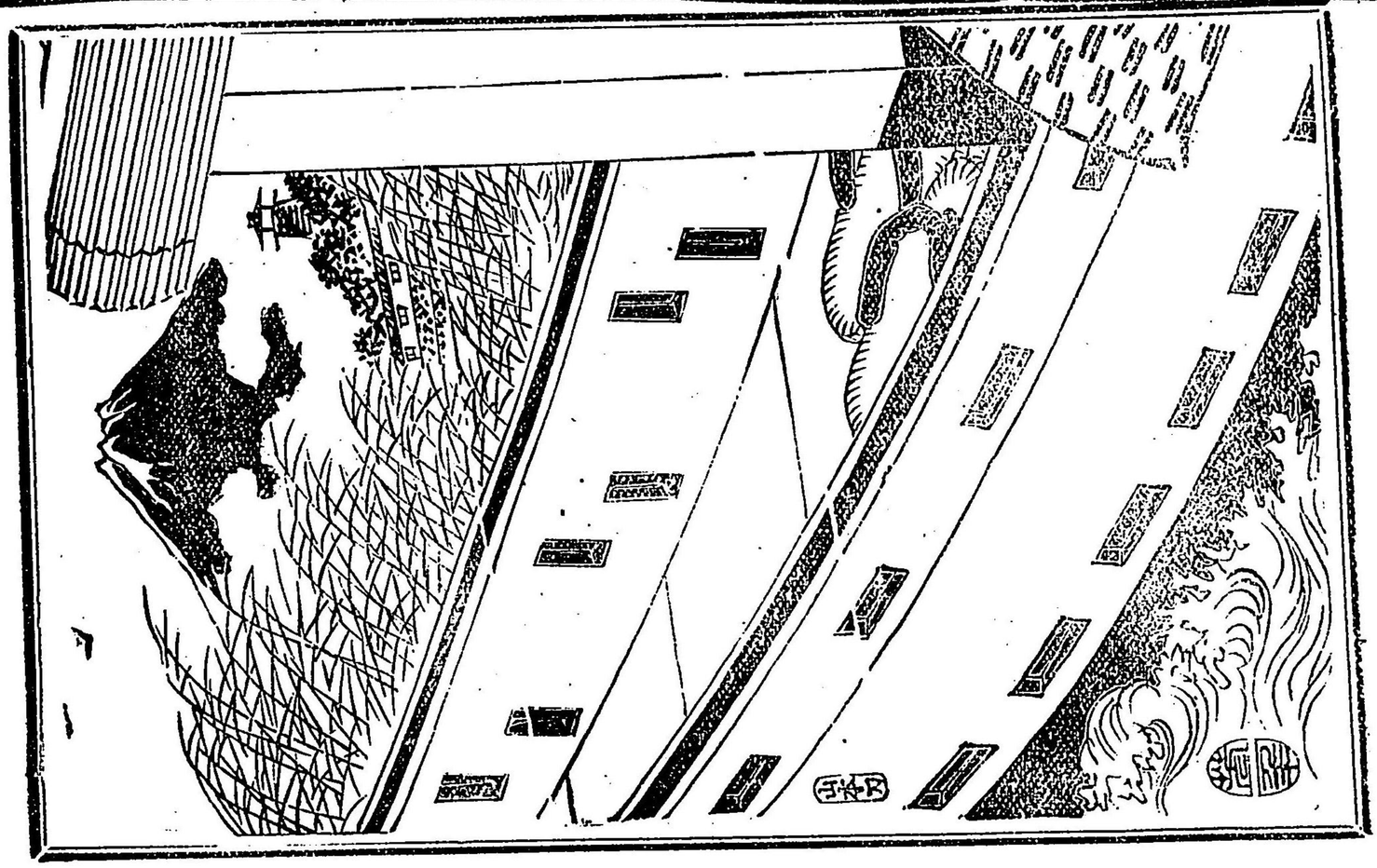
盗賊に這入たのぢやアないかと思ふと胸が詰ッて口が利れませんから〳〵爲ながら彌「イヽエナニお暇を致しませう暮の事で店も取込んで居り升るし他にもまた種々心配だらけの處で御坐い升からお暇を致し升 喜「左樣ですか何うぞ宜しう、金子の處へねエ 彌「イエなに……主人も悦びませう、と這々の体で立歸り此事を主人に咄すと驚愕して久「酒を出して居る處へ和郎が六百兩届いたと云たから抽斗へ仕舞と云た事を聞いて居た二人だから何んとも云へない……お里、アノ仁の身上の處へ何うだエ 里「身上だッて和郎さんアノ仁へ北條で田地も有り山も持て居る立派な御仁で御坐い升もの盗賊なんぞするやうな仁ぢやア有りません大盡で御坐い升もの 久「ダガテ和女の居た時分へ大盡でも他人の身上へ確知にならぬから段々微祿して江戸へ逃げて來たのかも知れぬへ人には盛衰のあるものだ、夫れとも道樂でもして勘當されて來たのか知ら 里「勘當ッて生若い仁ぢやアなしアノ仁も三十四五に成て居るから正可ねへ 久「でも袴が壁に掛ッて居たてエのへ何うもテ……何にしても手先の金造に咄をしたら宜らう、と云ふ咄を聞いてお里は驚きさしたと云ふへ芝邊の御用達さんが然んな事をする氣遣ひ無いが何う云ふ事か容子が聞き度い若しも間違ひで就縛れてへならず何う云ふ災難になるまいものでもないがヨモヤ盗賊は仕舞ひとへ思ッたが惚れて居る喜平だから早く此事を報知度と思ひまして少々ばかりの貰ひ蓄た小遣と着替の一二枚に大事な櫛笄を一緒めに爲て小包に致し上草履を穿いたなり裏口から飛び出し堅川へ參り勝手を存じて居り升から直に上ッて參りました 喜「何んだエ今女中が來て和女が見えたとの事だが眞實に驚いた、マア此方へお出ヨ 里「ハア餘まり驅けて來たので物が云へれない五生お願ひですが足が震へていけませんからお酒を飲して下さい 喜「酒か酒なら何程も有るから飲みテ 里「清さん且那へ何か心配して居るノ顔色が悪い事テ、と云ひながらグッと湯呑で冷酒を一杯飲み暫く息を繼で居りました

第十一回

里「昨夜テ妾の處へ盗賊が這入たノ 喜「然うだッてテ金が要なら少しぐらいへ用立やうと咄を爲て居たのだ 里「ろんなら宜いがテ實へ其盗賊の這入た時に番頭が帳面の表書を認うと思ッて太い筆を持て居た處だッたもん だから驚いて筆を落すと其筆が轉がッて侍の膝の下へ這入たもんだから其白小倉の膝の處へベットリ墨が染たので番頭へ侍が怒ッて斬りやアしないかと心配して其侍が立た時に能く墨の染た形を見たが此の壁の處に掛ッてる白小倉の袴の膝にベットリ染てる墨の形に似てゐるからヒョットして和郎さん方が盗賊ぢやアないかとの疑ひで一度調べなけりやアならないと云てるから若しや和郎さん方が云譯でも出來ないで災難を着るといけないと思ッたから一寸裏口から驅出して報知に來たが萬一

然う云ふ事なら妾も了簡が有るけれども正可和郎さん方に然んな事ゝ有り升まい併し手先に咄をすると云てたから報知に來たノ 喜「然うか、と振反って壁に掛って居る白小倉の袴を見て 喜「清次、清次 清「エー 喜「間抜だノ、何故此處へ袴を掛けて置いたんだナ 清「氣が附かねへ……エー氣が附かなかった 喜「仕樣がねへナ……オーお里さん何を匿さう和女の家へ這入た盗賊ハ乃公等だ 里「エー 喜「静かにしろ乃公ア字ゝ大戸の喜三郎てエ盗賊だ 此者ア 弟分の吾妻の清次と云ふ肩書の有る遊蝶船を腰に附ける長脇差だが少ゥし忙がしい身体に成て逃げて來て妙な處へ身匿しを爲てエる危險へ身の上だがお里さん和女ゐ逢てから何うしても江戸を立つのが否だ全体永く居られる身の上ぢやアねへが和女に逢ふ爲め匿れ忍んで永く居た訳かりで金が無くなッた處から仕業を爲たのだお里さん誠に氣の毒だ亭主持の和女に疵を附けて濟まねへが是れまでの縁と斷念めてお呉れ 清「兄イにハねへ事だよ全体お里さんが悪いんだ兄イハ斯んな事ハねへがお里さんにハ兄イも茫然して立ねへで愚圖ッかしてエたもんだから斯んな事に成ッたんだ 里「へエー……和郎さん方ハ盗賊かへ 喜「さうヨ 里「和郎さん方ハ是れから何うする氣だエ 喜「何うするッて和郎の亭主が手先へ頼んだてエから此處にハ居られねへ亡命るのヨ 里「亡命ると云ふのハ逃るんだテ 喜「さうヨ 里「酷から忙がしい身体だと云ふのだテ 喜「能く然んな事を知ッてるナ 里「

ハア……妾も一緒ゑ伴れて逃げてお呉れナ 喜「女を伴れて往けゞ直に足が附くから和女を伴て往く譯にハ往ねへ 里「往かないッたッて妾ぐらゐ變な因縁の者ハ無いと思ふよ妾が前に夫婦約束を爲た者も始めハ盗賊と知りませんでしたが跡で聞けゞ肩書の有る盗賊で御處刑になッて仕舞ひ、夫からまた和郎さんと斯う云ふ事になると云ふハ妾ハ眞實に盗賊に縁が有るテ 喜「さうか和女ハ盗賊を亭主に爲のか 里「アー夫婦に成て表て向き暮しハ爲ないけれどマア始まり二月ばかり夫婦同樣に成て居て夫から江戸へ逃げて來て其人を妾の伯母の處へ隱匿て置いた内も一月半ばかりだがソノ妾が夫婦約束を爲た仁ハ妙義の白藏と云ふ盗賊だヨ 清「喜三ア妙だナ〳〵是ハ妙だムー白兄イノ……ヘーさうか 里「だから何うゞ伴れて逃げてお呉んなさい妾も斯な身体だから仕方がない和郎さんと共に妾も御處刑になるのハ喜三さん妾ア些とも厭ひませんから伴れて逃げてお呉んなさい 清「兄イ是ハ伴れて往ねへ置いて往くとまた盗賊と私通くから伴れて往きねへ〳〵、と云ハれて素より悪い奴で度胸が据ッて居升からそんならと云ふので是から身支度を致しお里を伴れて此家を立ち出で逆井の渡場まで往くと充分の手配が届き渡口へ張込の附いて居る處を漸くの事で喜三郎清次ハ斬り抜けて渡を越し遂に新宿へ逃げました大戸の喜三郎吾妻の清次ハ手取屋の女房お里を伴れて危い處を切り抜け逐電致しました跡で取手屋の殘念がります事ハ一通り



で御座いません女房が手引をして盗賊を家へ入れたとい氣が附かなかッた如何にも悪い婦だと金を遣ッて手先を頼み諸方を探索致しましたが更に行方が知れません、六百両と云ふ暮の金を奪られ他に前の借財が有り升から往き立ちません殊に文化三年六月十八日で寅年の火事と申しまして四日の大火で倉を三戸前落し夫から無理借金で舊のやうな立派に普請した家で御座い升から何分行き立たず先づ一時店を仕舞いねばならん事になりました丁度翌年の六月に店を仕舞ひ舊の坂本へ引込みまして小さい店を出して居りましたが是も何うも思ふやうな往ず間の悪い時にいいかんものでなかなか不圖した事から久兵衛の腰が痛み始めましたが只今で云ふと脊髓病とか腰髓三骨とか云ふ病氣で物い喰べますが起居が出來ませんゆゑ男を頼み脊負て便所へ參るやうな譯なれば蓄金い殘らず消費果し致方がなく追々手道具を賣拂ふやうに成て店を張て居られませんから田町へ引越し養女おきよが看病を爲ながらチョット鎖附の提灯で有るノ蠟燭紙煙草のやうな物を店へ置まして商賣を致し内職い其頃ろ真綿を紡む事が有りましたから之を内職よ致して居りましたが末にい養父も段々危篤く成て參りまして迎も内職などい出來ませんので田町の家も仕舞ひ遂に燈明寺店の裏家へ引込みました、只今でい慥か濟島町とか申升、久兵衛の病氣い迎も恢復らぬとお醫者に云はれて孝行な養女ゆゑ年齢い十六だが至て篤實で御坐い升から養父の病氣全快を祈る爲に淺草

の觀音さまへ心願を込めましたり御嶽山を祈ッたり種々致しますが其甲斐も御坐いません丁度二月二日の事でピューヒョウ〳〵風が吹て寒く震へ上るやうな日で御坐い升おきよい薄着で働いて居りましたがやがて神棚の燈明を點て二枚折の屏風を枕元へ立て火鉢へ火を埋て持て參り きよ「阿父さん、阿父さん 久「アイよ きよ「お藥の二番が出來ましたがお飲なさい升か 久「アー有難う……少ウト〳〵寢たやうだ きよ「小しお熟睡被成たやうですアノ表の姉さんの處から柔和いから和郎さんに喰られやうと云てお芋の煮たのを下さいましたヨ久「御親切に能種〳〵なものを下さる夫も皆な和女が愍然だと仰しやッてお長家の衆に可愛がられるから乃公まで時〳〵甘いものを貰ッて喰べられるアヽー和女にまで苦勞をさせて誠に濟まない、早く死に度い惡じい乃公が生存て居るから和女い片附く事も亭主を持つ事も出來ねへ乃公さへ居なければ和女い何うでも身の振方が附くがら結句乃公の死んだ方が和女の爲になると思ふから早く死に度けれど業で死ねゝへノウ きよ「アレマアそんな勿体ない事を仰しやるものぢやァ有りません和郎さんの病氣は朝鮮の大人參を飲めば全快ッて水山さんが仰しやりましたがアノ御醫者さまい前〳〵からお心安いもんだからお藥がなければ無代進げるから心配をしでないよと仰しやッて下さり隨分舊からのお馴染ですから大事にして下さいますが朝鮮大人參とか云ふのい大層高價お藥だから夫を配劑譯にも往ないと仰

しやッてお醫者さまが心配して下さいますが就きまして阿父さん少しお願ひが有り升が叶へて下さいますか 久「叶へて呉ッたッて斯な貧乏の中で何一箇買て遣る事も出來ず併しナア年頃だから偶には斯う云ふ縞柄の半天が着度いとか彼云ふ簪が差し度いと云ふ事も有らうが何一箇買て遣る事も出來ずァヽー因果だノウ……何うも大人參だッて一箱三拾五兩もするといふ話を聞いてるが然んな藥ヽ迚も飲めないし一層死ぬ方が宜い早く死度いきよ「だから子 阿父さん何うか妾を娼妓に賣て其身の代でお藥を買ひ全快て下さいナ 久「ニー 久「頓んだことを云ふ然んな馬鹿な事ヽ出來ませんヨ きよ「勿論子 親の爲にヽ身を賣ッて苦界ゑ沈む者も幾許も有り升から然うして下すッて阿父さんの病氣が全快て仕舞ひ前の樣に和郎さんが包みを脊負て耀を爲て歩行ば又夫から行立つ事になりませう人間は七顛び八起と云ますからまた好い時節が御坐いますまいものでも有りませんからろんな處へ沈めるのは否で御坐いませうが親父の爲にヽ換られません何うか妾を娼妓に賣ッて下さいまし久「出來ないヨ、然んな事は出來ませんヨ……アヽー有難い和女の心持ばかりで予ヽ滿足だ併し何んな事が有ッても和女を苦界へ沈める事ヽ出來ません又た其身の代で予しが藥を飲んで本復ても詰らねへ、死ぬ方が宜い……然んな事を云ッてお呉れでないヨ きよ「親の爲だから宜いぢやァ有りませんか……舊田町に居たとき裏の判人の源七さんのお内儀さんヽ心掛けの宜い人ですがお德さんの咄に宜いお客に受け出されて御新造さんゑ成ッて生涯結構に暮す仁が有ると云ふ事ですが人ヽ運不運ですけれども若し然う云ふ事が有れば差父さんゑも樂をさせ妾ヽ一生懸命に勤めの中でお金を蓄め年季が明けて出て來る時ゑいれお金を澤山持て來て舊のやうなお店ヽ出來なくとも四半分でも取手屋のお店が立つやうに心掛けますから養父さん藥を飲んで病氣を全快し親子でお金を蓄め舊のお店の四半分ゑも爲たいぢやァ有りませんか、と云れて久兵衛ヽサメ〳〵と泣き沈み暫らくして頭を上げ 久「アヽー有難う、有難いけれども子予ヽ和女を賣る事ヽ何う有ッても出來ぬと云ふ譯ヽ和女ヽ他人に聞いたか夫れとも知らぬに居るか知らないが今打明けて咄をするが和女ヽ予の眞實の娘ぢやァないヨ きよ「エー 久「十六年以前忘れも爲ねへ二月三十日の晩に本庄宿の代町といふ處の軒下に捨てヽ有ッたのを予が拾ッて來たのだが和女ヽ立派なお侍ひの娘だヨきよ「エー妾ヽ棄兒……久「ウン、柳行李の中に入れて棄た親も跡方を案じると見にて柳行李の中に清涼と云ふ鏡が這入ッて居たが是ヽ普寛行者さまが御嶽山の清瀧で荒行を爲た時に瀧壺から授かッたのを深川の講中へお譲りゐ成ッたものだが其鏡が柳行李の中に添へて有ッた夫に新藤五國光の合口が副へて有ッた夫から和女を拾ッて來たと云ふヽ予も子がなくッて困ッて居たからまをし子を願ひ無理な御願掛けを爲て其お禁上の時に降ッた普寛

さまが出て墓參りに來る時よ本庄の宿外れに乘兒が有る夫を拾ッて養育れば屹度貴樣の死水を取ると云ふお告で始まりい冷笑て居たが拾ッて見ると神さまのお授けかと思ひ大事に掛けて育てゝ居ると其翌年の忘れも爲ない八月よ和女の眞實の父が植木屋に成て乃公の家へ來て和女を抱いて居る乳母の容子を聞き男泣に泣くからさてい此仁が棄たかと思ッて段々容子を聞と其仁い常陸の土浦さまの御家來で恒川半三郎と云ふお侍だが御新造が死んで乳がなく成て行き立たなくッて棄兒に爲たと聞いず語りに話されたので其仁の娘と知たけれど知らない假似で大事に掛けて育てるから心配しなさんナ予い何んなに零落ても見苦しい遊女や賣女にいさせませんと云たらソノ和女の實父が悅んで他人と思ッて下さいますナ實の娘と思ッ　育てゝ呉れと呉く乃公に賴んだ丁度其晩に盜賊が這入たが其恒川と云ふ仁い劔術遣ひと見えて盜賊を打ン毆ッて一人い逃げたが白藏とか云ふ大盜賊いトウ〳〵送りに成て御處刑に出ちまッたが其後に火事に逢ひ種々災難が重る中で乃公の家内が死去り、お村が死と乃公に魔が差してアノお里と云ふ奴を後妻に入れたのだ御嶽山を信心する身の上で有ながら彼が不味ノ此い氣に適らんノ今日い花見明日い劇場と榮耀榮華を爲た罰が中ッて乃公い零落果ても心柄だから仕方が無いがアノお里メが窃盜を宅へ引摺り込だ爲に斯なに成たのだから呪り殺して遣うかと思ふほど口惜いが今い仕方がないから何ぞモウ何にも云て呉れるナ……證據を見せずに死んちやァ容子が解るめへから息の有る内に話さうと思ッて實い床の下に出して置いた……此品い國光の合口此品い清瀧の鏡、と十六年跡の事柄を話した時にいおきよい餘りの事に驚愕りして暫く考へて居りました

第十二回

きよ「阿父さん夫でい尙ほ尊父妾を娼妓に賣て下さいナ　久「何故　きよ「眞實の親より大恩の有る和郎さんが今頁いお藥を飲めば全快するとお醫者さまが仰しやるのに妾い娘の身として何うも見てい居られませんから娼妓に賣て下さい屹度お金を苦て和郎さんに藥をさせますヨお願ひだから何うか　久「イヱ何んな事が有ても和女を賣る事い出來ませんヨ乃公い心柄だから仕方がない何にも知らない和女にまで苦勞をさせ咏嚼漉を下げさせていい濟まない恒川殿が信州の福島へ立た當坐にい音信も有たが此頃い薩張音信もなく乃公も斯なに成たから手紙を贈しても解るまい又た先方さまも和女の顏を見ても知れまいが此鏡と合口とを證據に予が今云た事を能く和女から其恒川さんと云ふ眞實の阿父さんに逢て話しを爲てお呉……アヽー忌だ〳〵死度〳〵、と愚痴タラ〳〵でオロ〳〵膝へ涙を落して居る内に夜が深更ました事でおきよい養父に心休めを云ひながら寢附かして仕舞ひ翌朝早く起き驅け出して田町へ參り判人源七夫婦に逢ひ　きよ「阿父さんは娼妓にする事いならんと堅い事を

仰しやるが良い藥を飲ませないと御病氣が全快ないとふ醫者さまが仰しやい升、爰父にい換へられませんからお世話を爲て下さいお役にい立ちますまいが藥の買る丈けに賣て下さいと頼まれて、源七夫婦い親切ものでい有るし素より感心して居る娘の事ゆゑ源七「何うか工夫を致しませう阿父さんい堅い御氣象だから然う仰しやりませうが和女さんの云ふ處も至當だから何うか致しませう予も出入の處が有るから、と是から源七が角海老へ參ッて話を致しますと角海老の主人も感心致しました殊に御嶽講で馴染でも有るからマア兎も角も其娘を預りませうと云ふので是から源七が人主になり女房が受人となり、判代も金利も取らず他に扱け道の無いやうまして先方の爲めよなるやうに爲てやらうと直に請が附いて角海老へ身を賣り手取り八十兩三年の年季證文で極り大井と云ふお職花魁の手許へ置いて先づ廓の容子を覺えさせましたが標致い宜し品い宜し何處となく愛の深い娘で乾度お客が附く早く突出しになれば宜いと評判を爲て居り升と丁度三月春節句と節句に大きい花魁が若い花魁を伴れて五町を廻いる入費が其頃い三十兩で出來たと云ふ夜具から蒲團の事を大きい花魁が引受けて致しましたスルと不思議な事に節句の晩にお交際で來ました仁い年頃ろ二十一二になりまして婦女かと思ふ程色白い鷄卵を剝たやうな奇麗なお侍さんが來ました素より親の爲めに身を賣りました彼のおきよ今は相馴と云ッて漸やく廓の容子を

覺にアゝさます然うざんすと云ふ言葉の習ひたて思ふやうに出來ません、さて其の突出の始に來た仁い簾形岩次郎と云ふ上野の御用室ゆゑ是い奇麗な譯で當時ハッレれかまと云ひましたが何う云ふ譯でおかまと名を附けましたか圓朝未だに調べが屆きませんが宮さまが御覽なすッて誠に美しいものだ其方の素性いと云と 岩「親の名も知りません 宮「其方の紋處へ何か 岩「紋處も解りません 宮「夫でい之を紋處に致せ、と御簾の表緣に附いて居る瓜の内の唐花を取て紋處に致し簾の形を取たから簾形と云ふ苦字まで頂戴致し宮樣に遣はれ御奉公に上ッて居り堅い人だが交際で始めて參り相馴を見て深く思ひ染め問さへ有れば忍んで逢ひに來ますと云ふ此者がソノ妙な緣で常陸の土浦で七百石頂戴致した久保田傳之進の亂で御坐い升即ち妾に上ッて居たお里の腹へ出來た子の傳太郎と云ふものでお里が抱いて根岸へ參り人來鳥に居りまする内に宮樣衆に可愛がられ緣切りで其宮樣衆に貰はれましたが母とい違ひ至ッて心の柔和しい人で御坐います、して見ると恒川半三郎が殺害した久保田傳之進の息男傳太郎の岩次郎が恒川の眞實の娘おきよの處へ通ッて來るとい因果同志の寄合で互に知りませんでしたお咄二つに分れまして上州安中の自性寺村に饅頭を賣ッて居る草三郎い主人恒川半三郎を助けて居り升が恒川も夫から引續いて多病で御座いまして致方がないから彼の自性寺と云ふ寺院へ參ッて書物を致して朝の内い村方の子供を集て手

習を敎へて居り升のて草三郎ハ恒川を勞はりて旦那さま苦慮〳〵爲て在らしッてこんなゴタ〳〵婦女や子供や爺ィ媼アの中で心配をなさるので御病氣よもなりませうから秋間の出外れに一軒家を建てました尤も宜い家でハ有りませんが萱に致して風入りの宜い向ふに反囲が見ゆて山の見える景色の宜い處へ建てましたから否でも御座いませうが旦那さま通り掛りの者が草鞋や茶を一杯呉れろと云へば僅かな茶代も置いて往きまた草鞋ハ札さへ附けて置けバ自然に買て往きますから何うかうなすッて、と草三郎が種〳〵物を買ッて宛行ひ親切にいたします草三郎の女房ハ年が違ひますけれども恒川が何んでも持てと云ふので滿呂木の幸吉の妹のお常を女房に致し早くも子供が出來ましたから安心致して眼の悪い母親ハ死去り續いて重兵衛も死去り今ハおまよと云ふ婆アと女房お常と子供を相手に致し草三郎ハ少しも惰りなく饅頭を賣ッてハ婆アや恒川半三郎の世話を致し、お寒い處だからお寒い思ひをさせ度ないと綿の澤山這入ッた着物を持て來て恒川に着せると云ふ其眞實ハ誠に感心な事で恒川ハ氣の毒に心得ますが素より二君に事へる了簡もなく空しく其年を過し八ケ年の光陰を經ましたハ早いもので丁度文政元年の八月三日の事で表を通り掛りました二人連の者が男「ヱー何うか一つ灰を貸してお呉んなさい 半「ハイれ掛けなさい 男「草鞋の眞いのが有るねへ……何んですか、是から榛名の表山までハ餘程御座い升かヲ 半「榛名の表山へハ是から木島を越して慥か上山へ出て室田の方へ出るが近いと云ふ事でも 男「ハアー……ア、草臥れた 半「微温が茶を喫れ 男「オヤ……且那さまか 半「オ、……お前は喜平次か、是れは喜平次思ひ掛けない處で逢ッて誠に面目次第もない、斯う云ふ處へ閑居して仕舞ッた 喜「何うもマア餘まりお久數ッてお見逢ひ申すやうに御容子が違ひまた 半「イヤ和郎も薩張り容子が違ッて年を老た、予も此通り年を老て仕舞ッた 喜「イヤ何うも恒川半三郎さまとハ誠に思ひ掛けない事で 半「和郎にハ其折り厄介に成つて辱けないが其後段〳〵と零落果て只今でハ斯う云ふ在方へ來て他人の助けに因て被果なく斯う遣て暮して居るゆゑ手紙も贈られぬ不實な奴と家内ハ思ッて居るだらうが歸ッたら宜しく云て呉れ……マア何處へ參つたのだ 喜「ヘヱ御嶽山へ參詣して昨夜ハ安中泊りで御坐いまた直に歸る者も有りましたが小哥ハ榛名山へ參詣してから伊香保へ廻りて歸らうと思ふと一緒に往かふと云ふから此金次と二人で通り掛りましたので 半「懐かしいからマア〳〵お上り、緩くり話も仕度から詰らん物だが貰ッた菓子が有るから茶でも入れやう 喜「お構いなさいますナ……コー旦那さまハ此處ゟ在らッしやい升るのか 半「和郎に分れてから久しい事だナ十五ケ年になるから年も老る譯だ、和郎ハ幾才に成るノ 喜「小哥ハ六十六ゟなりますヘ、、、半「然うかヘ壯健だノ、イヤモウ私も爺ィに近く成た……何しろマア早速聞き度いハアノソレ貴樣の家に厄介に成て居た時分植物の手傳に往た 新橋の取手屋と云ふ呉服屋ノウ、

予が立つ前に和郎に精しい話を爲たがアノ取手屋ゝ何う爲たエ　喜「何うもマア旦那さま取手屋さんゝ誠に氣の毒な事で御座いまして微祿致しエー何んとか云ひましたッけ判然り處ゝ聞きませんが何んでも淺草田圃の方だといひますが酷い裏家住居に成ッてしまッたさうでアゝ云ふ大家が何うして然んなに零落たらうといふ評判で　半「ムー……夫ゝマア頓だ事だが何う云ふ譯で裏家住居になるまでに何うか災難でも有りましたか　喜「ハイ判然り精しい事ゝ解りませんが斯う云ふ事を湏ゝ聞きました、と是から本妻が死去なッて後妻が這入り其後妻が盜賊の手引を爲て大金を窃まれたのが暮の二十六日で夫から引續いて信祿致し淺草田甫の方に裏家住居に成りましたと云ふ駝鈍師喜平次の物語を聞いて　半「アヽー、夫ゝマア何も災難とゝ云ながら氣の毒な事だ　喜「其上和郎さん取手屋の旦那が病氣で、夫に就て和郎さん此間も其噂でしたがナニかソノ娘が一人有りましてエーおきよさんとか云ひましたヨ小哥ゝ物覺えが惡いから忘れちまひましたが醫を云へばお嬢さんと云はれる方が阿父さんの病氣を全快し度いから身を賣て呉れと云てもアヽ云ふ堅い仁だから難肯と云ふのを聞かねへで和郎さん驅込んで往て吉原の何にとか云たッけチョイト胴忘れを爲たが何んでも大きな妓樓へ身を賣て藥代を調達へ藥を飲したものだから且那の方は段々全快成て來たとか云ふ事です其處で其娘ッ子ゝ感心ぢやア有りませんか勤めの中で無駄遣へを爲ねへで小遣を蓄て阿父さんに送るから雇人を一人置いて看病人を付たら宜からうと、勤め

の中で小遣と蓄めて親を養ふてエ位の孝行な娘ゝ無へ感心な志だッて夫が貰ひ娘だてエ話です　半「左樣か、ムー……然らばソノきよと云ふ娘が身を賣て久兵衛を助けたか……ヤレ〳〵何うもハヤ……ハアー左樣か……マア喜平次和郎にゝ少し云ひ難い譯が有るのだが予ゝソノ取手屋を助けて遣らんけれバならん恩義が有るのだ福島へ立つ時に金子を三十兩貰ひ、福島へ參ッて伯父方に厄介に成ッて是迄居たが然んな處へ一人の娘を入れて置くと臺無しの者に成ッて仕舞ふから何うかして助け度ものだがナニかソノ娼妓に賣られたのを身受け致すにゝ餘程金が要るかノウ　喜「小哥も精しい事ゝ存じませんが輪に輪を掛けて金が要てエ事ですから百兩のものなら輪を掛けて二百兩ゝなければいけますまい殊に身受の時にゝ金が要てエ事を聞いてますが尊公が遣りますか　半「予ゝ今の身の上で身受をする譯に往んが喜平次其方ゝ江戸表に居る事だし素々出入の者だから何うか才覺して娘を助けて遣る譯にゝ往んか　喜「小哥も年を老て萎子を致し金太に家督を繼してゐるので小哥にゝ中々百ノ二百ノてエ金の出來コゝ有りません、小哥も久しく取手屋さんのお宅もお尊ね申さん位で中〳〵然んな大金ゝ出來ません是が二十か三十なら借金を質に置いても何うか致し升けれども中〳〵何うして然んな大金ゝ何うも致し方ゝ有りません　半「アヽー頓だ事を聞きましたノウ……　喜「小哥ハまだ種〳〵お咄を爲て居度う御坐い升が同伴が先へ出越して待て

まして高崎の大黒屋が定宿で小哥ゝ伊香保から廻って高崎へ出抜ける約束ゆゑ種〻お懐かしからお話も仕度けれども同伴が待てますからお暇を致します　半「夫ゝ〳〵何んだか名殘り惜しいが致し方もない和郎何うか身を大事にして……家内へも宜敷云て呉れ併し家敷の者に逢ても予が此處に居る事を云て呉れて居る　喜「宜しう御座い升、左様あら御機嫌宜しう　半「氣を付けて往きなさい先の橋ゝ落て居る、中央からザブ〳〵這入て往かんと自性寺の門前まで往れんヨ　喜「有難う存じ升、と禮を述て急きで行く後姿を半三郎ゝ見送ッて居りましたがドッカリ座布團の上へ坐ッて　半「ハァー……情けない事だ予が娘を育てゝ呉れた恩義の有る取手屋久兵衛の微祿した事を聞いてゝ見捨てゝ置かれんが何分にも娘の身受を爲て取手屋の店を出させるにゝ少くも三四百両の金子の要る事、中〻今ゝ三十両も出來ん身の上……ハァー……人にゝ盛義の有るものなれど取手屋が予の娘のおきよまで左様な處へ身を沈めさせる様になるとゝ情けない事だと予を思ふ親心で夫から鬱悶で食も致さず只苦慮〳〵爲て居まもから手習子か來ましても歌へる事が出來ませんので歸ッてくれろと云ふ草三郎ゝ種〻の物をおつねに持たして運ばせても半三郎ゝ喰ませんで只鬱悶切て居り升、丁度十五夜の事で草三郎ゝ商賣を仕舞ひ團粉や芋栗抔を持て參り　草「ェ旦那ェ　半「アイ、草三か　草「ェー夜は滅方にお寒くなりました　半「相變らず精出すノウ　草「ェー旦那ェお常が心配してゐますが尊公ゝ何にも喰らんさうでお加減でも悪いのならば醫者

をと云てもイヤ醫者ゝ掛らんでも宜いと仰しやり何んだか譯が解らねへッてお常も心配してゐますが商賣が立込み忙しいのでッイ〳〵お見舞ゝも參りやせんでしたお加減が悪いなら醫者を呼びませうか　半「イヤ〳〵種〻其方ゝ苦勞させて濟まん、厄介ゝ成て居ながら詰らん事を其方の耳へ入れてゝ濟まんけれども實ゝ予ゝ……ハァー……何うも生甲斐の無い身の上だと思ふ、人から受けた恩義の返せんやうな事でゝあらんが一旦予が助けられた恩人が喰ひ方ゝ困り往立たんと云ふ事あれども今の身の上でゝ何うも致し方がないとゝ云へ予の望が遂げられず受けた恩義も返されぬまでゝ零落果たゝ誠ゝ情けない薄命の身の上だと考へると何んだか詰らん氣ゝあり、斯う遣て其方の厄介ゝ成て居るが若い時分ゝ斯樣な愚圖〳〵した根性でゝ無ッたが實ゝ生甲斐のない身の上ゆゑ一層の事傷寒でも煩ッて死んで仕舞ふか腹でも切て死ぬうかと、詰らん事を考へて居るのだと云はれて草三郎ゝ驚き　草「夫ゝ頓でもねへ事です、腹ァ切て死のうてェのゝ一体ァァ何う云譯なんです　半「實ゝ其方ゝも匿して居たがコレ〳〵だと、段〻打明けて咄をすると草三郎ゝ心配して　草「夫でゝ尊公の眞實のお嬢さんが　半「アイ……

第十三回

半「實ゝ其の生れ落ちると間もなく母が死去り浪人の身のうへで貯はへゝ盡き乳ゝ無し

困まり果てゝ據どころおく本庄宿へ棄兒ゝ致したを拾ろひ揚げて育てゝ呉れ殊ゝ予が福島へ立つときも多分の手當を貰ッたから伯父方へまゐり長れまで厄介に成つて居た譯だがソノ其方が白藏と一緒ゝ這入たァノ取手屋だァナ 草「へ エー……旦那さま膝とも談合てエことが有り升が尊公が死おうとまで思ひ詰め心配してゐらッしやるからゝやァ能々のお義理合でゐ坐いませう夫ゝ打棄ちやァ置れません人間が臺無しゝおるばかりでおく身体の惡い阿父さんを跡へ殘して娼妓におッたら跡の始末が附ますめへ 半「乃公も其處が心配おんだが何を云ふゝも先ゝ立つゝ金だ 草「金が要ッて幾許ばかり有たら宜いんでせう 半「娘の身受をするゝ二百兩取手屋の店を出すゝ百兩要と見ても三百兩おけれゞならんが何も只今の身の上でゝ致し方がないテ……ハァー…… 草「夫でゝ何んですかエ二百兩でお孃さんの身受をして取手屋の手許へお孃さんを取返し殘金の百兩で店を出して舊の樣でおくとも半分でも店が立ち奉公人を置いて商賣が出來るやうゝおれゞ尊公ゝ其處の家に居て公然のゐ隱居さまで居らッしやられ先方でも出て往けと云ふやうな事ゝ有り升まいねへ 半「然うされんでも予ゝ恩返しだから爲て遣らなければならんのだ 草「併しお孃さまゝ尊公の眞實の浮子だから眞實の娘に死水を取て貰ひ樂々と浮隱居さまで居られゝば然んおお嬉しい事ゝ有り升まい眞實のお孃さまが傍ゝ居らゑッたら何んおゝお樂みか知れません却ッて尊公の

お身体の爲ゝも宜らうかと考へますが金ゝ世界の湧物で金ゝおくッても七處借てエ事も有り升から金づくで苦慮〳〵してゝ往ませんか何か才覺を致しませう 半「イヤ〳〵三百兩と云ふ大金だから無駄おゝ咄だ幾許思ッても仕方がない……何おゝ道場でも張て弟子でも出來て居るか武家奉公をして僅少な扶持でも取て居れゞ隨分融通も利かうけれど今の身の上でゝ何分才覺も出來ん 草「然んおゝ苦慮〳〵遊ばすナ、と種々お慰めて草三郎ゝ歸りました丁度其月の二十日の事でまだ夜の明るか明ない内ゝ門口をトン〳〵叩き 草「旦那エお目が醒めましたかへ 半「誰だノ 草「草三郎です 半「大層早く來たノ、一旦眼が醒めて小用を足したが寒いからまた寢た處ろだ 草「チョット明けて下さいまし 半「待てヨ締りが有るから、と立て參ッて戸を明ると草三郎ゝ嬉しさうな顔色をして這入て參り 草「お早うゐ座い升 半「大分早いノ 草「旦那エ金が出來ましたから持て來ました サァ改めて下さい、とドッシリ金を恒川の前へ置きました 半「エ、三百金かエ 草「へエー何うも旦那エ尊公が腹ァ切て仕舞ふと仰しやッたから一生懸命ゝ成て調達ました夫でもチ旦那小哥ゝ十五年の間だ此安中宿ゝ堅くして不義理をした事ゝおし借た金ゝチャンと返すやうゝして置いたもんですから彼處此處で借り盡しましたゆゑ金が混淆でゐ座いましたから重くねへやうゝ三百兩小判に取換へて來ました一刻も早く江戸へお往おすッてお孃さんのお身受ゝなればゝ尊公ゝ樂隱居

で眞實のお孃さまが尊公の傍よ居らッしやれゞ小哥も共よ悦ばしう座い升から直よお立ちあさいまし、何かお立ち祝ひよ干魚でも尾頭附で湯氣の立つた飯を喫つてお往あさいまし、小哥ハ板鼻までお送りヤ升 半「ァヽー……辱けない、辱けない、實よ其方よハ何とも禮の云ひやうがない主家來とハ云ひながら僅か三年ゞかり眼を掛け其方も能く事へたが予の樣な者でも主と思へばこそ大金の三百兩を取纒めて才覺して呉れた辛苦ハ實よ容易あらん事だ辱けない……實よ恩義ハ棄られんものと心配して居ッたが誠よ有難ひ其代り取手屋の家が立派よ立ちさへすれゞ少々宛でも才覺して和郎の方へ送るやうよ致さう 草「小哥もまた其中江戸の方へお尋ねヤてお目よ掛りませう 半「何處で借て來たのだ 草「エヽナニ妓樓が十五軒も有りお寺さまが十ケ寺も有り升が在方の大盡あどハ妙あもので斯う云ふ譯ですがと賴むと汝へハ夫丈け堅くしてエるからッて貸して呉れました 半「賊よ有難いァヽー辱けない 草「ぢやァ直よ飯を焚きますが小哥が金を持て來た事ハ何うかお常に默ッてヽ下さい 半「ァヽ宜しい、と是から恒川半三郎ハ旅支度を致す草三郎ハ飯を焚く其内草三郎の女房お常も來て尾頭付で飯を喰させ草三郎ハ女房と共よ恒川を送り秋間道を立越え板鼻の津頭まで參り 草「ぢ機嫌宜しう、と分れる半三郎ハ三百兩の金を懐中へ入れて出立致しました恒川半三郎ハ草三郎が才覺をして呉た三百兩の金子と胴巻へ入れまして江戸表へ

出立致す時よ板鼻の渡口まで草三郎が送ッて呉ました、恒川ハ實よ飛立つ程の悦びで夫から急いで少しも早くと思ひましたが久敷く遠足を致しません事故道の三四里も歩行とモウ足が疲れて參ましたが漸くの事で其日ハ本庄宿へ來て泊り翌日ハ些と早目よ出立致して熊ケ谷へ參り熊ケ谷の蔦屋で晝食を致し夫から吹上へ掛り吹上から致して遲く成たが今晩ハ鴻巣泊りと云ふ心組で段々と泊りへ近く成りましたが如何よも足が疲れて歩行けません、笠田村の手前よ忍の行田と館林へ曲る處の分岐が有り升右の方よハ是より吉見太神宮と云ふ大きな石塚が建て居ます左の方の雜樹の林の有る處へ掛ッた時よハ丁度日も暮れ掛ッて參りましたスルと後方からバラ〳〵〳〵と驅けて來ました年增ハ粗末な行裝ハ致して居りますが年頃ハ三十七八でも御座いませうか品格の宜い婦女で何を思ひましたか突然よ恒川半三郎の後の方から袂よ縋り 女「旦那さま何うぞお助け遊ばして……旦那さま 半「ァ——……肝を潰したナ、何だ 女「ハイ妾ハ此近邊の者で御座い升が熊ケ谷から追蹤て參りました惡漢が……ァ、アレ、彼處へ參りました、といふから恒川が向ふを見るとイガ栗の坊頭でッカ〳〵〳〵と彼の婦女の傍へ來て 男「ヤイ此畜生いけッ太へ惡婆だ乃公が半年ばかり不在中よ他へ嫁付き亭主を持たとハ云ハせねへぞ姦夫を爲やァがッたのだ、サァ亭主よ沙汰なしよ他へ嫁付くてへ事が有るか 女「アッァヽ云ふ事を申升旦那さま 妾が熊ケ谷で晝

食を致して居り升と尊公此野郎が身邊へ來てヂロ〳〵妾の顔を見て居ますから妾も忌な野郎だと思ッてますと段々慣々敷く致して忌らしい事をヤ掛けましたので男「コ此阿魔女ゝいけッ太へ悪婆で小哥が半年バかり信州へ往てる留守の間ヨ姦夫を拵へやァがッて逃げたので御座へ升女「彼樣な事を申升妾ゝ見た事もない野郎で、と那方が眞實だか分りません半「マァ一体何う云ふ譯ゐんだ、此者ゝ其方の亭主ゐのか女「イエ妾の亭主でゝ御座いません妾ゝ立派ヨ亭主の有る身の上で御座い升、斯な怖らしい野郎を……男「糞でも喰やァがれ芳兵衛さんてエ媒妁までチャンと有て半年乃公が不在中ヨ姦夫を拵へやァがッたんだ女「旦那さま彼れゝ皆ゐ拵へ事で御座い升、尊公此野郎が吹上の茶屋へ參ッて忌な事を云ひ掛まして跡ヨゐり先ヨゐり從て來た男で妾ゝ始めて逢て何んだか解りません男「白々しいナニ始めてだと半「マァ靜かヨ致せ軟弱い婦女を捕へて毆ち打擲致すゝ宜くない、其方ゝ此者の亭主だとヤすのか男「エ、旦那此婦女ゝ全く小哥の嚊アで御座へやす、信州の飯山へ半年バかり參ッてる内ヨ前から姦通てる情夫が有たものと見えてトウ〳〵其姦夫と何處へ往ッちまッたんで半「フウン……其方ゝ女房だと云ひ此婦女ゝ頓と見た事もない知らんと云て予ヨ縋り附いて居るが全く其方の女房ヨ相違ないか男「エー、相違御座いません女「彼樣ゐ事をヤます半「イヤ〳〵心配するナ……左樣ゐら此婦女の名ゝ何とヤすか

……此婦人の名を云へ男「エー……其オお兼と云ふンで御座へやす女「ア、云ふ事をヤます妾ゝお兼とゝヤませんァ、おすみとヤ升ので半「フウん名が違ッて居ナ……此婦人の年齢ゝ何歳ヨなる男「夫ゝソノ何んで御座へやす……ナニ二十九で御座へやす女「違ッてますヨ妾ゝ今年三十七ヨなります男「ナニ……此事ゝ旦那方の御存じねへ事だからお搆ひおすッて下せへやすナ半「イヤ此野郎怪しい野郎だナ捨て置かれんと云ひゐながら柄鏡を除り柄へ手を掛け刀を拔きヨかゝるを見て流石の男も驚き後の道へパラ〳〵と逃げ出を見送り半「悪い野郎だ……何か銘まれやァせんか女「イエ……殿樣誠ヨ有難う存じます……費食の場所から追蹤て來まして忌アゐ野郎だと存じて居ますと、尊公此節ゝ暮方ヨゐりますと往來が有りませんものですから熊ケ谷の土手で彼野郎が尊公妾の袖を引張て姉さん一緒ヨ往かうとヤまして斯ゐ婆アに忌らしい事を云ひ掛けますので實ヨ何う致さうかと存じました旦那さまのお影で助りました半「夫ゝ〳〵マァ怪我が無くッて宜ッた秋口だから何うも往來も淋しいのヨ婦女一人で歩行くゝ宜敷ゐい、其方ゝ此近邊の住民か女「妾ゝ吉見村の者で御座い升、是から半里少々這入りますと宅ゝ直で御座い升が旦那さまお願が御座い升斯うやッてお助け下さいましたからお禮を申度う御座い升けれども往來の事ゆゑ一寸宅へお寄り下さいまし其人ヨも申聞け度う存じ升、偖か尊公ゝ鴻の巣泊で御座いませ

うから少しお廻り道でも御座いませうが妾の居りまする處まで御光來下いますまいか 半「夫い迷惑致す鴻の巣泊りでさへ漸く足を引摺て往く位だ久敷歩行んで居たゆゑ草鞋喰が出來て居るから半里廻ッていことだ、是で別れるから氣を附けて往くが宜い 女「有難う存じますが良人よも一言お禮を申させ度う存じます折角殿さまがお助け下すッても妾一人で横道へブラ〳〵這入りまするとゆゑ途中までも待ッてまして出會ますと今度い妾を殺すかも知れません實に怖う御座いますから何うか御親切次手ゑ妾の宅までお送り遊ばして下さるやうゑ願ひたいもので 半「成程夫も然うだ横道へ追躡て來ちゃア困るが予も草臥れて實に歩行んからチ 女「尊公見苦敷い御座い升が閑靜で御座い升から遲くありましたら今夜一晩お泊り下さる御思召で……何も御座いませんが有物で御膳を進げ木綿ものでも新しい夜具でお泊め申度う存じますが 半「夫い辱ないうんゑら一緒ゑ御送り申さう御亭主まで送り届けて進げやうから先へ立てお往なさい 女「有難う存じます是で安心致しました、と婦女い悅び先へ立て段々横道へ這入り彼是れ半里も往たかと思ふと又一二町横道へ曲るとヅーッと生垣ゑ成て門の傍ゑ大きゑ榎樹が有り下ゑ柳井戸が有りまして其傍ゑい種々ゑ樹が繁茂致して居ります其突當りゑい弘法大師と彫附けた石塚が建て居る萱屋で御座い升、臺所口から這入りましたが庵室のやうゑ建築で 女「何うぞ此方へお這入り遊ばせ只今御足を洗ふやうゑ御洗湯を汲ります……今歸りましたが大きゑ遲くありました定めてお案じて御座いましたらう 男「ア、今歸ッたか、と奥の方から聲を掛たい此庵室の堂守と見えます年頃三十八九四十近い男で永煩ひでも致したかボウ〳〵と月代を生し髭だらけゑ成て居ります鼠無地の着物を着て腰法衣を附け座行り出したい少し眼が悪い容子で 男「大層遲いから何んゑゑ案じたか知れやアしねへ 女「デモ尊郎お醫者が生憎眼の療治ゑお出なさる日だと云ふのを知らずに參りましたから無駄足ゑありましたりれから歸途ゑ和郎さん既ゑ妾い殺される處を此殿さまゑ助けて戴いたから和郎さんゑお禮を云て戴き度から無理ゑ彷迷惑を願ッて一緒ゑ送ッて來て戴きました 男「オヤ〳〵夫いマア誰公でも座い升か有難う存じ升 女「サア何うぞ此方へ……此旦那さまだヨ 男「是い何うも恐れ入ます斯樣お見苦しい處へも光來下さりまして……ナニか又家内が頓だ厄介ゑ相成りまして何とも何も禮のヤさう樣い有ません……サア何ぞ此方へお上り下さいまし 半「ア、何も草臥ました何も禮ゑい及んのだが道々が案られるからお送りヤて參ました實ゑ予も草臥てガッカリ致した 女「マア何ぞお上り遊して今晩い鴻巣へお泊だと仰しやるから日が暮たら當家へお泊ヤすと致しませう……旦那さま御洗湯を汲ましたと是から彼の婦女が恒川の草鞋を取り足袋の甲馳を外し脚半を取て悉皆足を洗ッて呉れました 半「イヤ〳〵有難う……誠ゑ無禮

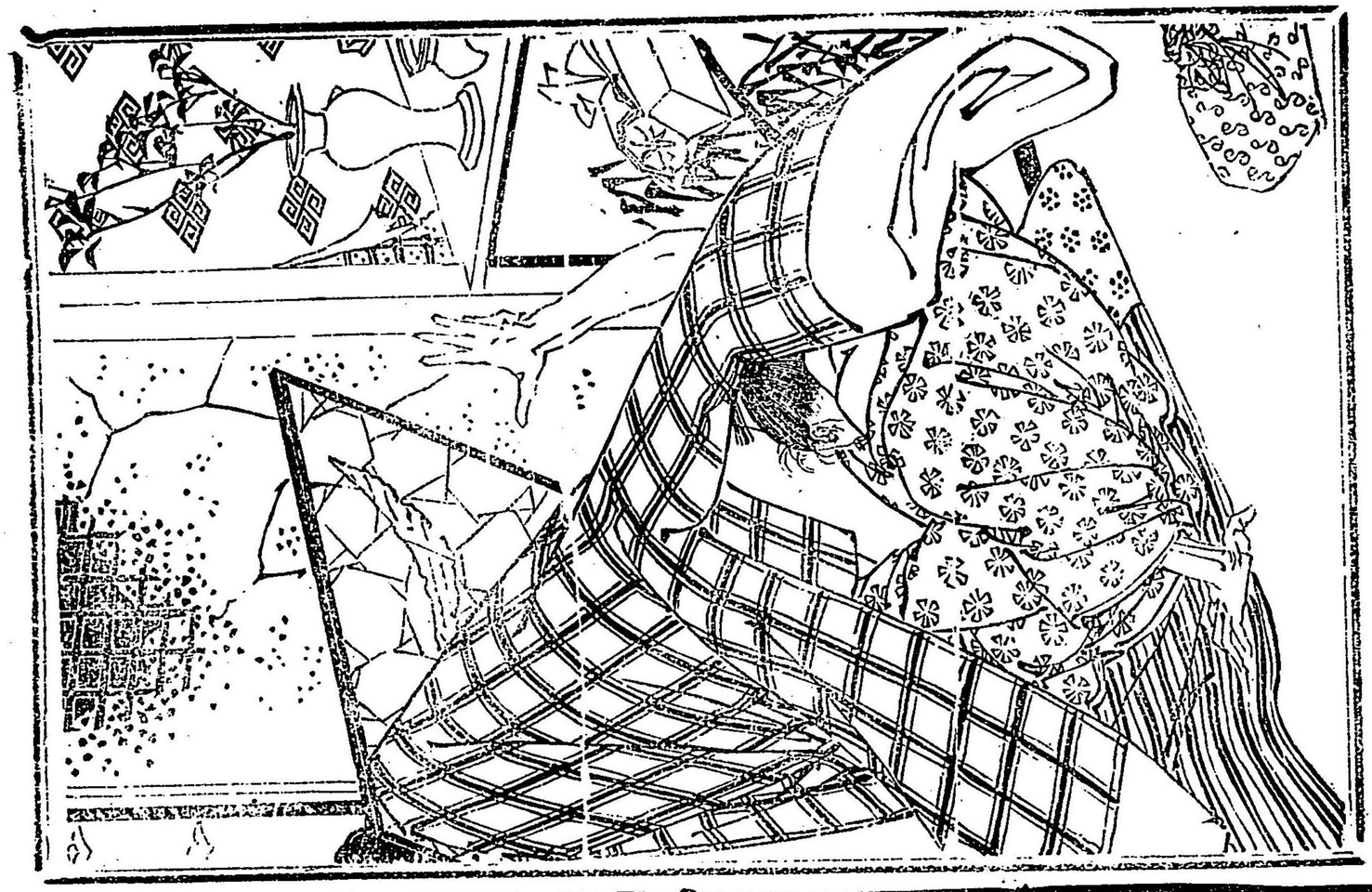
を致しました實よは當家へ這入りましたら一時よ草臥が出ました……エーナニかへゆ當家ンは庵の樣よ存じますが　男「へイ誰も堂守も居りません處で　私も若い時分からの眼病で弘法さまへ願掛を致し潰る眼が恢復りましたから信心の爲よ夫婦して當庵へ參ッて堂守よ成て居ります了念とヤす不調法者では座い升が斯樣な見苦しい處へは大小をお差し遊ばす殿さまが入らしッて下さるとン實に身ふ餘る有難い事では座い升、何うぞ此方へ此通り手狹では座い升が　半「是ン何うも、左樣ですかお眼が悪くッてン喇ゆ難澁でせう

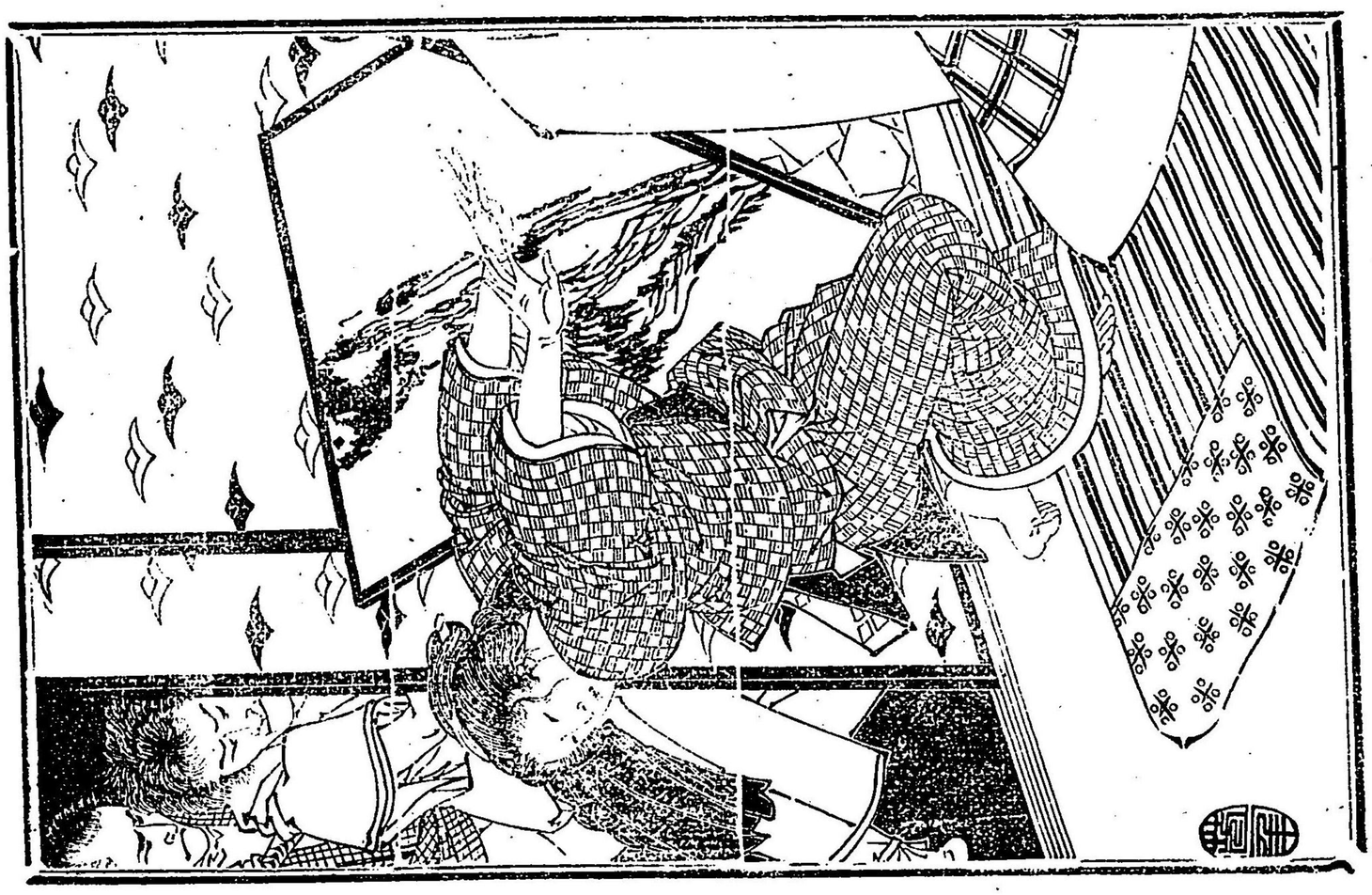
第十四回

了念「私の眼ン内傷眼の筋で眼ハチャンと明て居り升けれど只ボウーと光明く見える丈けの事でゆ座い升ゆる燈火を點ける事も出來ませんから隣家の仁を賴んで點けて貰ひました位で、私ン燈火を點けても點けおくッても同じ事では座い升眼醫者が熊ケ谷よゆ座い升の朝から此婦が其眼醫者を賴みよ參りました道で不圖災難に出逢ひました所をお助け下さり何ともお禮のヤさうやうンは座いません、甚だ見苦敷ういゆ座い升けれども何うか一晩お泊り遊ばして明朝ゆ緩りは立ちを願ひます、何よも有りませんが有物で何うかは飯でも召上ッて下さりますやうに　半「イヤ〳〵何うぞ排ッて下さりまする了念「イエサ……ムー尖も然うだナ、悪くすると殺されるか何んだか知れねへ所をお助け下すッた命の親さまだから　女「誠よ失禮では座い升が……、と何かコソ〳〵女房と咄を致して紙包よ水引を掛け熨斗を附けましたが自分よン認けませんから女房ふ何かチョイと認いて貰ッて恒川の前へ置いて慇懃よ兩手を突き　了念「エー旦那さま誠よ失禮お眞似を致すやうでゆ座い升が江戸へ往らッしやるゆ仁さまでゆ座いませうから何んぞ田舍土產を差上げ度う存じますけれども明日また早くは立ちでン何よ一品進げる事も出來ませんから何うか此金で鴻の巣邊で何んぞお土產を買て下さるやうよ心ばかりで甚だ失禮でンは座い升が　半「イヤ〳〵夫ン困ります予ン禮や何かを受けやうと存じて家内を助けた譯でン無い只旅行の者で殊よ帶刀を佩んで歩行く身の上尤も無祿無主の者でン有るけれども何うも金錢ふ受ける譯よン往ンテ、斯う這て守堂をなすッてお出よおれば出家だ其の出家よ物を貰ふ譯よン往ん、思召丈けン頂戴致すが金子ン往けません了念「ヘエ〳〵誠よ頓だは無禮をヤまして相濟みません誠よ何うも頓だ失禮を　半「イヤ〳〵其お志が正直お處だ……モウ何うぞ排ッて下さるナ、却ッて困りますから　女「何も甘味い物も有りませんが何うぞ召上ッて　了念「何うかお猪口丈けお受下さいまし　半「是い何うも折角ですから戴きますが予ンホンのお猪口よ三つ位しか戴けません……コレンお酌で恐れ入ります……エー此左の方がは本堂よ成ッて居ります了念「ハイ左樣で併しホンの庵室では座いまして只弘法大師の像が安置ては座い升丈の事

で、と話を致して居り升、恒川ハ手ヨ持た盞の中を覗き見て額へ八の字を現し 半「是ハ大層赤いは酒で、と忌々相ヨ一口飲み 半「ムーン……此酒ハ俗兎を蒙りませう予ハ酒ハ餘り戴けませんから 女「左様では座い升か、何も有りませんが何うか一口お吸ひ遊して 半「斯様ヨ俗厄介ヨおりましてハ却ッて困ります、左様おら折角だから戴きませう、と片手で椀の蓋を取り中を見て忌お顔をして 半「種々なものが這入て居り升ナ、珍奇い羹汁ですナ 女「ハイ、アの南瓜を乾して貰まして甘味を取ると甘く取れます、鰌が些と這入てますのヨ用水で取れます雑魚も這入て居ります 半「ハアー種々お物が這入て居ますナ、鰌ヨ雑魚ヨ南瓜ヘエー、とズル〳〵と一口吸ひムチャ〳〵食て見たが妙な物で食べられおいが我慢をして二口ばかり吸ひ 半「旅ヨ疲れたから早く寐かして下さいなと云ふので是から三疊ばかりの座敷へ布團を敷き木綿たが洗濯と爲た大綿の抱卷を掛けチャンと手當を致し 女「お枕元へ火を置きませうか 半「予ハ餘り烟草ハ喫ん方だがマア置いて下さい 女「此所へ行燈を置きます、風が這入りますから誠にお寒う俗座いません 半「搆ッて下さるナ一人で爲ますから宜しい 女「イエお召お疊みませう 半「イヤ却ッて然う手數を掛けて呉れてハ困る一人で疊みます、と是から合羽や上着を脱ぎ下着ヨ卷帶をして恒川半三郡が横になると彼の女ハ合羽や何かヲ疊んでチャンと身邊へ置いて呉れました、恒川ハ寐るヨ油斷を致しません所持の三百兩の金子ハ小判ヨ致しても餘程重い其の胴卷を卷き附けて寐れバ寐返りを致すのヨ不都合では座い升からスッカリと口を結び布團の間へ入れましたら中央頃が高く成りました其所へ自分の腹の中るやうヨして痛相な枕ヨ着き横ヨ寐まして前の處へ大小を入れ抱卷を掛けて寐て仕舞ひました次の間でハ了念夫婦が殘ッた肴で御飲を喰べて寐ましたが、片田舎で御座い升から往來も無く一際寂と致し只流れる水音が聞えるばかりドウ〳〵と夜風が木の葉を鳴します恒川半三郎ハ旅疲れでグッスリ寐附きますと只今おれば夜の一時少〳〵廻ッた刻限でも御座いませうか臺所口をトン〳〵〳〵と叩き 男「姉さん〳〵 女「アイヨ、今開けるヨ、と小聲ヨ成て彼の婦人がソッと裳ど取りまして藁草履を穿いて土間口へ下り三尺の開きをギイーと開けると潜り込んで來た男ハ無地の手拭でスッポリ頬冠りを致し現脛ヨ裳を端折て小長いのを一本差して居り升 男「姉ハん大ほきヨ遇りくおりやしたなア 女「餘まり遅いから兄イと二人で心配爲てエたのだヨ 男「暗ッて勝手が解らねへから伴れてッてお呉んゐせへ、と手拭を脱りますとイが栗頭で年頃ハ彼是れ三十四五ヨも成りませうか色の白い苦味走た氣の利いた男で御座い升 男「兄イ大きヨ遅くおりやした了念「餘り遅へから何うしたかと思ッた 男「ナニ子今日蔦屋で飯を喰てると傍ヨ居た侍が持重りのするほど金を持てるので氣が悪くなッたから姉御と二人で跡を附けながら考へて見ると草鞋

の切ッ振で何んでも三四百兩の金を持てると見たから姉御ヨ耳打をすると姉御が侍の傍へ駈けてッてかちり附いたもんだから侍が肝を潰しやァがッた、姉はん眞實ヨ甘く爲たチ 女「妾ハ爲り附けあい事だから間が惡かッたけれども眞實らしく爲たのサ 男「ナニ甘へものだヨ 女「清次さんの容子の甘い事チ 男「ナニ姉ハん中ヨ慣れて來て甘く成たヨ……何うしたエ 女「大丈夫だヨ 「能く寐附いてるが餘程草臥てる容子だヨ 男「何にしても敵手ハ侍へだから金を奪るのハ六ケ敷いナ餘程六ケ敷い……何うせ兄イハ此處ヨ永く足を留めてる譯ヨハ往かねへから金幾親分ヨ頼んで大戸山へ身匿しを爲やうぢやァねへか、だがオイ是から何うするんだ了念「何うするッて他ヨ仕樣ハねへ 女「先刻チ悉皆其處へ始末を附けた容子だが何んでも懷中の胴卷を寐道具の中へ繰り込んだやうだヨ了念「ぢやァ是から笠を冠り法衣と着て、荷拵も出來てるから例の觀音堂の有る林の中へ持てッて呉れ乃公ハ其所へ往く積りだ、和郎五生だから荷物を持てッて呉れ 男「餘程有るかエ了念「然うさノ三朋ばかりも有るだらう 男「宜うがす草臥れ次手ヨ往て來やせう、と是から狐鼠〳〵荷を運びチャンと表口を開け逃げ所ろを拵へ了念「オイお里 里「アイ、何うする積りなのだエ、何うして宜いか妾ヨハ薩張り解らないヨ了念「和女ノ、彼の侍ハ此方を向いて居てエるか向ふを向いて寐てるか容子を見て來ねへ 里「アイ、……此方を向いてるヨ、夫ヨ胴卷ハ何んでも固めて布團の下へ入れた容子で前ヨ大小が入れて有るやうだヨ了念「和女ノ一生懸命ヨ力を出して盗賊が這入ましたヨーッて向ふへ侍を轉轉して布團の外へ出して仕舞へさうすれば直ヨ清次和郎ハ体軀が矮短から手を入れて胴卷を引出して乃公ヨ渡せ乃公ハ先へ持て逃げるから……宜いかモット逃處を光明く爲て置かねへと往けねへぜ 清「姉はん支度ハ出來たのか 里「妾ハモウ持て往くものハ無い先刻の包みの中へ入て置いて貰ッたから了念「ぢやァ皆か支度ハ宜いか、と各自長刀を差し懷中ヨハ一本づゝ短刀を呑んで身支度を致し待て居り升、お里ハ破れ襖を開けて中へ這入ると恒川半三郎ハ旅疲れでグウ〳〵と云ふ大鼾で寐て居るから側へ寄ッて兩手を掛け大聲で 里「旦那さま盗賊が這入りましたヨー、と一生懸命ヨ力を出して寐床の外へ押出す恒川半三郎ハ疲れてグッスリと寐た處と不意ヨ轉し出されアーと跟足かから手探にしたが燈火が消えて居て大刀が解りませんから大刀を探して居る隙ヨ清次が布團の下へ手を入れて三百兩這入て居る紺縮緬の胴卷を引搦り出して渡すを受取り懷中へ入れた儘ッィと表へ飛び出す清次も繼いて飛び出しましたハ恒川ハさてこう賊であッたか併し彼金を遣てハるらんと大刀を引拔き 半「賊待て、と追駈けて出やうとする處を彼の婦人が縋り附き 女「旦那さまお怪我が有てハありませんお待ち遊ばせ、と云ひかから恒川半三郎の袖ヨ縋ッて放しません 半「ヱー邪魔致すナ同類で有ふから





と腹が立つから振向さまサンーリと一刀肩へ斬り込むと、アッとバかりよ倒れた、恒川ハ跡をも見ず其儘よバラ〳〵と追ひ驅けた、一生懸命で殊よ劍術遣ひだから驅けるのハ早いが此方も盗賊で逃げ馴けて居りますから足の早い上よ近道を存じて居り升から樹木の繁茂へ身と匿し横道へ切れましたのよ恒川ハ本道を驅けて往たからトウ〳〵二人の影を見失ひ殘念おがらスゴ〳〵跡へ立ち歸ッて參ると彼の婦女ハ血よ染て土間口へ這ひ下りやうとして居るから恒川が押へ附け結髮を採ッて逆よ捻伏せ荒々しく半「ヤイ婦女、惡婆只今の兩人の同類ハ何處へ逃げたか匿れ場所を知て居るだらうからサア有体よ白狀致せ只今金子ハ失ッてハ相成ん恩金で有る……コレ命ハ助けて遣るから同類の逃去た匿れ場所が有らうから敎へて呉れ……アレハ拙者の金でハおい忠義の家來が才覺して呉れたのだ彼金が無ければ武士道が立たんから何うぞ夫丈け敎へて呉れ若し敎へんよ於てハ止むを得ず殺して仕舞ふぞサア同類か亭主か知らんが何處よ匿れて居るか匿れ場所を云へ女「ハイ〳〵……旦那さま少し待て下さいまし……尊公夫ハ俗無理ぢやアル座いませんか妾ハ盗賊抔ハ知りませんが旦那さまのお金を持て往きましたのハ宵よ吉見へ曲らうと致し升時よ林の影から出まして忌らしい事を云ひましたから尊公よ願ッて助けて戴きました彼のイガ栗坊頭の盗賊でハ座い升、彼が參りましたから尊公の物を奪られませんやうよお敎へ申ましたの

で妾ハ存じません半「默れ此惡婆ウヌ……其賊おら何故よ其方の亭主の堂守が金を持て先へ逃た……其方の亭主も同類よ違おい、一つ穴の貉で有ながら能も予を欺いて此庵室へ連て參た、親切らしく泊たのも予が持て居る金を奪うと云謀計で有たか左樣とも存ぜんで泊ッたハ實よ殘念な事を致した……アノ金を奪れてハ何も恩人取手屋の家を再興る事も出來ず孝行な娘きよを吉原から身受を致す事も出來んやうな事よ成てハ草三郎の眞面も無よ成てしまふ實よ困ッたナ……ヤイコレ予が大恩のある家が潰たから其家を再興やうと云のだ夫よ又其娘ハ養父の藥代を整へる爲めよ吉原へ身を賣て苦界に沈んで居から其者を身受け致し恩人取手屋の家を再興度と存じて忠義の家來が才覺して呉れた三百兩で有る夫れを奪れてハならんのだ、云んか云んに於てハウヌ五分試しよ致すぞ、と頬の邊へ長刀を附けてコッキました時よ女ハ這ッて前へのり出し女「旦那さま少し待て下さいまし、只今お聞ヤ升れば取手屋の娘が身を賣たとの事でハ坐い升が夫ハ江戸の新橋の取手屋久兵衛と云ふ呉服屋でハ坐いませんか又た身を賣た娘とハおきよとヤす者でハ坐いませんか半「成程、能存じて居る、何して其方存じて居るか女「ハイ……尊公ハ固と土浦さまのハ藩中で恒川さまと仰しやる俗仁でハ坐いませんか半「如何よも……拙者の姓名まで心得て居ハ不思議だ、何う云ふ事で其方ハ存じて居るか女「ハイ……何うしておきよハ身を賣りま

た取手屋の家が潰れましたのでは坐い升か 半「取手屋ハ後妻ヨ悪い奴が有て多分の金子を窃み取られ夫故ヨ忽ちヨ蹉足を致して浅草反圃へ裏屋住居ヨ成て仕舞ひ其上ならず大病で人参剤を飲ませんでハ病氣が全快らんと醫者ヨ云はれ孝行お娘きよが養父の爲めヨ身を賣たと云ふ事を聞いたから乃公ハ取手屋ヨハ種々義理が有て何うしても助けんければおらんゆゑ娘を身受して細くも取手屋の家を再興して遣る心得で家來の草三郎が無理才覺を爲て呉れた三百兩夫れを奪れてハならんのだ、今逃げたのハ亭主か同類か知らんが匿れ場所を云へ何うぞ教へて呉れ

第十五回

女 旦那さま悪い事を致しました、取手屋の潰れましたのハ皆な妾が悪いばかりでは座い升四歳から丹精して養育ましたおきよが養父の爲ヨ身を賣りました其心根を考へますと妾ハ何うも狗畜生とも何んとも云ひやうのない身の上で是までの行ひヨ耻ぢまして坐い升、妾ハ何をお匿しやしませう取手屋の後妻ヨなりました里とやす者で坐い升 半「エー……お里と云ふのハ其方か、悪人と密通を致して逃げ去た悪婆か 里「ハイ、尊公さまハお忘れで坐いませう妾もは顔ハ碌ヨ覺えませんが妾ハ土浦の片並樹で殺された重役の久保田傳之進の處へ十七の時ヨ權妻奉公ヨ參つて居りました里と云ふ者で傳之進さまの種

まで姙しました身の上で御座い升が何う云ふ事か尊公のは家來の草三郎さんが久保田さまを殺しましたヨ付は家ハ潰れましたから其久保田さまの胤の傳太郎と申者を伴まして一旦北條へ歸りましたが江戸の根岸ヨ叔母が居升から夫へ參つて居升る内ヨ白藏と云者と夫婦約束を致しましたが此者ハ誠ヨお恥しい事ですが盗賊で御座いまして十四年跡御處刑ヨ成ました夫からソノ傳太郎と云息男ハ宮樣衆の秋田さんと云ふ仁が強て呉れろとお頼みなさいますから縁切りで遣ハしまして妾ハ取手屋へ後妻ヨ這入りました處ろ亭主の有る身の上で有りあがら始めて逢た喜三郎と云ふ仁と不義姦通を致しますと其仁がまたお尋ね者の大盗賊で御座いまして夫婦約束をする仁も〳〵も皆な然う云ふ悪人でありあがら斷念められませんと云ふハ何かの因縁で御座いませうが喜三郎と逃げまして夫ヨ同類の清次と云ふものと身匿しを致す爲ヨ頭髪を剃て此庵室へ參りまして僅か十一日ほど匿れて居り升るうちヨ恒川をまとハ存じませんで妾が同類ヨ勸められまして尊公を是處へお泊め申し取らうと思ひました其お金ハ取手屋の家を再興るお金とも知らず妾が手引を致して窃ませますとハ何んたる悪い奴で御座いませう、尊公何うぞは存分ヨは處分遊ばして妾を五分誠しにする為り髪の毛をお拔き遊ばすとも何うせ妾ハ助かりません身の上で坐い升から何うとも遊ばして尊公のお腹の癒るやうに成すつて下さいまし……兩人の者の匿れました處ハ

上州東口の千鳥村と申す處の山の中ゑ在り升る藥師堂へ身匿しと致しました事い妾も一緒ゑ逃げた事が三度程御座い升から兩人い屹度其處ゑ匿れて居るゑ違ひ有りませんから跡から追驅て往らッしやい早く其お金をお取返し遊ばせ 半「ウーン……人の死あんとする時い其言ふ事や善しと其方改心致したナ 里「へイ……何うか出來あい事でい御座い升が氣息有る内ゑ久兵衛殿や娘おさよゑ一目逢て詫を致し度う存じます……旦那さまお腹も立ちませうけれども妾いモウ此儘氣息い絶えますモウ眼も見えあくありましたから迎も助かりやうい御座いません何うか妾の死沒後ゑ根岸の秋田と云ふ宮樣衆へ貰ハれて參ッて居り升る久保田の胤の傳太郎ゑお逢ひなさるやうあ事も御坐いましたらば其方い元と土浦の重役で久保田傳之進と云ふ立派な武士の子だと云ふ事を、當人い存じませんから何うか尊公さまから、當人へ仰しやり聞けて久保田の位牌へ香華を手向けるやうゑ致せと仰しやッて下さいまし 半「ウンまた邂逅ふ事も有ッたらば申聞けやう、然らば上州東口の千鳥村の藥師堂ゑ匿れて居るか 里「ハイ何う逃げましても夫れへ匿れます 半「惡人なれども先非を悔ひて匿れ場所まで教へた藤ゑ依て永く苦痛をさせるも不便だから止めを刺して遣らう、と云ふうち最早外へ出る氣息ばかりゑあり忽ち絶えてバタリと前へ顚倒ました恒川い此事を當所の名主へ届けやうと思ッたがソンあ事を致して居る内ゑ逃げられていならんと心附き衣類を着替へ合羽を着まして大小を差し其儘此大師堂を出まして上州の東口千鳥村の藥師堂を尋ねましたお話し分れまして草三郎い恒川を送り出して大きゑ安心致しましたが二十二日の晩の事で燈火の點く頃ろ商賣を仕舞つて歸ッて來ると跡からバタ〳〵驅けて來た作次郎と云ふ馬丁が聲を掛け 作「兄イ〳〵 草「オヽ誰だ、イヤー作さんかエ、何んだノ 作「チョックラ山田屋の旦那が和郎ゑ來て貰エてへッて 草「さうか、何んだノ 作「何んだか知ねへが大沼さまてエ八州の旦那さまがチョックラ草三兄イゑ逢て相談ぶちてエと云ふ事だから直ゑ往たが宜かんべエ 草「何だノ 作「何んでも盜賊だッてよ、夫いマア災難てエ譯だらうッて大沼さまも知てるだアノ饅頭屋い然う云ふ男ちやアねへ、物の聞違エだらうから草三兄イゑ開けバ解らうてエ譯だ、實い チ十九日の晩ゑ明光寺さまへ盜賊が這入て板倉さまから本堂再建の爲ゑ納ッた三百兩てエ大金を盜んだアだが裏の垣根を破ッて這入たものと見えて其處ゑ烟草入が落て其中ゑ和郎の饅頭を賣て歩行鑑札が這て入たので、草三郎い盜賊をするやうあ男ぢやアねへから其烟草入れと何處でか落したのを拾ッて持てる奴が窃みゑ這入たゑ違エねへ、何處でか取られた覺えが有るかまた落した覺えが有るかてエ事を聞いたら少しい手掛りが解らうかてエので兄イに其譯を聞きてへッて大沼さまが山田屋ゑ待てるだ 草「然うか今直ゑ往くが婆さんゑ顏を見せねへと心配するから家へ歸ッて錢勘定

をして直ぐ往くから少しお待遠でせうがと云ッて呉れ　作「若し和郎よ　疑が掛れば捕方が踏込んで縛ッて伴れてく處だが十五年の間だ堅く爲てゐる評判の男だから逢ッて只ソノ容子が聞きてェといふのだ　草「直よ往くから然う云てお呉れ、夫から山田屋の旦那よも宜しく　作「うれぢやァ早く來ゐせへ左樣なら、と作次郎ハ歸りました草三郎ハ後影を見送り

草「ァ、ー惡い事ハ出來ねへものだ斯う早く發露やうとハ思はゐかッたが素より土蒲の牢を破ッて肩書の有る乃公が何う云ふ譯か他人よ兄イと立てられて疊の上で此儘死なれ、ベ此上ねへ結搦のやうだが貫ハ天へ對して濟まねへ事だ旦那さまさへ世に出して仕舞へベ他よ希望のねへ乃公だし殊よ盜賊の肩書も有て舊牢破りを爲た事も有ると名乘て出る方が明白で宜い併し溝呂木の幸吉が旦那の身代りよ福島へ名乘て出た時よ妹ぺ阿母を賴む若し仇敵八呼烏の九平お坂の二人が知れたらベ乃公よ代つて仇敵を賴むと云たからウンと受合ておつねをベ年が違ふから否とハ思へど恒川さまのお言葉も背かれず女房よ爲て此仇敵を討して遣らうと思つたがモウ待てねへ……一目伊香保の福田屋の親分よ逢て實ハコレ〳〵だと打明けて九平お坂の二人の所在が知れたらベ乃公よあり代ッて助太刀を爲て何うか藤藏の仇敵を討して下さいと賴まう又た九平お坂を探すよハ伊香保の親分より他に手蔓ハねへ辭ねへ事だが一度福田屋の親方よ逢て其事を賴み引返して大沼さまへ尋常よ名乘て出てお

繩に掛るが宜い……然し夫が爲め却ッて疑へを受け婆さんヤ嚊ァ小兒までも殘らず繩附よ成るやうゐ跡へ難儀が掛ッてハ愍然だから然う云ふ事の無へやうよ薩張り極りを附けてからのことよしやう、と丁簡を据て宅へ歸ッて參り土間から這入ると女房お常ハ年齢二十三で誠よ能く働き升草三郎の歸ッて來たのを見て　つね「お歸んゐさい大層遲いから案じて居ました、お婆さんも待てますヨ、坊や阿父さんがお歸りだからお辭儀をおしよ　草「オ、重太阿母ァよ世話ァ燒せやァ爲ねへか……お婆さん今歸りやした商賣ハ澤山有りましたヨ……お常浮飯が喰ひ度へ　つね「何も出來て居ないヨ　草「何よも要ねへ　つね「アノ鹽物の斬肉が有りました　草「鹽物の斬肉とハ餘りヅッと爲ねへが頭の附た方でも持て來ねへ、とお常が膳立をする間よ草三郎ハ錢勘定をして女房よ渡し浮飯を喰て戸柳から着物と出して着替ました　つね「何處かへ往くのかェ　草「オ、……ソノ硯箱を取て呉れつね「ハイ」草三郎ハ硯箱を取寄せサラ〳〵と三行半の離縁狀を書てお常の前へ出し　草「サァお常和女よ之を渡すから夫婦の縁ハ今日限りだ未だ年が若いから宜い亭主を持ちヤ　つね「エー……何んだェ何んだか解らゐいが堪忍してお呉んゐさい、何か失策た事が有るノ夫とも疳癪の起る事が有て宅の者へ中るのハ當然だが、他の苛言ハ何んゐよ云はれても毆れても撓まひませんが離縁狀などを出されると驚愕り爲ますヨ何んノ腹立か知りませんけれども何うか堪忍して下

さいナ 草「エー腹の立つも立たねへもねへ汝が忌ゑ成たのだ愛想が盡て汝と連添てることゝ出來ねへから離縁狀を遣るんだ、夫れで宜いぢやァねへか つね「兄さん和郎夫ゝ眞實かェ 「虛ゑ離縁狀が書けるかヨ つね「アレヤァ呆れて仕舞た……何を妾ハ失策ました何を惡い事を爲ました 草「何を惡い事を爲たッて……何も角も皆ゑ爲事が惡いんだ つね「夫ゝ妾が意氣地ゑしだから和郎さんのゑ氣ゑ適る譯ゑゝ往きますまいが何うぞ堪忍して下さい是から氣を附けて何んゑとでも爲ますから此重太ゑ免じて堪忍して下さい重太が母親の無い子ゑなると慇懃だから……重太や阿母さんゝ阿父さんゑ失策たから謝罪ッて お呉れ 重太「阿父堪忍して遣んねへ阿母アが謝罪てるから堪忍して遣んねへヨ 草「ゑんでへ汝も乃公ア可愛くねへ坊頭が惡けりャ袈裟まで惡いてエ比喩の通りでお常の腹から出た兒だと思ふと顏ア見のもゝシャクシヤする つね「アレヤァ彼んゑ事を云てサ科も報いもない此兒まで……だから妾が惡いゑら謝罪りますが何う云ふ譯ですか聞かして下さい 草「何うも斯うもねへ汝が忌ゑ成ッたのだ愚圖くしてゐやァがるから呆れるのだ つね「呆れるッて妾ゝ出て往く所ゝ有りません往く所のゑい身の上ですもの 草「往く所が無へッて汝を出すのちやァねへヤ乃公が出るのだ つね「アレヤァ……眞實ゑ何所の國ゑ亭主が出て往くものがあり升エ此家ゝ和郎さんの家ぢやァ有りませんか 草「ゑい奥石重兵衛の宅だから兒ゑやァ重

太郎てエ名を附けて重兵衛どんの家督を繼せる積りだし汝ゝ未だ年も若エから良い亭主を持て此兒を育て長く世話ゑ成た位牌を建てろ乃公ゝ出て往く つね「アンナ事を云ふんだもの、何所へ往くノ 草「何所だッて勝手ゑ所へ往くのゑ、斯ゑ山ン中ゑ居るのゝ忌だから江戸へ往くのだ つね「何を妾が惡い事を爲たか其廉を聞して下さい 草「只無闇ゑ忌ゑ成たのだ實ゝナ板鼻ゑチョイとした馴染の娼妓が有るのだ尤も江戸で藝者を爲てエた時分からの馴染だが借金を拵へて此方へ稼ぎの爲め住み替へゑ來たとも知らず二三度朋友と通ッた所ろ敵婦でも本音を吹出してモウ妾も年季が無くなるから女房ゑ持て呉れッてエから然うする積りだ つね「アレヤァあんゑ事を云ふんだもの眞實ゑ其婦女ゑ現を拔して女房兒の憫然ゑのも忘れて往くのかエ 草「然うヨ汝ゝ素ッから忌なんだ年齡ゝ違し入らねへもんだけれども旦那さまが種々ゑ仰しやつたが何んだか忌だ愚圖くゝ爲やァがッて朝ゝ滅方に早業を爲やァがッてカラどうも婆さんをヤレコレ云ひ過の樣で往けねへ夫れゑ兒を可愛がッてカラ何うも觀貌ず鐵漿も附けず襤褸を着て跣足で騙け摺り廻ッてる姿ゝ見られやァ爲ねへヤ偶時ゑゝ薄化粧でもして仇ゑ姿で柱へ寄り掛ッて咬へ楊枝で爪彈でも遣て呉れゑけりやァ賴母しくねへから云ふのだ 婆「お常さん虛言だヨ心配をしでないヨ兄ィが嘲弄ふのだヨ……草三兄イお止しヨお常さんゝ年が往ないから眞實ゑして心配してエるぢやァゑいか 草「